

龍の転生者と魔物達の
転生記 決闘符録

龍牙

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

龍の転生者と魔物達の転生記のプロローグから分岐する別ストーリーにして龍の転生者シリーズ第二弾。遊戯王デュエルモンスターGXの世界に転生した総麻の物語はどうなるのか？ 魔人の力は、爆丸は意味有るのか!? バトスピのカードはデュエルモンスターズに変化しました。この作品はすぴぱるにも投稿していません。タイトル変更しました。旧題『龍の転生者と魔物達の転生記 if | 遊戯王GX・クロス・BSP |』

目次

デュエルAD入学編

- TURN—01 『DA試験 咆哮せよ、
龍皇ジークフリード』 ————— 1
- TURN—02 『アカデミアの洗礼、白
亜の城砦、鉄騎皇イグドラシル
22
- TURN—03 『天を切り裂け紅蓮の
雷、雷皇龍ジークヴルム』 ————— 41
- TURN—04 『月一テスト、動き出す
闇』 ————— 66
- TURN—05 『廃寮での決闘(デュエ
ル)、敗北と決意』 ————— 84

TURN—06 『悪魔の宴、立ち塞がる
魔界七将』 ————— 94

TURN—07 『天を切り裂け炎の流
星、龍星皇VS魔龍帝』 ————— 110

閑話01 『精霊界への導き、光導の神』
————— 135

TURN—08 『恐怖と導き』
144

TURN—09 『恐怖を打ちぬけ、龍星
皇メテオヴルム』 ————— 159

TURN—10 『森林の覇者』
179

TURN—11 『並び立つ赤と緑』

獄龍編

閑話02 『獄龍』

TURN | 1 2

TURN | 1 3

238 216 210

デュエルAD入学編

TURN—01『DA試験 咆哮せよ、龍皇ジークフリード』

「はあ……」

緋勇龍斗、異界王、ファーフニルの三人（？）に転生させて貰った彼『天風 総麻』は思わず溜息を吐く。

現在自分が居る世界は「遊戯王」と呼ばれる漫画の中の世界で有り、貰った力の大半が役に立たない世界だろう。直接的な戦闘力に位置する「魔人」達の《力》もこの世界ではあまり意味は持たず、まだ届いていない爆丸達も同様である。

バトルスピリッツのカードもそうだと思っていたが、何故かそれらのカードはモンスターに位置する「スピリット」のカードの何枚かだけは遊戯王の世界のカードに変化していた。……この時、バトスピのカードをくれた異界王には心から感謝した。自分の持っているカードも幾つかは存在してきてくれたので新たなデッキも作り易かった。

さて、総麻はその日、デュエルアカデミアを受験する為に童実野町の海馬ランドを目

指していたのだが、電車の事故により足止めを受けていた。

「はあ……運がないな……」

受験会場への事故で足止めを受けている旨での電話連絡は終わっており、事故証明書も貰っているのだが、

(あー……时期的に十代達の時代……じゃないよな……?)

セブンスターズ、光の結社、ユベル、ダークネスと危険極まりない事件が重なる年である事を考えると頭が痛くなる。幸いにも最も危険であろう、ユベルの事件でも龍斗から貰った「魔人」達の《力》が有れば十二分に生き残れるから心配は無いが、それでも一度死を経験した彼としては危険からは逃れたいと思ってしまう。

それなら、デュエルアカデミアに行かなければ良いと思うだろうが、それでも、純粹にデュエルモンスターを楽しみたいと言う気持ちだけは裏切れず、デュエルアカデミアに行く事になったのだ。可能性としては、十代達の年代とは違うと言う可能性も有ったのだし。

そんな事を考えている間に一時間ほど過ぎて待って運転が再開した電車に乗り込み、総麻は受験会場に向かう。

(……まあ、精々今を楽しもうか……お前達)

試験に使う予定のデッキに触れ心の中でそう呟くと、総麻の背後に現れた半透明の二

体の真紅のドラゴン達が彼の言葉に答える様に唸り声を上げながら頷く。

総麻が海馬ランドに着くと丁度、受験番号1番の『三沢 大地』のデュエルの決着が着く所だった。三沢は自分フィールド上に存在するブラッドヴォルス（攻撃力1900）にモンスターを破壊し、互いにその攻撃力分のダメージを受ける罫カード『破壊輪』を使い、試験官に勝利する。

もう少しダメージを受けライフが1900を下回っていけば、同じ手では引き分けにしか出来なかつただろう。その時は他の手も考えたのだろうか、そう考えると危なかつたと考えられる。

（あー……やっぱり、今は十代達の……GXの時代か……）

そう考えるとGXの主人公である『遊城 十代』の原作通り、『クロノス・デ・メデイチ』教諭を相手にした実技試験が始まっている所を見て、未来への不安が大きくなる総麻だった。

「くらえ！ 『スカイスクレイパー・シユート』！」

「マンマミーア！ 我が『アンティーク・ギア・ゴレム古代の機械巨人』があー！」

崩れ落ちる『アンティーク・ギア・ゴレム古代の機械巨人』。さらに十代のモンスター『E・HERO フレイム・ウイングマン』の効果により破壊したモンスターの攻撃力分の効果ダメージを受け、合計3100のダメージを受け、敗北するのだった。

そして、僅かな時間を挟み、総麻の試験へと移った。相手は十代に続きクロノス教諭。
（……オレを相手に名誉挽回とか考えているんだろな……）

（名誉挽回ナノ〜ネ、こつちのドロップアウトボーイだけでも、ボコボコにしてやるノ〜ネ）

総麻の想像通りだった。付け加えておくと総麻の受験番号は5番。流石にこの世界と関係ない自分が下手に行っても拙いと考えた結果、多少試験の終わり手で手を抜いた結果であるが。だが、勝利できれば、十分に名誉挽回になるだろう。

「準備は出来たノ〜ネ？」

「はい。それじゃあ、お願いします。」

「デュエル！」

総麻 LP4000

クロノス LP4000

「先行は上げるノ〜ネ」

「それじゃあ、遠慮なく頂きます。ドロロー！」

手札のカード六枚に視線を向け、戦術をくみ上げる。

「オレは『地龍 サーベカウラス』を攻撃表示で召喚！」

『地龍 サーベカウラス』☆4

属性：火

攻撃力1400／守備力1200

ドラゴン族

効果

このモンスターは恐竜族としても扱う。

このモンスターがバトルする時、攻撃力は400ポイントアップする。

「そして、カードを一枚伏せてターンエンド」

総麻のフィールドに現れるのは剣の様な角を持ち鋭い突起物が緑色の恐竜の様なモンスターが現れる。

「私のターン、ドロー。ニヒッ」

良いカードを引いたのか笑いを浮かべるクロノス教諭。戦闘時のみとは言え攻撃力が実質1800のサーベカウラスは簡単には倒せないだろうが、

「トロイホースを召喚。さらに魔法カード、『マジック二重召喚』を発動するノ〜ネ」

「地属性のダブルコストモンスターで召喚権の追加……来るか、さっきの切り札」

「その通りノ〜ネ。流石は試験番号5番、頭が回るようノ〜ネ。私は、トロイホースを生贄にして、アンティーク・ギア・ゴーレム古代の機械巨人（攻撃力3000）を召喚するノ〜ネ」

先ほどの十代とのデュエルで登場した最上級モンスターが現れると、観戦している者達から一斉に歓声が上がる。3000の攻撃力と魔法・罠を防ぐ効果と貫通効果を持っているが、特殊召喚はできないモンスターだが、こうも簡単に最初のターンから存在されると厄介この上ないモンスターだ。

「ウォーツホホホッ!! 行くのでス〜ヨ! アルティメット・パウンド!!」

「くっ!（伏せカードは『くず鉄のカカシ』…アンティーク・ギアゴーレムの効果で発動できない!）」

振り下ろされるアンティーク・ギアゴーレムの拳に果敢にサーベカウラスが向かつて行くが、攻撃力の差は歴然、簡単に粉碎され、総麻は超過ダメージを受ける事となる。

総麻 LP4000↓2800

「私はこれでターンエンドナノ〜ネ」

(ああ……これだよな……)

自然と笑みが零れる。今の手札ではアンティーク・ギアゴーレムは倒せない。だが、それでも、今此処に心からその状況を「楽しい」と感じてしまう自分が居る。

「どうしたんデス〜ノ、あなたのターンなノ〜ネ」

「すみません。オレの……ターン！」

今の自分のデッキでアンティーク・ギアゴーレムを倒す事の出来るモンスターは限られる。確かにそのカードを引き当てる可能性は低い。

だが、その一枚のドロ〜ノによって、たった一枚のカードで勝負が左右されるのが、このデュエルモンスターズと言うゲームの楽しさ。

(来た！)

先ほどドロ〜したカードに視線を落とし、待ち望んでいたカードが来た事に笑みを浮かべる。

外野から『あいつ終わったな。』とか、『あのデッキに勝てる受験生が二人もいるか』『もうダメだよ』等と言う声が聞こえてくるが、手札のカードに視線を向けながら次の流

れを考える。このカードならば確かにアンティーク・ギアゴーレムは倒せるが、このターンで勝負を着ける事は出来ない。

「……まあ、逆転くらいはさせてもらうか。オレは手札の『エリマキリザード』の効果発動！ このカードは手札から特殊召喚できる！ オレは二枚のエリマキリザードを召喚する」

『エリマキリザード』☆1

属性：火

攻撃力5000／守備力3000

爬虫類族

効果

このカードは相手フィールド上にモンスターが存在する時、手札から特殊召喚できる。

総麻のフィールドに現れるのは二体の白いエリマキトカゲ。

「そして、二体のエリマキリザードを生贄に、『竜騎将デイライダロス』を召喚！」

二体のモンスターを生贄に現れるのは大剣を持って黄色の鱗の地竜に跨った竜人『竜

騎將「デイルイダロス」。

「何かと思えば、攻撃力2000ではアンティーク・ギアゴーレムの敵では無いノ〜ネ」
「確かに攻撃力ではアンティーク・ギアゴーレムには太刀打ちできない。けどどな！
竜騎將「デイルイダロスのモンスター効果！」

総麻の宣言に合わせて竜騎將「デイルイダロス」が走り出し、アンティーク・ギアゴーレムを切り裂く。

「なんでス〜ト!? どういう事なノ〜ネ!?」

「竜騎將「デイルイダロス」は生贄召喚に成功した時、相手フィールド上のモンスターを一体破壊し。更に！」

さらに「デイルイダロス」が持っていた剣をクロノスへと投げ付ける。

「そのレベルの100倍のダメージを相手に与える」

クロノス LP4000↓3200

『竜騎將「デイルイダロス」☆8』

属性：火

攻撃力2000／守備力1200

ドラゴン族

効果

このモンスターは通常召喚された時攻撃できない。

このカードの生贄召喚に成功した時、相手フィールド上のモンスター一体を破壊し、そのレベル×100のダメージを相手に与える。

「このカードは通常召喚に成功した時、攻撃出来ない。カードを一枚伏せて、ターンエンド」

「ふふん、中々やるようなノ〜ネ。私のターン、ドロー」

気分良さそうな笑いを浮かべながら、カードをドローする。攻撃力2000の下手をすれば半上級モンスターにも簡単に倒される攻撃力のモンスターとは言え、今の所、優位に有るのは総麻の方だと言うのに。

「私はカードを二枚伏せて、『古代の機械兵士』アンティーク・ギアソルジャー（守備力1300）を守備表示で召喚するノ〜ネ。私はこれでターンエンドなノ〜ネ」

「オレのターン、ドロー」

片腕が銃となった機械仕掛けの兵士が相手のフィールドで守備体制を取る。伏せカードの存在も気になるが今は攻め時と判断し、新たに引いたカードへと視線を向け

る。

「(……『竜の逆鱗』の罫カードか。手札に今のタイミングで出すべきモンスターは居ない。仕方ないか) 竜騎将デリライダロスでアンテイク・ギアソルジャーを攻撃!」

総麻の指示に従いデリライダロスが大剣を振りかざし、相手が罫カードを発動させる様子も無く守備体制のギアソルジャーを切り裂き、爆散させる。

「カードを一枚伏せて、ターンエンドだ」

「私のターン、ドロロー。私は『グリーン・ガジェット』を召喚、グリーン・ガジェットの効果で『レッド・ガジェット』を手札に加えるノーネ。更に罫カード発動『血の代償』、その効果でライフを500払い、レッド・ガジェットを召喚、そして、効果で『イエロー・ガジェット』を手札に加えるくノ」

クロノスのフィールドに二体、緑の歯車に手足の生えた様なモンスターと、赤い歯車に手足が生えた様なモンスターが並ぶ。

クロノス LP3200↓2700

(古代の機械でガジェット……って事は……拙い)

「更にライフを500ポイント払い、イエロー・ガジェットを召喚、効果でグリーン・ガ

ジェットを手札に加えるーノ。これで準備は整ったノーネ」

クロノス LP2700↓2200

更に黄色い歯車に手足が生えたようなモンスターが召喚されると、クロノスは自分のワールド上に並んだ三体の歯車達を眺め、ニヤリと言う様な笑みを浮かべ、手札から新たにモンスターを召喚する。

「私はイエロー・ガジェットを生贄に『アンティーク・ギアガジエルキメラ古代の機械合成獣』(攻撃力2300)を召喚するーノ」

イエロー・ガジェットの背後に現れた名の通りカメラの様な機械の獣の中にイエロー・ガジェットが収まるとアンティーク・ギアガジエルキメラは咆哮を上げる。

「更に残ったグリーン・ガジェットとレッド・ガジェットを生贄に、『アンティーク・ギアガジエルドラゴン古代の機械巨竜』(攻撃力3000)を召喚するノーネ」

クロノスLP2200↓1700↓1200

グリーン・ガジェットとレッド・ガジェットの背後に現れた瞳に光を宿さない機械仕

掛けのドラゴンの中にグリーン・ガジェットとレッド・ガジェットが収納され、瞳に光が宿ると共に咆哮を上げる。

(拙い。ガジェルドラゴンの攻撃は伏せカードじゃ防げない。それに効果ダメージも…)

「ガジェルキメラでそのモンスターを攻撃するノーネ」

「罨カード発動、『くず鉄のカカシ』!」

咆哮を上げて向かって来るガジェルキメラの攻撃をガラクタで作られたカカシが受け止める。

「攻撃を一度だけ無効にし、もう一度伏せる」

「それなら、アンテイク・ギアガジェルドラゴンでデイルイダロスに攻撃するノーネ」
今度は攻撃を防ぐ物も無く、デイルイダロスはガジェルドラゴンによって噛み砕かれ

爆散する。

総麻 LP2800↓1800

「更にレッド・ガジェットを生贄にしたアンテイク。ギアガジェルドラゴンがモンスターを破壊した時、相手に400ポイントのダメージを与えるーノ」

「くっ！」

更にガジエルドラゴンの噴出した炎が総麻を包む。

総麻 LP1800⇩1400

「私はこれでターンエンドなノーネ」

『さっきの110番よりもとんでもない状況だぞ』

『完全に終わったな』

『あんなの無理だよ、勝てる訳無いよ』

『恥をかく前にサレンダーした方が良いんじゃないのか?』

好き放題言ってくれている外野のギャラリー達。特に勝手に無理だとか言っている連中まで居る。

「(……さてと、手札のカードは『リザドエツジ』。生き延びる事は出来るけど、この状況で何とかするには手札が足りない)オレのターン、ドロー！ 更に魔法カード、『強欲な壺』を発動。カードを二枚ドロー」

ドロートしたカード二枚に視線を向けると、思わず笑みが零れる。待ち望んだカードが来てくれたのだから。

「手札から魔法カード『大嵐』発動。フィールド上の魔法・罠カードを全て破壊する」
「マンマミーヤ、私のリミッター解除が!？」

（うわ、ここで大嵐を引かなかつたら危なかつた；）

吹き飛んで破壊される『リミッター解除』のカードを見て思わず冷や汗を流す総麻。上手く破壊できなかつたら危ない所だつた。

「さて、これで心置きなく攻撃出来るって訳ですね」

「ふふん、伏せカードは破壊されたとは言つてーモ、私のフィールドにはアンティーク・ギアガジェルキメラとアンティーク・ギアガジェルドラゴンが居るノーネ」

「オレは手札から『リザドエッジ』のモンスター効果発動。手札のこのカードを除外する事で墓地のモンスターカードを合計レベル6まで特殊召喚できる。蘇れ、エリマキリザード、サーベカウラス！」

『リザドエッジ』☆4

属性：火

攻撃力500／守備力200

爬虫類族

効果

このカードをゲームから除外する事によつて墓地に存在する火属性モンスターを合計レベル6になるまで特殊召喚できる。(この効果で特殊召喚する時、レベルの合計は必ず6で無ければならない。)

この効果で召喚されたモンスターがフィールドから離れた時、ゲームから除外される。

刃になった鶏冠を持った可愛らしい爬虫類の様な姿をしたモンスターが回転しながらジャンプして弾けると、フィールド上にルビーの様な結晶が三つ現れそれが砕け散ると同時にエリマキリザード二体とサーベカウルス一体が総麻のフィールド上に召喚される。

「そして、エリマキリザード二体を生贄に：現れる、始まりの赤き竜！ 『龍皇ジークフリード』、攻撃表示で召喚！」

エリマキリザード達を飲み込んだ赤い結晶が砕け散り、その中から炎の如き真紅の体色を持ったドラゴン『龍皇ジークフリード』が現れ、咆哮を上げる。

『龍皇ジークフリード』☆8

属性：炎

攻撃力3000／守備力2100

ドラゴン族

効果

このカードがバトルする時、バトルを行っていない自分フィールド上のモンスター一体を生贄に捧げる事でそのモンスターの元々の攻撃力分このモンスターの攻撃力はアップする。

このカードが破壊された時、このカードのコントローラーのライフは1000ポイント回復する。

『何だ!?! あのカードは!?!』

『見た事の無いモンスターだ』

『攻撃力3000!?! 伝説の青眼の白龍や古代の機械巨人と並ぶレアカードなのか!?!』

『カッコいい!?!』

騒ぎ出す外野を他所に総麻はバトルフェイズへと移行する。

「し、しかーし、攻撃力はアンテイク・ギアガジェルドラゴンと同じ、ガジェルキメラが破壊されても、まだ私のライフは残るノーネ」

「確かに。だったらジークフリードのモンスター効果発動！ このカードはバトルを行っていない自分フィールド上のモンスターを生贄に捧げる事で元々の攻撃力を得る。

【覚醒】せよ、ジークフリード！」

サーベカウラスの体が無数の透明な結晶となり、ジークフリードの中へと消えて行き、ジークフリードはその力強さを増す。

龍皇ジークフリード 攻撃力3000↓4400

仲間の力を受け取った真紅の龍皇の力は今、大地の神を超えて究極竜へと迫る。

「こ、攻撃力4400ですーと!?!」

「ジークフリード、ガジェルキメラを攻撃！ ドラゴンズラッシュ!!!」

アンテイク・ギアガジェルキメラ 攻撃力2300

龍皇ジークフリード 攻撃力4400

空高く舞い上がったジークフリードが咆哮を上げながら、炎を吹き出し、そのまま炎に包まれたアンティーク・ギアガジエルキメラに殴りかかり粉碎する。

「ペ、ペペロンチ〜ニョー！」

クロノス LP1200↓→900

「ありがとうございました。」

呆然とした様子で崩れ落ちるクロノスに背を向けてリングから降りていく。二度も本気のデッキで教師であるクロノスが負けたのが信じられないのだろう、既に会場全体が黙りこんでいる。

「すげえ、すげえよ！ くうく、オレもアイツとデュエルしてえ！」

観客席の一角でそんな言葉が響いたのだが、総麻には聞こえていない様子だった。

「ふう。何とか勝てたか…」

クロノスがアンティーク・ギアガジェルキメラを召喚していなければどうなるかは分からなかった。最後のターンでジークフリードを引き当てなければ、先ほどのデュエルは負けていただろう。結局の所幸運と勝負を焦った相手のミスに助けられた結果だ。

「ん？」

ふと、使用する物とは違うデツキケースから一枚のカードを取り出すとBバトルスピリッツ Sのカードがデュエルモンスターの物へと変化していく。

（これで、切り札が増えたか。まあ、上手くラィイエローまで上がれば十代に関わらずに居られるだろうし、三幻魔の事件は命の心配は無いだろうから…一番危険なのはユベルの事件の時だ。少なくとも、ユベルの事件の時に関わらなきや安全に過ごせるだろう…。多分…）

新たにデュエルモンスターのカードに変わった「巨大ロボットの様な白い鎧巨人」

のカード『鉄騎皇イグドラシル』をデッキへと収め、総麻は試験会場を後にする。

TURN—02 『アカデミアの洗礼、白亜の城砦、鉄騎皇イグドラシル』

試験に無事合格した総麻は合格者を乗せたフェリーに揺られていた。

（比較的デッキは完成出来たけど…。使わない方が良さそうなカードが多いな）

自分の手元にある六つのデッキの中の二つへと視線を落としながらそんな事を考える。

バトルスピリッツの六属性をテーマとしたデッキの中の二つ、モンスターを破壊する効果やハンドスの効果の多い『紫』（悪魔等が多いが何気にバトルスピリッツではヒロインの使用したカード群だったりもする。）と、デッキ破壊の『青』の二つだ。

（…『紫』は兎も角…青はな…）

この世界では特に嫌われる事間違い無しであろう青のデッキを一瞥しながらそんな事を考えてしまう。

だから、デュエルアカデミアではBS（バトルスピ）の六属性における『赤』、『白』、『緑』、『紫』、『黄』の五つの属性をモデルとしたデッキ、その中でも特に使いやすい赤と白の二色のデッキを主力に使うて行く事を決める。

(まあ、向こうじゃ頼んだぜ、お前達)

虚空に浮かぶ六体の半透明のモンスター達を一瞥しながら心の中でそう呟くと半透明のモンスター達は総麻の言葉に頷く事で答える。

浮かび上がる半透明のモンスター達は流線的な姿の赤き龍、白い装甲の騎士、白い服を纏った清楚な天使、紫の体色をした悪魔、そして甲冑を纏った巨人の六体だった。

それは総麻の持つ六属性のデッキの主力となるスピリッツだったモンスター達、そのカードの精霊達だ。

まだバトスピのカードのままな物も多いが、そのカード達も手元に有るので、デュエルモンスターズのカードとなるのを待っただけだ。

………もつとも、そうなった場合はデッキの構築を最初からする必要があるが。

(…それにしても…)

心の中で溜息を吐きながら、自分の記憶の中にある…この世界の未来で起こるであろう四つの事件を思い浮かべる。

(…『三幻魔』、『光の結社』、『ユベル』、『ダークネス』…か。直接的に命に関わる危険が有るのは、ヤンデレ…ユベルの事件か…)

この世界では意味は無いが、『リアリスト』としてやって行けそうな、世紀末の魔人達の《力》を持っている以上、生き延びる事は出来るのだが…。それでも、

(…やっぱり、怖いよな…関わらない様に努力しよう…。他の事件は十代がなんとかしてくれるだろうし…)

直面した『死の恐怖』…それは総麻の心の中に大きく巣くっている。特に死の危険が強いのは二つ目の光の結社の事件もそうだが、他の事件に比べてモンスター達の世界に迷い込む事となる三つ目のユベルの事件だ。心の中で再びの溜息と共に海へと視線を向ける。

「まあ、死なない程度に楽しみながら過ごすか…」

…そもそも、一番危険を感じているユベルの事件の時になるべく十代達と行動を共にしないようにすれば事件に関わるのを回避する事が出来る。最悪は授業以外には寮にでも居れば良い。

そう考えると少しは未来への不安も薄くなっていく。第一、この世界は既に自分と言う異物が存在している事で、自分の知っている知識通りに進むとは限らない。最悪は事件が起こらないで済む可能性もある。

……………もつとも、自分と言う異物が居る事で各事件の決戦の何れかで十代が負けると言う可能性だけについては、自分の精神的安定の為に考えない事になっているが…。

「なあ、オレとデュエルしようぜ！」

さて、アカデミアに着いて『オシリスレッド』の赤い制服を受け取り、長い校長の話が終わった後の『遊城 十代』からの台詞がそれだった。

なお、制服の色についてはクロノス教頭の本気のデッキに勝利した上に、受験番号も一桁と言うのにオシリスレッドなのは、クロノス戦が薄氷の勝利だったからだろうと考えている。(実際には本来はライイエローだったのだが、一部の教師が遅刻を理由にオシリスレッドにする事を主張していた為である)

「なあなあ、試験でお前のあのドラゴンを見た時から、ずっとお前とデュエルしたかったんだ！ デュエルしようぜ！」

早速デュエルを挑まれた総麻くんでした。十代の言っている龍とは間違いなく龍皇ジークフリードの事だろう。つまり十代は『赤』のデッキと戦いたいと言う事なのだろうが…。

「ああ、オレもデュエルしたいけど、どのデッキにするんだ」

そう言って六つのデッキを見せる。

「おお、そんなに沢山デツキがあるのかよ?」

「まあな。種類やデツキの傾向は全部バラバラのデツキだけだな。どれと戦いたい?」
「くうく、全部とデュエルしてみてえ!!」

そう言つて十代が選んでしまったのは運が悪い事に、手札破壊とモンスターの効果破壊主体の『青』と並んである意味極悪な『紫』のデツキだった。哀れ。

「あー…考え直すなら今だぞ; お前が戦いたいつて言つてたジークフリードの入つて
るデツキでも無いし」

流石に総麻がなるべく使わない方が良いと考えていたデツキを対戦相手に選んでしまった十代にそう告げるが、それでも、そのデツキと最初にデュエルすると主張する十代。

『仕方ない』と思いつながらデツキ調整をしたいからと十代とのデュエルを先延ばしにしつつ、総麻は自分が暮らす事になるオシリスレッドの寮まで向かう。

「…十代…あいつつて運は良いほうじゃないのか…?」

十代の運が悪いのか、自分の運が悪いのか、それについては考える必要が有るが、一応どんなモンスターが居るのか見せる事になり、『紫』のデツキの切り札となるシリーズ『魔界七将』の中の一札を見せた以上紫のデツキで戦うしかないだろう。

「…凶悪さを減らすべきだろうか…?」

割り当てられた一人部屋の中でそう呟く総麻に対して『それだけは止めて』と泣き付いてくる魔界七将の一体が怖かったので、出来なかったが…。

『ポンポン』と肩を叩いて魔界七将を慰めるジークフリードの精霊に微かに呆れた視線を送りつつ、六つのデッキの調整を始める総麻だった。付け加えておくと十代からのデュエルアカデミアの散策は断った。

(まあ、万丈目当りに目を付けられても面倒だしな…)

ふと、漫画版とアニメ版で性格がまるで違う人の事を想像しながらそんな事を思い、赤のデッキに最後の一枚『雷皇龍ジークヴルム』を加える。

付け加えておくとパワー重視の赤のカードだが、実は他に使える二枚の強力なカードは何故か常に禍々しいオーラを纏っている為に使う気がないので放置している。

(…当分の間はこの二枚を主力で戦うしかないか)

無言のままその二枚を仕舞いこむと、完成した六つのデッキをそれぞれ別々の…六色に塗り分けられたケースに収め、歓迎会に出席する。

…流石に食事の質素さは目の当たりにして驚いたが、それ以上に普通に美味しい事に驚いていた総麻だった。

そして、歓迎会が終わり、まだデュエルモンスターズのカードに変化していないバトスピのカードを眺めていると、ふと入学時に渡されたPDAが鳴る。それはアンティの

デュエルの申し込みだった。

「…なんでオレのアドレスを知ってるんだ？」

生徒間なので名前さえ知っていれば直に分かるのだろうと予想は出来る。記憶の中にある的中率の高い未来予知によれば、このメールの送り主は…。

「…やっぱりな」

『万丈目 準』と記憶と現実は一致を見せる。

「…オレに目を付けた理由はオレもクロノス先生に勝ったから…つて所だな。迷惑な話だ」

別に無視をしても良いのだが、逆にこれは自分が存在する事による知識と現実の差異を知る為の良い機会だろう。

それに…。

「白のデッキのテストには丁度良いか」

二つ目のデッキ…白のデッキへと視線を向けながら静かに笑みを浮かべながらそう呟く。

「遅かったな」

「いや、遅かったって時間前に来てたのかよ…」

デュエル場に着くと既にそこには十代と万丈目とその取り巻き二人が居た。

「うるさい！ 遊城十代はオレとアンティ・デュエルをして貰う。天風総麻はこいつとだ！」

そう言って取り巻きの一人を指差す万丈目に対して内心、『こいつ、無視したら朝まで待っていたんじゃないか』と思わない事も無い総麻だった。

「はい、お任せください、万丈目さん。オレが勝ってお前のカード破り捨ててやるよ」
(…流石に頭に来るな…。決めた…遊びなく潰す)

冷たい笑みを浮かべながら白いデッキケースからデッキを取り出しデュエルディスプレイにセットする。

白のカードはバトルスピリッツでは守りが主体の防御型のカード。だが、デュエルモンスターズのカードに変わった時、白のカードは…。

「『デュエル』」

総麻 LP4000

取り巻き LP4000

「オレのターン、オレは『フェンリルキャノン』を攻撃表示で召喚」

『フェンリルキャノン』☆4

属性：光

攻撃力1500／守備力1200

機械族

効果

このモンスターは獣族としても扱う。

このカードが攻撃される時、攻撃力は300アップする。

「カードを三枚伏せてターンエンド」

総麻のフィールドに出現するのは砲塔を背負った白い機械の狼『フェンリルキャノン』。

「へっ、そんなモンスター程度直に始末してやるよ、オレは『切り込み隊長』を攻撃表示で召喚。そして、切り込み隊長の効果発動、切り込み隊長が召喚できた時、手札からL

V4以下のモンスターを召喚できる！ オレは『荒野の女戦士』を攻撃表示で召喚！」
（…戦士族のデツキか…二体とも、オレのフェンリルキャノンより攻撃力は低い。…魔法カードで強化か…でもな…）「…荒野の女戦士と切り込み隊長を並べてどうする？
手札事故でも起こしたのか？」

ついそう言ってしまう。明らかにリクルーターの荒野の女戦士と他の戦士族への攻撃を封じる切り込み隊長を並べては意味が無い。

「う、うるさい！ オレは永続魔法『連合軍』を発動！ この効果でオレのフィールド上の戦士族・魔法使い族一体につき、戦士族の攻撃力を200ポイントアップする。合計400ポイントのアップだ！」

切り込み隊長 攻撃力1300↓1700

荒野の女戦士 攻撃力1100↓1500

（切り込み隊長の攻撃力がフェンリルキャノンを上回ったか）

「行け、荒野の女戦士でそのモンスターを攻撃！」

「なるほど、攻撃力を上昇させた荒野の女戦士で相打ち狙って訳か。迎え撃て、フェンリルキャノン！」

そう、破壊されることで効果を発揮するモンスターを利用した相打ちならば、相手のモンスターを破壊した上でダイレクトアタックが出来る。一度はミスとも思ったが、悪

く無い手だ。

切り掛かる女戦士にフェンリルキャノンが嘯み付き、背負う大砲からの砲撃で粉碎する。

取り巻き LP4000↓3700

「なに!? 何で攻撃力は同じなのに、荒野の女戦士だけが…それにオレのライフも!」

「フェンリルキャノンは攻撃を受けるとき、攻撃力が300ポイントアップする。事実上相手ターンだと1800のモンスターだ」

「くつ、オレは二枚目の荒野の女戦士を攻撃表示で召喚して、カードを一枚伏せてターンエンドだ」

取り巻きは破壊された荒野の女戦士の効果で新たなモンスターを召喚し、ターンエンドを宣言する。

「オレのターン、ドロー」

ドローしたカードに視線を向け、静かに笑みを浮かべる。このデッキのキーカードの一枚が来たのだ。

「フェンリルキャノンを生贄に、オレはレベル6のモンスターを召喚!」

フェンリルキャノンがダイヤモンドの結晶に飲み込まれ、光り輝くと同時に雪の結晶がダイヤモンドに重なる。

「聳え立て、鋼鉄の白き城！ 『鉄騎皇イグドラシル』を攻撃表示で召喚」

鉄機皇イグドラシル ☆6

属性：光

機械族

攻撃力2400／守備力1200

効果

このカードの生贄召喚に成功した時、互いのフィールド上の元々の攻撃力1500以下のモンスターをすべて手札に戻す。

このカードが生贄召喚に成功した時、一度だけ相手が魔法・罫カードを発動させた時、フィールド上に存在する伏せカードを一枚墓地に送る事で効果と発動を無効にして破壊する。

「イグドラシルのモンスター効果発動、全てのフィールド上の元々の攻撃力1500以下のモンスターをすべて手札に戻す」

ダイヤモンドの結晶が砕け散り、現れたのは鋼の甲冑を身に纏った鋼鉄の騎士、『鉄騎皇イグドラシル』。

北欧神話における世界を司る巨木の名を持つモンスターが発生させた衝撃波によって取り巻きのフィールドのカードが手札に戻る。

「な、なんだと!？」

「リバースカードオーブン、速攻魔法『リミッター解除』。これでイグドラシルの攻撃力は4800に。ダイレクトアタック。砕け！ 鋼の騎士よ！」

鉄騎皇イグドラシル 攻撃力2400↓4800

リミッター解除の効果を受け全身を紅く輝かせ、装甲の隙間から蒸気を上げながら拳を振り上げ、取り巻きへとイグドラシルが殴りかかろうとするが、

「へっ、バカが！ 畏発動、『聖なるバリアーミラーフォースー』！ これでお前のモンスターは全滅だ！」

「…イグドラシルの効果、自分フィールド上の伏せカード一枚を墓地に送り、魔法・畏の発動を無効にする！」

そう、一度だけとは言え畏・魔法の効果恐れずに攻撃できる…それが、このデッキの主力の一枚、イグドラシルの効果なのだ。

イグドラシルの拳が取り巻きの前に現れたバリアに叩きつけられる。一度バリアに拳が弾かれると、イグドラシルは地面に拳を叩きつける。それによって総麻のフィールド上の伏せカードが氷柱に変わると、同時に打ち出された氷の礫がバリアを砕く。

「う、うわああああああ!!」

「改めて…鉄騎皇イグドラシル…ダイレクトアタック!」

イグドラシルの拳（ダイレクトアタック）が叩きつけられ、倍化した攻撃力のダメージによって取り巻きのライフが一気にゼロになる。

取り巻き LP3700→1100

（…手札には保険のカードも有ったけど、十分に勝てたか。だけど、白のデッキのテストにはならないな…）

最後に残った手札へと視線を向けながらそんな事を思う。実際、使ったカードはフェンリルキャノン、イグドラシル、リミッター解除の三枚とイグドラシスの効果のコストにしたカードの一枚だけなのだから。

「そう言えば、デュエル前に賭ける対象のカードは決めてなかったな。今回はアンティ・ルールは無効って事で良いぞ」

面倒と言う態度を隠そうともせずに手を振りながら負けた取り巻きにそう告げて万丈目達の方に視線を向ける。

（…何度か使って試すとするかな…。そんな事よりも…）「おーい、こっちはもう終わってたぞ」

項垂れている取り巻きを一瞥もせず最優先で確認するべき事は別にあると、総麻は

十代とデュエルしている万丈目へと声をかける。向こうの状況は十代のフレームウイングマンのコントロールを万丈目が奪っていた所だった。

『十代を倒してからお前の相手をしてやる』と万丈目が言っているので、デュエル場の壁に背中を預けながら観戦する。元々最後まで見ていく予定だったので問題は無い。

(…そう言えば、HEROのカードも何枚か有ったよな…。十代のデッキに良さそうなカードも…。決めた…オレの安心の為に十代のデッキの強化をしよう。…取り敢えず、融合HEROを渡すのももう少し先だとしても…)

デュエルを眺めながら主に自分の安心の為に十代に渡すカードとデッキの強化案を考えていると、数人の人間が近づいてくるのに気が付く。足音からして警備員とは違う。

「何をしているの!」

「ん、あの二人はアンティ・ルールのデュエル。オレの方はただのデュエルだったけどな」

「アンティ・ルールは禁止されてるんだよ!」

別の声が聞こえて来た事には多少驚きながらそちらへと視線を向けると、彼女『天上院 明日香』の他にも二人ほどの人影が見えた。

(…何故だろう…どこかで見た記憶が)

「そう怒らないでくれ、高町さん。オレは、ちよつと現実の厳しさって奴を教えてあげようとしただけなんだ」

「そんな理由でアンティ・デュエルしていいはずが無いよ」

「…付け加えると、逆にお前のお仲間が現実の厳しさって奴に打ちのめされてるけどな。
(高町って…まさか!?)」

そう叫ぶもう一人の金髪の女生徒の叫び声に付け加えるようにそう言うのと万丈目は、
「う、うるさい！ 次はお前の番だ、覚悟しておけ！」

「はいはい。期待しないで待ってるよ。(…オレの記憶に間違いがなければ…あの二人って、リリカルなのは『高町なのは』と『フェイト・テストアロツサ』…だよな)」

万丈目と会話を交わしながら明日香と一緒に居る女生徒を見てそんな考えに至る。
万丈目が呼んだ名前といい、容姿といい、確かに似ている。

(…ま、まあ…魔法とかそう言う…《力》が有効活用できる物が無ければ誰が居ても問題ないか。…似てるだけって可能性も有るし。結局の所、オレが居る限り100%オレの知っている通りに進むとは限らないんだしな)

「やだね、負けるか分からないデュエルを止められるかよ」

(本当にデュエルバカって所だな…)

切り札を奪われて圧倒的不利な状況にも関わらず止める声を楽しそうに拒否する十

代。

「はあ。貴方の方はもう終わったようね。どうだったの？」

十代の言葉に呆れた様子で溜息を吐き、明日香は総麻にそう問い掛ける。

「ああ、勝った。もつとも、アンティはしてないけどな」

「あつ、入学試験の時の珍しいドラゴンのカードを使っていた人だよな」

「珍しいドラゴン…：ジークフリード…：えーと、このカードの事？」

彼女の言葉にデッキから龍皇ジークフリードのカードを抜いて見せる。

「龍皇ジークフリードって言うんだ」

「本当に見た事の無いカードね。そんなカード、何処で手に入れたの？」

「あー…とあるお爺さんから貰ったカードだけど…」

嘘は言っていない。異界王と言う『老人』から『貰った』事には間違いは無いのだし。

「……………」

金色の髪の少女はブーツとした様子でジークフリードのカードに魅入っていた。いや、正しく彼女の視線を追っていれば、彼女が見入っているのが、別の物だという事が分かるだろう…：そう、総麻の精霊の一つへと。

「それで、君達は？」

ジークフリードのカードをデッキに戻してそう問い掛ける。

「あ、私は『高町 なのは』。よろしくね」

『フェイト・テストロツサ』です」

「私は天上院明日香よ」

「オレは天風総麻。まあ、よろしく。(…同じ容姿で同じ名前か…;…)」

二人の少女の名前を聞いた瞬間、内心焦りながらも表には出さずに自己紹介をする。

「つと、そろそろ警備員が来そうだな。先に帰らせてもらうかな。君達も見つかからない様にな」

フレイルムウイングマンが墓地に送られた所を見て、そう言って彼女達に手を振りながらその場から立ち去っていく。総麻は確実に警備員らしい人間の気配が近づいて来ているのを感じ取っていた。

翌日、十代から万丈目とのデュエルの結末を聞いたら決着が着く前に警備員が近づいていた為は無効になったらしい。

「…最後のターン…お前の引いたカードって、『死者蘇生』か？」

「ああ、このカードでフレイムウイングマンを復活させればオレの勝ちだったんだぜ」

そう言つて死者蘇生のカードを見せる十代に対して一言、

「…フレイムウイングマンの効果テキストを、よく読んでみる…」

「何でだよ？ あっ！」

「…フレイムウイングマンの蘇生…出来ないだろ？」

「あ、ああ…」

「…ま、まあ、クレイマンも蘇生出来た様だし、決着は分からなかった訳だから気にするなよ。このカードやるから」

そう言つて落ち込んでいる様子の十代に『ミラクルフュージョン』のカードを渡す総麻だった。

T U R N — 0 3 『天を切り裂け紅蓮の雷、雷皇龍ジークウルム』

総麻SIDE

さて、オレの中にある『遊戯王GX』についての俗に言う原作知識……言い換えれば、90%当る未来予知は結構薄れている。

そもそも、5D'sで黒幕の三人組が変形合体した所まで見た記憶はあるけど、既にGXの序盤の話の記憶は薄い。……まあ、一学期の間は三幻魔の一件が終わるまでは……一部を除いて命の危険が無いから特に危険は感じてないけどな。

現在、クロノス先生に当てられた所を答えながら、そんな事を考えている訳だけど……。昨日の万丈目の取り巻きとのデュエルの後、十代と友達になった限り……幾つかのトラブルからは逃げられないよな……。

……うん、可能な限り回避しよう……。十代には悪いけど、逃げられる限りは逃げて原作との差を調べよう……。

SIDE OUT

「それに知識と実技は別物だろ？ 現にオレやあいつなんか入試デュエルでクロノス先生に勝ったし♪」

総麻の意識が思考の中から戻った時、そんな声が響くのを聞くと周囲の視線が自分と十代に集まっているのに気付きました。

「(…ちよつと待て、確かにオレは本気のクロノス先生のデツキに勝ったけどな、あれは運が良かったからだぞ。主にジークフリードとかリザドエツジとか) いや、勝ったのは事実だけ…。」

総麻が慌てて十代の間違いを訂正しようとするが、その前にクロノスは悔しげに教室を出て行った。

(…いや、出て行くのは良いけどせめて、間違いの訂正くらい聞いてくれ…。下手に目立ちたくないんだよ、オレは…。危険なトラブルに巻き込まれそうだから！)

総麻の心の中の絶叫は誰にも届かずに終わるのだった。まあ、絶対に珍しいであろう元バトスピのカードを持ってしている総麻にはそんな事は無理な話だろうが…。

必要以上に目立ってしまった事を悩みながら、次の体育の授業―悩みながらも、世紀末の魔人達の身体能力を持っている総麻としては考え事をしていても簡単に過ぎ去る楽な時間帯―が終わると、十代の弟分の『丸藤 翔』君がにやけた顔をしていた。

そんな彼に対して引き気味な総麻達に罪は無いだろう。

「なあ、翔の奴どうしちまつたんだ？」

「…放って置いてやった方が良い…」

そう言つて総麻と十代と、十代と翔のルームメイトであるコアラ似の少年、『前田 隼人』の三人が翔の方を見ると…

「うへへへ…」

物凄く怪しかった。

「…明日には治るだろう…そつとしておこう…」

「…そうしよう…」

「…なんだな…」

(…えーと…魔人の《力》の中に、人を正気に戻す術とかつて無かつたっけ?)

目を逸らして放置することに決めた三人だった。

放課後、総麻は自室で未使用の四つのデッキの調整をしていた。

「…あれから何度か使ったけど、白のデッキはこんな物で良いか…」

あれから何度か実技で赤と白のデッキを使ってみたが、この世界ではまともな部類で凶悪な白のデッキは現在のカードではこれで良いだろうと判断する。

やはり問題は残る五つのデッキ。

(…使つてないけど、青と紫は白以上に凶悪すぎるな。次は緑か黄色を使うか)

次いで扱いが難しい形に仕上がった黄色のデッキと、パワー不足が問題点となる緑のデッキを含めた調整を終えた四色のデッキをケースに収め、最後に《赤》のデッキへと視線を向ける。

「あの二枚は使えないから…他のカードが変わるまで、お前達だけが頼りだな」

赤のデッキの主力となるカードに触れ、それをケースへと収める。それは六つのデッキの中で一番信頼していると言っても過言では無い赤のデッキのキーカードの二枚。

「さて、次のデュエルは《緑》のデッキの実践テストでもするかな。：闇のゲームでも無い限りは…」

伸びをしてベッドに横になった瞬間、

「大変だ、総麻！ 翔が誘拐された！」

「何が有った!?!」

勢い良く扉が開き駆け込んできた十代がそう叫ぶ。十代の言葉に思わず絶叫してしまふ総麻だった。

事情を聞く限り、『マルフジシヨウハアズカツテイル、カエシテホシクバ、ジヨシリヨウニコラレタシ』と言うメールが送られてきたそうさ。其処で翔の誘拐事件は学園の関係者だという事が分かる。

「そうか、頑張れよ、十代」

何で自分の所に来たのか疑問に思いつつ、呼び出しには自分は無関係と考えてサムズアップと共に激励の言葉（メール）を送るが、

「それがさ、『アト、アマナギソウマモツレテコラレタシ』って有ったんだよ」

「……翔…惜しい人を無くした……」

「何言ってるんだよ！ 早く行くぞ、総麻！ デッキとディスク持って来いよな！」

手を合わせて冥福を祈る総麻に怒り交じりで叫ぶ十代。赤デッキをケースに収め、

デツキとディスクの準備は完了。

「分かった、冗談だから」

まあ、調整した緑のデツキのテストに丁度良いかとも思った事だし。(b.y. 総麻)

そんなこんなで女子寮に向かう事になったが、時間が時間なので女子寮へと続いている橋が上がっている。総麻がボートを漕いで、湖を横断する事になった。

「おーい、交代しなくて良いのか?」

「ああ。その代わり帰りは任せた」

内心、『こう言う時、魔人の身体能力を強化する力は弁理だなく』等と考えながらボートを漕いでいた。帰りは任せたとはいっているが、総麻の性格上、結局の所帰りも漕ぐ事を引き受けるだろう。…結局の所お人好しなのだ。

そして、辿り告いだ女子寮では翔がグルグル巻きにされていた。

「アニキ、総麻君」

「…で、どうしてそうなったんだ?」

「翔! これはどう言う事なんだよ!」

「それが…話せば長くなる様な、長くない様な」

「…覗きでもしたのか…?」

総麻の呟きにその場に居た女性陣の声を揃えて『そうだ』と同意してくれた。

「なんだって?」

「…冗談の心算(つもり)だったんだけど…お前と言う奴は…」

「だから違うって!」

そんな漫才のような遣り取りの後、翔の除きの一件を多めに見る為に総麻と十代の二人がデュエルする事になったのだが、そこで総麻が待ったをかける。

「あー、ちよつと待った。そもそも、当事者の彼がデュエルしないのはどうかと思う」「せやな、じゃあ、三対三で二本先取した方が勝ちで」

「一勝一敗一分けの場合は勝者のライフポイント差か、それとも勝った者同士の延長戦か?」

「こんな時間やからな、延長線をしてる時間もないしライフポイント差でええと思うけど」

「じゃあ、こつちもそれで構わない」

ショートカットの関西弁の少女『八神はやて』との交渉で翔もデュエルする事に決まった。

「ええっー!」

翔が絶句しているが、それは全面的に黙殺された。

「それじゃあ、こつちの一番手は翔くん、君だ!」

「ちよ、ちよつと待つて欲しいっす!」

そして、総麻は十代に向き直り。

「十代、オレとお前で二勝すれば大丈夫だ」

「しかも、負ける事前提かよ(っすか)!!!」

サムズアップと共に宣言した言葉に対して声を揃えてツツコミを入れてくれる二人だった。

なお、翔くんのデュエルだが、案の定負けた。

(…やっぱりこの頃は弱かったか…)

結果的に後が無くなった訳だが、総麻としてはこの結果は何気に予想の範囲内だった。ここで十代が負ける事はないだろうが、そうなると問題は自分の勝敗だ。

「さて、流石に時間も遅いから、オレと十代のデュエルは同時に始めようか」

と言う総麻の発言で総麻と十代のデュエルは同時に行われる事になった。

ボートに乗って十代と翔、明日香と彼女の取り巻きのジュンコとももえの二人と一緒に先にボートに乗って乗り出して行った。

そして、別のボートを二つ使い、総麻となのは、フェイト、はやての三人が湖に漕ぎ出すと、

「それで、オレの相手は?」

「私と、戦ってもらいます」

そう言つてフェイトが名乗り出る。向こうで特に話し合っている様子が無い事から、最初から決まっていたのだろう。

「OK、それじゃあ…」

六つのデッキの中から『緑』のデッキを取り出し、デュエルディスクにセットしようとした時、

「待つて下さい」

「えっと…何か…?」

「あの…あの赤いドラゴンの入ったデッキでお願いします」

「別に良いけど。それじゃ、十代達も始まった様だし、こっちも始めようか」

「うん、行くよ」

互いにデュエルディスクを構え、ボートの上で対峙する総麻とフェイト。それぞれのギャラリーが二人を応援している。勝つにしても負けるにしても早く終わらせようと考えていた総麻が、今回は速攻性に優れた『緑』のデッキをセットしようとしたのだが、こうしてフェイトの言葉で『赤』のデッキを使うこととなつた。

「デュエル!!!」

宣言と共に初期の手札となるカードを五枚ドロウする。

総麻 LP4000

フェイト LP4000

「私の先行、ドロロー。モンスターをセットして、カードを一枚伏せて、ターンエンド」
「オレのターン、ドロロー」

手札のカードを一瞥し、戦略を立てる。手札には既に切り札となる『龍皇ジークヴルム』が来ている。だが、手札にはエリマキリザードのカードは無く召喚できない。
「（先ずは様子見だな）オレは手札から『地龍 サーベカウラス』を召喚！ そして、サーベカウラスで伏せモンスターを攻撃！ 更にサーベカウラスは効果で攻撃力アップ！」

地龍 サーベカウラス 攻撃力1400↓1800

ルビーの結晶が砕け現れるサーベカウラスがそのままフェイトのフィールド上のセットされたモンスターへと飛び掛ると、そのモンスターは表となりサーベカウラスによつて粉碎されるが、

（『シャインエンジェル』：彼女のデッキは光属性か天使族が中心か？）

サーベカウラスの牙によって粉碎されたのは簡素な格好の天使『シャインエンジェル』。能力こそそれほど高くは無いが、それでも、攻撃力1500以下の光属性のモンスターを攻撃表示で召喚する効果を持った厄介なモンスター。

壁としても最大で四回は攻撃しなければ相手のフィールドを空にはできないリクルーターと呼ばれるサーチ効果を持ったモンスター。

(出てくる可能性の中でいちばん最悪なのは…ライトロードだけど…何が来る?)

「シャインエンジェルの効果で『エレキツツキ』を攻撃表示で特殊召喚!」

フェイトのフィールドに現れるのは電気を纏った赤・青・黄色の三原色のキツツキの様なモンスター『エレキツツキ』。

「エレキツツキ!?(…エレキモンスターか!?! …流石に予想外だったけど…)」

「それから罨カード発動、『雷の裁き』! 自分フィールド上に雷族モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時、相手フィールド上のカードを一枚破壊します!」

「っ!?! しまった、サーベカウラス!」

エレキツツキから打ち出された電気が上空で落雷となってサーベカウラスを焼き尽くした。

「(特殊召喚から罨での破壊…結構拙いな。)カードを二枚場に伏せて、ターンエンド」

先手を討たれた形になった総麻はカードを二枚伏せる。

総麻 LP4000

フィールド

伏せカード×2

手札×3

フェイト LP4000

フィールド

エレキツツキ 攻撃力1000

手札×4

「私のターン、ドロロー。フィールド魔法『エレキヤツスル』を発動」

フェイトの後に現れるのは電気を纏った三原色の白『エレキヤツスル』。

「これで、私のフィールドの『エレキ』と名の付くモンスターを攻撃したモンスターはダメージ計算後に攻撃力が1000ポイントダウンします。それから、『エレキジ』を攻撃表示で召喚！ エレキツツキとエレキジでダイレクトアタック！」

フェイトの指示にあわせて雷を纏った二体の鳥は総麻へと飛翔する。互いに攻撃力は1000と低いがエレキツツキは二回の連続攻撃が可能なモンスター。合計すると総合ダメージは3000：何もせずに居ると一気に四分の一までライフを減らされる事となる。

「悪いけど、それは通さない！ 罨カード、リビングデッドの呼び声、サーベカウラスを蘇生する」

「っ!? だったら、エレキジで直接攻撃、このカードは相手にダイレクトアタックが出来る」

「もう一枚の罨カード、『クズ鉄のカカシ』を発動！」

エレキジの攻撃をガラクタで出来たカカシが受け止める。

「発動後再びセットされる」

総麻のフィールドに攻撃力で上回るサーベカウラスが居る事で残念ながらエレキツツキは攻撃できない。

「私はカードを一枚伏せてターンエンド」

「(…早めにモンスターを破壊しないと厄介だな…) オレのターン、ドロー！」

ドローしたカードを確認すると、

「(来た!) オレは相手フィールド上にモンスターが居る事でエリマキリザードを特殊召

喚！　そして！」

自分のフィールドに二体のモンスターが並んだ事に笑みを浮かべ、手札に存在する皇を呼ぶ。

「（ジークフリードの攻撃力なら、下げられても簡単には破壊されない！　ジークフリードの攻撃力で一気に流れをオレの方に持ってくる。）サーベカウラス、エリマキリザードを生贄に…現れよ、古（いにしえ）の赤き龍、龍皇ジークフリード、攻撃表示で召喚！」
 サーベカウラスとリザードエツジが一つになり出現した巨大なルビーが砕け、その中から現れる真紅の龍、龍皇ジークフリード。

（来た、総麻君の切り札。…でも、私が戦いたいのは、その子じゃない！）

「ジークフリードでエレキジを攻撃！　ドラゴンズラッシュユー！」

狙うのは厄介な効果を持ったエレキジ、これが通れば一気に相手に2000のダメージを与えられる。

「うっ！　だけど、エレキヤツスルの効果でジークフリードの攻撃力は1000ポイントダウン」

「それでも、攻撃力は2000。まだジークフリードは戦える。だろ？」

ジークフリードのブレスがエレキジを焼き尽くすと同時にエレキヤツスルからの電撃がジークフリードを襲い、電撃の直撃を受けたジークフリードが地面に倒れる。そし

て、総麻の声に答える様にジークフリードは頷く。

フェイト LP4000↓2000

龍皇ジークフリード 攻撃力3000↓2000

「オレはこれでターンエンド」

総麻 LP4000

フェイールド

龍皇ジークフリード 攻撃力3000↓2000

伏せカード×1（クズ鉄のカカシ）

リビングデッドの呼び声

手札×2

フェイト LP2000

フェイールド

エレキツツキ 攻撃力1000

フェイールド魔法『エレキヤッスル』

伏せカード×1

手札×3

「私のターン、ドロー（他にモンスターが居なくて攻撃力が下がっている今があのだらごんを倒せるチャンス。お願い）」

そして、ドローしたカードを見て微笑みを浮かべると、

「手札の『サンダー・ドラゴン』の効果発動。手札のこのカードを捨ててデッキから同名カードを二枚手札に加える。それから、魔法カード『融合』発動！『双頭のサンダー・ドラゴン』を融合召喚！」

双頭のサンダー・ドラゴン 攻撃力2800

「手札から二枚目のエレキジを攻撃表示で召喚」

フェイトのフィールドに二つの頭を持ったドラゴンとエレキジが現れる。

「エレキジで直接攻撃（ダイレクトアタック）」

「くず鉄のカカシ！」

エレキジの攻撃をくず鉄のカカシが防ぐが、フェイトの狙いは発動させてもさせなくてもどちらでも良かった。

「今度は双頭のサンダー・ドラゴンでジークフリードに攻撃！」

「迎え撃て、ジークフリード！」

双頭のサンダー・ドラゴンの放った既にビームと呼んで良い二つの雷撃がジークフリードへと向かう。ジークフリードも炎を打ち出してそれを迎え撃とうとするが、体が痺れて動けないのか、その場に倒れ、電撃に打ち抜かれる。

「ジークフリード！」

総麻 LP4000↓3200

「くっ、ただどな…ジークフリードは破壊されても主に可能性を残す。ジークフリードが破壊されたとき、ライフを1000ポイント回復」

総麻 LP3200↓4200

「主人思いなんだね、その子。でも、エレキツツキで攻撃、この子は一度のバトルフェイズ中二回攻撃できます」

邪魔者がなくなったフィールドを飛び、総麻の肩に下りると…

「お、おーい；」

そのままキツツキの様に二回ほど突いてくれました。このモンスター。

「がっ！」

そして、フェイトのフィールドへと舞い戻っていく。

総麻 LP4200↓2200

「私はこれでターンエンド」

「オ、オレのターン。ドロロー」

カードをドロローして手札を一瞥する。

(さて、手札のカードに逆転の一手は無い。手札を入れ替る『手札抹殺』のカードが有るから可能性に賭ける事はできるけど…)

フェイトのフィールドを一瞥すると攻撃力の高い双頭のサンダー・ドラゴンとダイレクトアタックが可能で厄介な効果を持ったエレキジと二回攻撃のエレキツツキ、そして、攻撃力を下げるエレキヤツスル。完全に不利だ。最低でもこのターンで双頭のサンダー・ドラゴンを破壊しなければ負ける。

(さて、どうするか…?)

「あの」

次の一手を考えているとフェイトが声をかけてくる。

「ん? 強いね、今の手札だと完全に負けるな」

「あ、ありがとうございます。でも、貴方の切り札はあの子だけじゃないですよね。私が本当に戦いたかったのは、貴方の一番信頼している最高（・・・）の切り札です」

「まあ、もう少し気楽に話してくれた方が良さただけだな。つと、十代達の方は十代が勝ったか」

『サンダー・ジャイアントでダイレクトアタック！ ボルティックサンダー！』

『きやあー！』

「やれやれ……これで翔の運命はオレのカードに賭けられたって訳か、責任重大だな」

「そう、だね。でも、私も負けないよ！」

「そうだな。まあ、折角の友達を助ける為にも……僅かな可能性に賭けさせてもらう！」

魔法カード『手札抹殺』、発動！ 互いのプレイヤーは手札を全て捨てて捨てた枚数だけカードをドローする」

フェイトが手札を捨てて入れ替えると、総麻も手札抹殺を除いた二枚のカードを墓地に捨て、カードをドローする。

(一枚目…違う)

一枚目のカードは望んだ切り札とは違うモンスターカード。

「(二枚目…来た!)オレは墓地のカード、『機龍 フタバニア』を特殊召喚! このカードは相手フィールド上に二体以上のモンスターが存在する時、墓地から特殊召喚できる! 君のフィールドのモンスターは三体、よって特殊召喚!」

総麻の墓地から現れたルビーが砕け散り、機械仕掛けの赤い龍が召喚させる。

機龍 フタバニア ☆4

属性：炎

攻撃力1600 / 守備力1200

ドラゴン族

効果

自分のメインフェイズに相手フィールド上に二体以上モンスターが存在している時、墓地に存在するこのカードを特殊召喚できる。この効果で特殊召喚されたこのカードはフィールドを離れた時、ゲームから除外される。

「そして、フタバニアを生贄に…。これが君が望んでいた…オレの最高の切り札…フェ

イバリットカードだ！」

総麻の宣言にフェイトが身構えると、フタバニアがルビーの結晶となり、異次元への歪みが開く。

「雷よ、天を切り裂け！ 『雷皇龍ジークヴルム』…攻撃表示で召喚!!！」

空間の歪みの中にルビーの結晶が消えていくと、湖の中から咆哮を上げながら真紅の龍がその姿を現す。

翼を広げ咆哮を上げるジークフリードよりも細身で流線型をしたドラゴン。それが、総麻の赤デツキのフェイバリットカード、『雷皇龍ジークヴルム』！

雷皇龍ジークヴルム ☆6

属性：炎

攻撃力2100／守備力1200

ドラゴン族

効果

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、攻撃力が守備力を上回っていれば、相手プレイヤーにその数値分のダメージを与える。

このカードが相手モンスターを破壊した時、その攻撃力分のダメージを与える。

「雷皇龍ジークヴルムは十代のフレイムウイングマンと同じ効果を持っている。これで終わりだ！ 行け、ジークヴルム！ エレキツツキに攻撃！」

ジークヴルムは天高く舞い上がり、雷光を纏いながらフェイトのフィールドのエレキツツキに向かって突撃する。

「負けない、罌カード発動『立ちはだかる強敵』！ その子の攻撃はエレキツツキの変わりに双頭のサンダー・ドラゴンが受ける！」

雷皇龍ジークヴルムの進路上に双頭のサンダー・ドラゴンが立ちふさがり今まで以上の電撃を集める。

「双頭のサンダー・ドラゴンで迎撃！ 轟け、轟雷！ サンダースマッシュャー！」

「手札のモンスターカード『雷鳴龍リンド・グローム』の効果発動！ 手札のこのカードをゲームから除外する事で、フィールドに存在する『炎属性』、ドラゴン族のモンスターの攻撃力を1000ポイントアップさせる！ 伝説の龍、リンドヴルムとなって…【激突】しろ、雷皇龍ジークヴルム、ライトニング：クラッシュュ！」

総麻が手札にある『雷鳴龍リンド・グローム』を除外する事で雷皇龍ジークヴルムの背後に雷で出来たドラゴンのオーラと融合し、纏っている雷光が力を増し、雷はジークヴルムよりも巨大な龍を作り出す。

雷鳴龍リンド・グローム ☆4

属性：炎

攻撃力1500／守備力1200

ドラゴン族

効果

手札に存在するこのカードをゲームから除外する事で自分フィールド上の炎属性、ドラゴン族モンスター一体の攻撃力を1000ポイントアップする。

雷皇龍ジークヴルム 攻撃力2100+1000(雷鳴龍リンド・グロームの効果)↓
3100

双頭のサンダー・ドラゴンの放った雷撃を、雷光の龍を纏ったジークヴルムの突撃が切り裂き、そのまま双頭のサンダー・ドラゴンを打ち抜く。

フェイト LP2000↓1900

「更に雷皇龍ジークヴルムのモンスター効果発動、このカードが相手モンスターを破壊

した時、その攻撃力分のダメージを与える！ 行け、ジークヴルム！」

咆哮を上げフェイトの真上スレスレをジークヴルムが飛翔する。

「きゃあああああ！」

フェイト LP1900↓|1100

「「キヤアア！」」

その一撃がフェイトの残りのライフを削り取り、同時にフェイト達の乗っていたボートを揺らす。その衝撃でフェイトがボートから落ちて湖に投げ出されてしまった。

「フェイトちゃん！」

「あかん、すぐに助けへんと！」

とつさにデュエルディスクを外してボートに居るなのはに投げ渡したのでデツキは無事だが。はやてが急いで助けようとするが、

「…ごめん…遣り過ぎた」

フェイトが湖に落ちた時にデュエルディスクを外して、直に飛び込んでいた総麻が溺れない様に彼女の体を支えていた。

「あつ。ありがとう」

「どういたしまして。まあ、これはオレのせいでも有るから、気にしないでくれ」

顔を赤くして礼を言う彼女をボートに上げると、自分も乗ってきたボートに上がる。こうしてデュエルに勝利した総麻達は翔を返してもらい、総麻はなのは達三人のPDAのアドレスを交換した。

TURN—04 『月一テスト、動き出す闇』

寮の昇級：最下位のオシリスレッドは成績次第では退学の恐れもある月一テストを明日に控えた日の夜、総麻は、

「…ガイ・アスラは無事だけど…魔龍帝の方が盗まれたか…」

有るはずのカードが無い事に気付いて部屋中を探し回った後、そんな事を呟く。

嚴重に封印してあるガイ・アスラは兎も角、レッド寮に居ても何処にあるかは大体分かるほどに今も邪悪なオーラを今も放っている堕ちた龍皇のカードの所在を理解して思わず頭を抱えながら溜息を吐く。

何気に散々探し回ってしまっただ後で、カードの持っている《力》を感じ取れば良い事に気が付いたのは総麻だけの秘密だ。

…幸いと言ってはなんだが、魔龍帝は総麻が持つ元バトスピのカード達の中で、この上無く扱いにくい儀式モンスターだ。

普通の儀式デッキにそのまま投入しても召喚の為の制限が原因で絶対に扱えない上に、召喚する為に必要な二枚のカードは今も無事に総麻の手元にある。正規の手段を使わずに操る為の方法も一つだけ存在しているが、そのカードは残念ながら未だにバトル

スピリッツのカードのままだ。

(…その内、忍び込んで取り返すか…。向こうも人の部屋に勝手に忍び込んだんだ…) 誰かが侵入した形跡のあるレッド寮の自室を眺めながら溜息を吐く。誰にも見咎められる事無く忍び込んでカードを取り戻す程度の芸当は出来る。…この世界では全くと言って良いほど役に立っていないが、総麻の中に有る《魔人》達の《力》の中には《忍者》と《暗殺者》の力もあるだから。

幸い、バトルスピリッツのカードは何時デュエルモンスターズの物に変わっても良い様に今も肌身離さず持っているので見られることは無かった。

(魔龍帝の力に支配されるのも…その罰って事で…な)

そんな事を考えながら暫くの間、放置する事に決めた。

盗まれた魔龍帝の力が感じられるのは位置的にブルー寮の方だろう。幻羅星龍ガイ・アスラ、龍皇ジークフリード、雷皇龍ジークヴルムの三枚と共にデュエルモンスターズのカードに変わった『魔龍帝ジークフリード』、堕ちた龍皇のカードには邪悪な精霊が宿っていた事に気付くにはそれ程時間は掛からなかった。

デュエルモンスターズとバトルスピリッツ…この二つには原作の世界において妙な符号が存在しているのだ。それは、"世界の運命を左右する力を秘めたカードが存在している"と言う点だ。

遊戯王の世界ではデュエルモンスターズの神である“三幻神”を初めとしたカード群、バトスピの世界では世界の命運を左右する黄道12星座を模したカード群“12宮Xレア”がそれに当る。

バトスピのカードが変化したデュエルモンスターズのカードに精霊が宿ったとしても何一つ不思議は無く、その中に邪悪な精霊が宿ったカードが有ったとしても特に不思議でもない。

さて、ガイ・アスラだが、どちらかと言えばこのカードの場合はこのカードを切り札としていた以前の所有者の持っていた人類への憎悪を気の遠くなるほど長い時間受け続けて為にガイ・アスラの精霊自体が“狂った”としか言いようが無いだろう。…もつとも、その頃はまだガイ・アスラのカードはバトスピのカードだったが。

そんな訳で元々邪悪な精霊と狂った精霊の宿ったカードは態々二枚とも、『魔人』の力を使い結界を張って封印までした代物なのだ。

…ブルー寮にそんな魔龍帝のカードが有ると言う事は、総麻の持っている珍しいカードに目を付けたブルー生の一人がセキュリティの甘いレッド寮にある総麻のカードを盗みに入ったと言う所だろうか。

だが、狂った精霊と邪悪な精霊、どちらにしてもそんな物の宿ったカードが簡単に扱える代物ではない。並みのデュエリストでは逆にカードの精霊に使われる事は想像で

きる。寧ろ、自分に被害の無い範囲でならば、魔龍帝に操られるのもカードを天罰として暫く放置する事に決めた。

(…まあ、そいつと戦う時は赤デッキか白デッキを使うか…)

使われる事はないだろうが万が一と言う事もある。あのカードに対抗できるだけのパワーを持った赤と、パワーを封じる事のできる戦術性を持った白の二色のデッキを使う事を決める。幸いと言っては何だがカードの持つ力で誰が持っているのかは、はっきりと分かるのだから、対策も立て易い。

そんな事を考えながら赤デッキと白デッキの調整を終え、明日の月一テストに使う予定の緑デッキのカードを一枚一枚確認して最後に切り札となる二枚のカードを加える。

「これで良いか…」

出来れば今まで使うことのなかった緑のデッキを一度使ってみたのだが、明日は試験(テスト)がある。特に寮の昇格には興味は無いが、それでも変な点数は取りたくないと思うのは当然の事だろう。教科書を開いて明日の予習を始める。

(…何故だろう…嫌な予感がするのは?)

運が良いのか悪いのか、一人だけの部屋では余計な事まで考えてしまう。

ふと、そんな事を疑問に思う。それはまだ直感的な物だが、事態は魔龍帝のカードが盗まれただけでは済まないだろう。寧ろそれが引き金となって、もつと大きな事態が動

き出そうとしている。そんな予感さえしてくるのだ。

そんな事を考えていると総麻の持つていたシャープペンが音を立てて折れる。

「…最悪だな…」

魔人達の《力》…その中でも特に攻撃的で戦闘向きな物が役に立つ。それは最も総麻が恐れている事だ。何よりも…

誰かが今も自分を狙っていると錯覚してしまう感覚、それが告げる一度経験した『死』への恐怖。それが、総麻が最も恐れている事だ。

…命の危険は有るとは言え、この世界では時折だろう…。自分と言うイレギュラーが居る以上、なのは達が居る事も不思議ではない。故に何処かで事件の流れが変わり…最悪の事態になる危険もある。

第三期の事件は…直接的に死が近くなる事件は全てを十代達に任せて簡単に問題を回避する術は有るが、総麻は親しくなった彼女達や十代達を見捨てる様な事が出来る人間じゃない。恐れていても、関わろうとするだろう。

無意識の内に力が籠ってしまい折れたシャーペンの半身が彼の手の中で砕け散る。

危険な力を秘めたカードを奪われた事で妙な方向に考えが向かってしまう事に溜息を吐きながら、そんな考えを消す為に試験勉強を放り出しサッサと寝てしまう事に決めて電気を消してベッドに横になる。

余談だが、隣の十代達の部屋では夜遅くまで翔がオシリスの天空竜のポスターと死者蘇生のカードが飾られた祭壇に祈りを捧げていた。

「ふあ……」

欠伸をしながら筆記試験の解答と見直しを終えた総麻は一箇所に視線を落としていた。彼の視線の先には、十代と翔の二人が寝息を立てて眠っていた。

(…十代…遅刻した挙句に居眠りするなよ。それと…)

ふと、別の場所に視線を向けると其処には万丈目が十代を睨んでいるのが見える。どんな感情を向けて居るのかは大体理解できるが、それでも筆記試験の最中は止めておいた方が良くと思うのは気のせいだろうか？

(…それにしても、変だな…)

この教室の中には魔龍帝の気配は感じられず別の場所から気配を感じ取れる。魔龍帝のカードを盗んだ犯人は恐らくは一年生ではなく上級生の中に居るのだろう。

(…ったく、良い機会だから犯人の顔位は確認したかったんだけどな…)

総麻としては犯人は万丈目の取り巻きの内の誰かと思っていたのだが、予想に反して犯人はこの教室の中には居なかった。これで月一試験で魔龍帝のカードを相手にする可能性は低くなった。

(…昼休みにでも気配を探してみるか? …誰が持っているか、顔位確認は出来るだろうし…)

試験終了のアナウンスを聞きながらそんな事を考えていると、

「っ!? な、なんだ?」

大勢の生徒が急いで教室を出て行く。未だに眠っている十代と翔の二人を起こそうと近づきながら、何が有ったのかと思うと彼に話しかけてきた『三沢 大地』の言葉で疑問は氷解した。

「昼休みに新しいカードの入荷をするそうだけど、君は行かないのかい?」

「ああ。まあ、今更下手にカードを加えてもな。慌ててカードを加えても改悪になったら意味は無いからな」

そんな会話を交わして二人が自己紹介する。

「あ、あれ、みんなは？」

そんな時、タイミング良く十代達が目を覚まして周りを見回して大半の生徒が居なくなっている事に疑問の声を上げる。

「購買部さ。昼休みに新しいカードが大量に入荷する事になってるからな」

「ええええええええええ！ カードの大量入荷!?!」

「すげえ、どんなカードが有るか見たくっつてしようがねえ！」

二人とも驚きの声を上げるのを見ると、カードの入荷に関する情報は知らなかったの
だろう。

「オレは次の入荷の時に買えば良いから、午後の試験に備えて何か食べてくるよ」

伸びをしながら十代達に手を振る事で挨拶して総麻は教室から出て行く。

そう言っつて教室を出て、生徒が殺到した事で混んでいる購買で身体能力を最大限に發揮して人混みを掻き分けてドロップを購入すると、それを食べながら魔龍帝のカードの気配を探ろうとしたのだが…。

「…消えた…?」

それに気が付いた瞬間、思わず眩いてしまう。確かに存在していたはずの魔龍帝の気配が消えていたのだ。

「っ!? (…どう言う事だ…。オレの動きに気が付いて自分から気配を消したって言うの

か？」

思わず舌打ちしながら午後の実技試験の時間ギリギリまでデュエルアカデミア中を走り回ったのだが、何処からも魔龍帝の気配が現れる事は無かった。

実技試験の会場：

順調に勝ち進む三沢と明日香やなのは達三人と、辛うじて勝つ事が出来た翔、

まだ万丈目とその取り巻き、十代、そして、総麻の実技試験のデュエルは始まっていない。

デュエル中ならば魔龍帝の気配が現れると考えて、総麻は自分の試験の時間まで上級生の実技試験を見ていたのだが、未だにその気配はつきりとしなない。

自分の名前が呼ばれたのに気が付くと会場に移動する。そこには万丈目の取り巻きの一人がいた。

「ドロップアウト、オレはあいつのようにはいかねえぞ！」

「…同じ寮の生徒が相手じゃないのか？」

思わず疑問に思いながら横目でクロノスに視線を向けて心の中で溜息を吐く。…恐らくは十代が万丈目と戦うのにあわせて総麻も同じ様にオベリスクスブルーの生徒を相手に選んだのだろう。十代は十代で万条目と対峙している。

だが、対戦相手が誰であつたとしても、今更対戦相手の変更は出来ないし、する必要も無い。

ここに、

「デュエル!!!」

実技試験の開始だ。

総麻 LP4000

取り巻きB LP4000

「オレの先行！ ドロー！」

デッキからカードをドローして手札に視線を落とす。

(…手札は最高。下手に長引かせる気は無い。それに上級生の試験で魔龍帝を探したい事だしな…速攻で決着を着けるか…)

取るべき戦術を選択し、総麻は六枚の手札の中から一枚のカードを手に取りそれをデュエルディスクにセットする。

「オレは永続魔法『賢者の木の実』を発動」

その魔法の発動と共に総麻のフィールドに巨大な大樹が現われる。

「オレはこれでターンエンドだ」

総麻がモンスターの召喚も魔法の発動もせずにターンの終了を宣言すると、取り巻きBは嘲笑うような笑いを浮かべる。

「はっ、なんだ、手札事故か？ オレのターン、ドロロー！ エリートの手を見せてやるよ！」

そう言うって取り巻きBは手札のカードを発動させる。

「手札から魔法カード『天使の施し』を発動！ これでカードを三枚引いて二枚を墓地に捨てる！ そして、手札から魔法カード『死者蘇生』を発動！ 墓地から『闇より出でし絶望』（攻撃力2800）を特殊召喚！ そして、『ゴブリンゾンビ』（攻撃力1100）を召喚！ 闇より出でし絶望とゴブリンゾンビでドロップアウトにダイレクトアタック！」

総麻へと巨大な影と屍となったゴブリンの剣が襲い掛かる。当然ながら伏せカード一枚も存在しない総麻は二体のモンスターの攻撃でライフを大きく削られる。

総麻 LP40000↓12000↓1000

「どうだ「お前のバトルフェイズは終わりか？」ああ、それがどうか「賢者の木の実の効果発動。相手のバトルフェイズ終了時、受けたダメージ1000毎にカードを一枚ドロし、フィールドに『果実トークン(功0/守0)』を特殊召喚する。オレの受けたダメージは3900。よって、果実トークン三体を特殊召喚し、三枚ドロー」くっ、カードを二枚伏せて、ターンエンドだ！」

『賢者の木の実』

永続魔法

相手ターンのバトルフェイズ終了時、受けたダメージ1000ポイント毎に『果実トークン(功0/守0)』一体を特殊召喚し、カードを一枚ドロする。

また、このカードのコントローラーは効果を発動した後の自分のエンドフェイズにライフを1000払わなければ、このカードは破壊される。

総麻 LP100

フィールド

永続魔法『賢者の木の実』

手札×8

取り巻きB LP4000

フィールド

闇より出でし絶望 攻撃力2800

ゴブリンゾンビ 攻撃力1100

伏せカード×2

手札×3

総麻のフィールドには三体のトークン、手札は八枚と増強されたが、ライフは僅か100。相手のフィールドには攻撃力2800の上級モンスターが存在している以上、一瞬で消える程度のライフだろう。

「オレのターン、ドロー」

これで総麻の手札は九枚に増える。

（オレの伏せカードは『聖なるバリアミラーフォース』と『天罰』。あいつがああ時のモンスターを召喚しても安心だ）

「自分フィールドのトークン三体を生贄にして、現われよ：『天帝ホウオウガ』！」

賢者の木の実の後方から巨大な翼を広げた孔雀の様にも鳳凰の様にも見える見る者

を魅了する美しき天の覇者がその姿を現す。

「な!? なんだ、そのモンスターは!? 三体の生贄なんて…伝説の…。しかも、攻撃力は…」

天帝ホウオウガ ☆10 攻撃力4000

「そして、手札からモンスターカード、蛮騎士ハーキュリーの効果発動。自分のライフが相手のライフよりも2000以上低い時、手札を三枚捨てる事で特殊召喚できる」

天から降りてくるのは漆黒の騎馬に乗った漆黒の鎧を纏った槍を構えた騎士。

蛮騎士ハーキュリー ☆5 攻撃力2400

「な!? 一ターンで上級モンスターを二体も召喚しただと」

「…調子に乗って攻撃してくれてありがとう。って所だな。賢者の木の実はプレイヤーの命を吸って咲き誇る呪われた大樹。お前の攻撃によって流れたオレの血（ライフ）がこの大樹を咲き誇らせた！ だけど、もう必要ない事だし、手札から魔法カード『大嵐』発動！」

総麻のカードから吹き荒れる風が相手の伏せカードを破壊し、同時に総麻の命を吸って咲き誇っていた大樹を粉砕する。

「行け、天帝ホウオウガは闇より出でし絶望に攻撃！」

総麻の号令と共に天高く舞い上がったホウオウガの体当たりが漆黒の影を粉砕する。

「う、うわぁー!!!」

取り巻きB LP4000↓2800

「墓地にある、ブラックアメンボグの効果発動、☆7以上のカードが破壊された時、墓地から特殊召喚できる！そして、ハーキュリーでゴブリンゾンビに攻撃！」

ブラックアメンボグ ☆4

属性：風

攻撃力1500／守備力0

昆虫族

効果

☆7以上のモンスターが破壊された時、墓地に存在するこのカードを特殊召喚でき

る。この効果で召喚されたこのカードが破壊された時、墓地には行かずゲームから除外される。

総麻のフィールドには黒いアメンボの様なモンスターが召喚され、蛮騎士ハーキユリーがゴブリンゾンビへと切りかかる。

「あつ、ああ…」

取り巻きB LP2800↓1500

「ブラックアメンボでトドメだ！」

少なくとも、ダイレクトアタックに対応できるカードをゴブリンゾンビの効果で手札に加えるしか防ぐ術は無いのだが、それも無い様子だった。漆黒のアメンボの直接攻撃が絶望的な表情を浮かべた取り巻きBに直撃する。それは完全に総麻の手の中で踊らされていたデュエル。

「うわあ!!!」

取り巻きB 1500↓0

一瞬の決着に静まり返っている事に気が付いて、総麻が会場から離れると遅れて歓声が沸きあがった。

同時に上級生の試験会場では一人の生徒が試験に現われず不戦勝になった者が出た。そして、現われなかった生徒はその日の内でやつれている姿で発見された。

そして、その日の内で魔龍帝ジークフリードのカードの持つ力を総麻が感じる事は無かった。

???

『…王よ…魔龍帝の力、ハハハ…』

一体のモンスターが頭を下げながら一枚のカードを差し出しながら、巨大な漆黒のドラゴンの石像へと告げる。モンスターの足元は一人の男が倒れていた。

『……………』

『ハッ、全ては王のお心のままに』

石像から聞こえる唸り声の様な言葉にモンスターがそう返すと、そのモンスターは黒い霧に変わり、一枚のカードとなつて魔龍帝のカードの隣に落ちる。

黒い霧が倒れている男の中に消えると、男は立ち上がり邪悪な笑みを浮かべ、二枚のカードを手取る。

「王よ、必ずや貴方の器に相応しい者を捧げましょう。……この『魔龍帝騎ダーク・クリムゾン』が」

そのカードの絵は先ほどまでのモンスターと同じ姿。そして、カードに描かれたモンスターの名もまた『魔龍帝騎ダーク・クリムゾン』と有った。

TURN—05 『廃寮での決闘（デュエル）、敗北と決意』

レッド寮の食堂で十代達とモンスターカードをドロウしてそのレベルにあった怖い話をしていた時、総麻は…。

「4か」

総麻が引いたのは☆4の魔導アーマーエグゼのカード。それを見て面白そうな笑みを浮かべ、どこからか黒いマントの様な物を取り出し、それを羽織ると…。

「ふふふ…じゃあ、レベルに合わせてそれなりに怖い話をさせてもらおうか」

「な、なんだか…物凄く怖そうだな」

「そ、そうすつね」

「そうなんだな」

「当然だろ…☆4とは言え2000を超えた攻撃力のモンスター…それなら、☆4でも一つ上に届くほどの奴を選ばないとなあ…」

そう、何故か魔人達のその中に…こう言う時にしか役に立たない妙な知識まで多く混ぜていたりする。他にも某神速の剣士のナンパ術とか、某暗殺者の手芸に関する知識とか…。何気に手芸の腕前だけは私生活でも活用できているが。

「え、選ばなくたっていいですよ〜！」

「な、なんかワクワクするな」

「行くぞ」

…その時、十代達の悲鳴が上がった事を追記しておこう。そして、その悲鳴を聞きつけて入ってきた徳寺先生が☆12の話として廃寮の話をしてくれたのだが。

「なあ、これから廃寮に「眠いからパス。明日も授業だぞ」チエ、なんだよ」

折角の誘いで闇のデュエル関係の中では比較的安全な事件とは知っているが、退学の危険だけは避けたいと考えて十代達からの誘いを断って一人で部屋に戻って眠ったのだが…。翌日…総麻はその判断を後悔する事になる。

翌日…総麻の知っている未来予知の中に有る、廃寮に入った事を咎めに論理委員会が現われた事はなかった。

それを疑問に思うが誤差として何日か有るのかと考えて十代達の部屋に入ったが……部屋には誰も居なかった。

「…変だな…先に食堂に行ったのか？」

そう思つて時計を見ても食堂の中にいるレッド生の中に十代達三人の姿は無かつた。

（…無関係のオレの所に来て無いだけで論理委員会にでも連れて行かれたか…。まあ、次の制裁決闘を頑張つてもらおう…）

心の中でそう考えて朝食を食べ終えたとアカデミアに向かつたのだが、教室の中には明日香やなのは達の姿まで無かつた。

そして…授業が始まる前に聞いた鮫島校長の言葉を聞いて総麻の顔は蒼白になる。

『……………今朝から以上の七名が行方不明となつています。何か心当たりのある人は……………』

（っ!? 十代達が行方不明!? 闇のデュエルに負けたのか!? いや、万が一十代が負けただとしても、行方不明になるなら十代だけのはず…どうなつてる!?)

此処は似ているだけで自分の未来予知が当てになるかは分からなかつた。だが、これは確実に違う。

(オレが此処にいる…その影響なのか?)

自分が此処に居ることが原因で十代が闇のデュエルに負けた。だとしたら…。

(…動くしか…無いのか?)

手が出るほど掌を握りそれでも動く事の出来ない自分に対して苛立ちを覚える。本当なら授業をサボってでも十代達が向かった廃寮に行くべきだろう。その事を知っているのは今学園で自分だけ…そして、時が過ぎれば過ぎるほど危険に苛まれている。

だが、今の総麻は上の空の態度で授業を受けている。怖いのだ…死の危険に近づくのが。恐ろしいのだ…死に近づくのが。どれだけの力を持つていたとしても、一度心に焼き付いてしまった死への恐怖心からは逃れられない。

(そうだ…まだ負けたって決まった訳じゃない。…もしかしたら、廃寮で気絶していて授業に出られなかっただけかもしれない…)

逃げ出したいという願望と共に心に浮んだ都合の良い考え。それを抱きながら授業が終わった帰り道、総麻は誰とも会話する事無くレッド寮への帰り道を歩き、自分の部屋の前に立つ。そして、部屋のドアを開くと扉の間に挟まれていた封筒が落ちていくのが視界の中に映る。

「おっつ」

地面に落ちる前にそれを受け止めると部屋に入ってその封筒を開く。

「っ!？」

そのの中身を見た瞬間、思わず驚きのあまり声にならない悲鳴を上げてしまう。そこに入っていた物は彼の中に有った微かな希望を砕くのに十分過ぎる代物だった。

「ハネクリボー……」

一番先頭に置かれていたカードを手にとって震える声でそう呟く。それは十代の持つている『ハネクリボー』のカード。まるで……十代がどうなったか教える様に……

『ク……クリ……』

『グルウ!』

総麻がハネクリボーのカードを手を取った瞬間、半透明のハネクリボー……ハネクリボーの精霊が現われた事でそれが間違いなく十代の物だと伝えていた。

フラフラと弱った様子のハネクリボーの精霊を総麻の影から現われたジークヴルムの精霊が受け止め、慌てて表れた白い翼を持った天使の姿の精霊『天使長ソフィア』へと託す。

「他には、スチームジャイロイド、デスコアラ、エレキジ、サイバーブレイダー……後の二枚は見覚えはないけど……高町と八神のカードか」

一枚一枚カードの名前を読んでいくと……そのカードが行方不明になっている者達のカードと言う事は精霊の宿ったハネクリボーのカードの存在だけで確信できる。

そして、カードと一緒に入っていた手紙には『今夜十時、廃寮へ来い』とだけ書かれていた。

『ガンツ！』と言う音を立てて総麻の手が壁に叩きつけられる。

「何が有った…？」

そう言わずには居られない。十代が負けた事も信じられなければ…廃療でのデュエルの相手はインチキ闇の決闘者（デュエリスト）『タイタン』のはずだ。デーモンデッキは強力だが、十代の運の強さはそれを凌駕していたはずだ。

「っ!？」

疑問を思いながら、ゆっくりと七枚のカードに触れると頭痛が襲う。……………本来、世紀末の魔人達の中でそれは敵側に位置していたはずの《力》のはずだ。

『私はスカルデーモンを生贄に捧げ…』

「っ!？」

夢とも現実とも取れない空間…総麻はそこで黒い闇に包まれた場所で十代とタイタンのデュエルの最中に居た。

本来なら此処に居るのは十代とタイタンだけのはずだった。だが、闇の決闘（デュエル）に巻き込まれたのか、気絶している明日香と翔に隼人の他になのは、フェイト、はやての三人の姿まで有った。

デュエルの状況は十代のフィールドには攻撃力2600の融合しないE・HEROの中で最高の攻撃力を誇る『E（エレメンタル）・HERO エッジマン』の姿が、それに対して相手のフィールドには攻撃力2500の『迅雷の魔王スカルデーモン』のカードが存在している。そして、タイタンはスカルデーモンを生贄に捧げて更なるモンスターを召喚しようとしている。

（妙だな、スカルデーモンの攻撃力は2500、生贄一体で召喚出来るモンスターの中じゃ高攻撃力のはず…なんでそれを生贄に…）

総麻の疑問は新たに現われたモンスターとの出現と共に驚愕へと変わる。

『我は『魔龍帝騎ダーク・クリムゾン』を召喚する!』

タイタンのフィールドにスカルデーモンと入れ替わる様に二本の槍を持った闇蒼の体色を持った龍人が現われる。

「なっ?! あれは!？」

咆哮を上げて現われた邪悪なドラゴン達の主の姿に驚愕を隠せない。そのカードは元々デュエルモンスターズのカードではなく、まだバトルスピリッツのカードのはずだ。

「ダ、ダーク・クリムゾン!!! 何で魔龍帝騎のカードが!？」

『な、なんだよ、このモンスター?』

ダーク・クリムゾンが両腕の鎖を引き上げるとそれに引き摺られる様にフィールドに漆黒の体色の総麻の持つ龍皇ジークフリードに似たドラゴンが二体現われる。

「あのカードは…!」

『ダーク・クリムゾンの召喚に成功した時、デッキのカードを上から十枚確認し、その中に『龍帝』と名の付く儀式モンスターが有る時、召喚条件を無視して特殊召喚できる!!! 出ろ!』

『魔龍帝ジークフリード!!!』

『バトル! やれ、魔龍帝ジークフリード、ダーク・クリムゾン!!!』

総麻の目の前で魔龍帝の炎によってエッジマンが焼き尽くされ、残ったもう一体の魔龍帝とダーク・クリムゾンのダイレクトアタックが十代を飲み込む。

『うわああああああああ!!!』

それと同時にタイタン以外の全員が周囲の闇に飲み込まれていく。それが闇の決闘（デュエル）に負けた敗者の末路であると示すように。

「あつ…ああつ…。」

姿は見えないはずなのに…総麻へと向かって助けを求めるように伸ばされた手が…

「十代！ 翔！ 隼人!!! 明日香!!! なのは、はやて、フェイト!!!」

無力にも助けようと掴もうとした手はすり抜けていく。

「う…うわあああああああ!!!」

気が付くと自分の部屋に居た。

「…くっ!!!」

床に拳を叩きつける。

「…あれが昨日有った事だつて言うなら…。」

妙に現実的（リアル）な夢として捉えることが出来るが…。

「あれは…オレの責任だ…。」

魔龍帝のカードを早く奪い返さなかったから…今回の十代の敗北は起きて、七人の人間が行方不明になった。

「…上等だ…。行つてやろう…絶対に助け出す…オレの…友達（なかま）を!!!」
呼び出しの手紙を握りつぶしながら決意を込めてそう宣言する。

TURN—06 『悪魔の宴、立ち塞がる魔界七将』

「良」

今回は今までのデュエルとは違い、どんな相手にも対応出来る様に六色のデッキの調整を終え、布団や鞆などを使ってベッドで寝ていると言う偽造を完了する。

呼び出されたデュエルでは愛用品の赤のデッキを使う心算（つもり）だが、相手が総麻の元から奪われた魔龍帝ジークフリードや魔龍帝騎ダーク・クリムゾンのカードを所持しているとなると、攻撃に重点を置いた愛用品でもある赤のデッキでは危険な可能性も有るので、念の為に残りの五色のデッキも調整してある。

最も、赤のデッキ以外に使うとすれば白のデッキの方が高いだろうが。

魔龍帝の方は元々自分のカードだ。そのステータスと効果はよく知っている。そして、魔龍帝騎の方はもう一つの効果よりも、運が悪ければ召喚された瞬間にほぼ敗北が決定する様な召喚時に発動するモンスター効果の方が脅威だろう。

…そう、否融合のE・HEROの中で最大の攻撃力2600の数値を持ったエッジマを召喚したと言う優位な状況で、たった一体のモンスターの召喚だけであの十代がその瞬間に逆転され敗北した事からも理解できる。

まあ、攻撃を防ぐ為の伏せカードも無い状況で、召喚条件を無視して最大三体の強力モンスターを一齐に召喚する効果を持ったモンスターの召喚など、許してしまった瞬間に敗北するのは当然の事なのだが…。

(…そろそろ行くか…)

そんな事を思いながらデッキから一枚のカードを抜き出す。それはあの直後に『自分をデッキに入れる』とでも言う様に、バトスピのカードからデュエルモン스터ズのカードへと姿を変えていながら、未だに白紙のままのカード。

(…『使え』…そう思って良いのか?)

相手は間違いなく強敵、対抗する為には切り札は一つでも多い方が良いに決まっている。赤のデッキにこのカードは入れておくべきだろう。

不確定要素では有るそれを赤のデッキに納めると、総麻は与えられた《魔人》達の能力の中…某骨董品屋の《忍者》の能力を利用して寮長である大徳寺の目を盗んでレッド寮から出る。

前もって廃療の場所は確認してあるので、何者にも気付かれずに向かう事が出来る。元々夜に呼び出されたのだから、安心と言えば安心なのだが、用心するに越した事は無い。

「ふう…」

気配を消しながらレッド寮から離れると、そこで一度警戒を解く。流石に長時間気を張り詰め続けていると流石に疲れる。その精神的な疲労が寮で待っているデュエルに影響すると言うのは避けたい。

廃寮への道を暫く進んでいると、誰かの後姿を見かける。

(…拙いな…)

服装から考えて教師ではなく、女子生徒だろうが、下手に見つかりたくは無い。それでも、廃寮に向かう訳は無いだろうと考えていたが…。

(…おいおい…何の用だよ…廃療(マニ)に?)

何の目的も無く態々立ち入り禁止の廃寮まで進んでいくのは明らかに不自然だろう。可能性としては、総麻を此処に呼び出した敵と考えられるが、

「…おい…」

「わっ!」

気配を消しながら後ろに立って声をかけると、目の前の少女は驚く声を挙げて尻餅を
ついでしまう。

「あー……悪い」

驚かせてしまった事に謝りながら、立ち上がるために手を差し出す。

一度は敵かとも思ったが、先ほどの反応から考えても魔龍帝に関わっている相手とは
考えられない。

「あ、あの、貴方はなんでこんな所に居るんですか!？」

「それはこっちのセリフだけだな……。強いて言うなら、丁度行方不明の生徒の内の三人
と友達なんだけど、昨日ここで肝試しをするって言っていたから気になって来て見たん
だ。それで、君は何でこんな所に?」

総麻の手をとって立ち上がる女生徒の質問に答える。月が雲で隠れていて顔がよく
見えない為に誰なのかは分からないが……もつとも、接点が無い生徒の事など知っている
訳も無いだろう。

もつとも、総麻の言葉は全部が全部真実ではない。確信を持った上で呼び出されて此
処にきたのだから。

「……昨日、高町さん達が森の中に入って行く所を見たんです。それで、心配になって
……」

丁度彼女が昨日見たと言う、入って行った森の先に有ったのが廃寮と言う訳だ。

「だったら君は早く帰って、先生達にでも報告した方が良いだろうな」

「貴方はどうするんですか？」

「……………。オレは中で十代達が怪我しているかも知れないからな。念の為、この中に入って探してくる。」

そう言つて女生徒に手を振りながら、誰も入れない様に張られている針金を潜つて廃寮の扉へと近づいていく。

「あ、あの！」

「流石に二次災害のリスクは出来るだけ避けたいから、君は…っ!」

止めようとする女生徒の声にそう答えながら扉に手を触れた瞬間、妙な気配と共に独りだに扉が開いていく。

（拙い、やつぱり罠が!?) 「おい、ここは危険だ、早く…」

総麻が慌てて警告しようとした時は既に遅く、闇の中から伸びる何かによつて女生徒とともに廃寮の中に引きずり込まれていく。

（っ!?! こいつは…）

微かに廃寮の奥に見えた影、それは…。

（ジークヴルム…いや、違う…あれは…）

紫の体色を持った苦しい瞳に染まったドラゴンの悲鳴にも聞こえる鳴き声、その姿には見覚えがあった。

(…ジークヴルム…ヴェガ…?)

自身の切り札である雷皇龍(ジークヴルム)に似た姿のドラゴンの石像、それを見る。嘆きの様にも聞こえるその龍の声に答える様に手を伸ばすと、総麻の手の中に一枚のカードが握られた。

『DT 蝕星龍ジークヴルム・ヴェガ』

と、そのモンスターの名前だけが記されたカードが総麻の手の中に納まった瞬間、そのカードは白紙に変わり、彼の意識は闇の中に飲み込まれていく。

「っう…」

一枚のカードを握り締めながら目を覚ますと周囲の景色を眺める。

(……)は廢寮の地下……か?)「まったく、ゲストに移動の手間はかけさせない……か。だったら、態々呼び出さないうで貰いたいな……」

頭を押さえながら握っていたカードへと視線を向ける。

「……のカードは……?」

効果の分からない白紙のカード……それをポケットの中に入れ、改めて周囲を見回す……。光源となる蠟燭と、足元に書かれている魔法陣らしき物、だが、そこには他に誰かの気配は……。

「おーい、起きろー」(彼女……何処かで見たような気が……)

「ん?」

肩を揺すりながら一緒に此処に運ばれたであろう女生徒を起こす。

「……は……」

「気絶している間に運ばれたらしい……。所で、名前を聞いて無かったけど……オレは天風総麻、君は?」

「あ、はい! 私は『ギンガ・ナカジマ』と言います」

「っ!?(いやいやいや、なのは登場人物でも高町達より年下……まあ、深く考えないでおこう)そうか。で、隠れてないで出て来たらどうだ?」

彼女の名乗った名前と、彼女の容姿に対して思わず驚きを露にしそうになるが、それ

を踏みとどまり、ゆっくりと総麻はその部屋の中を指差して宣言する。

その総麻の言葉に答える様に部屋の影響から一人の黒い服に仮面をつけた大男が現われる。…その姿は、確かに外見はデーモンデッキを使う自称闇のデュエリストの『タイタン』だ。だが…。

「よく来たな、アマナギソウマ。我が名は「お前…何者だ？」…ふふふつ…。」

自分の名を名乗ろうとしたタイタン（？）の言葉を遮る様に総麻の言葉が響くと、急にタイタン（？）の声が変わる。

「我が名はダーク・クリムゾン。この名と、このカードを見れば我が何者か、お前になら分かるだろう？」

そう言ってみせるカードと名乗った名前に総麻は思わず驚愕を浮かべる。

「ダーク・クリムゾン…まさか…。お前…オレから魔龍帝のカードを盗んだのは…？」

「いや、あれは別の人間だ。残念ながらお前の張った結界には、我々カードの精霊では手が出せなかった。だが、その者のお蔭で我が僕（しもべ）をこうして手にする事が出来た。その事に関しては感謝しなければな」

そう言つてタイタンを操っているダーク・クリムゾンの精霊は自らのデッキを取り出し、デュエルディスクにセットする。

「…最後に一っだけ聞かせろ…お前に負けた十代達は…どうなった？」

「ああ、我がデッキと僕のテストに相応しいデュエリスト…だったか、此方でのカードバトラーを指す言葉は？ まあ、魔龍帝の最初の生贄として相応しい強者だった」

「貴様!!!」

思わずダーク・クリムゾンの言葉に対して怒りを露にする総麻だが、ダーク・クリムゾンは『まあ、待て』と言う様に手を翳し、

「寧ろ、感謝して貰いたい所だな。あのデュエリストと闇のデュエルに巻き込まれた小娘達は我が闇に飲まれない様に防いで居てやっているのだからな」

「なに!?!」

「安心しろ…お前が勝てば、返してやろう。だが…お前が負ければ…支えている我が手を離れただけで…奴等は闇の生贄となる。其処まで言えば分かるだろう?」

「ちよつと待て下さい! なんですか、さつきから闇とか生贄とかって…」

「…あー…。巻き込んでしまったみたいで悪いけど…後で説明するから…今は黙っていてくれ」

ギンガの言葉にそう答えて総麻もデュエルディスクに赤のデッキをセットする。

「デュエル!!!」

総麻 LP4000

ダーク・クリムゾン LP4000

「私の先行、ドロー。私はデーモンソルジャーを攻撃表示で召喚し、ターンエンド」

デーモンソルジャー 攻撃力1900

ダーク・クリムゾンのフィールドに召喚されるのは武装した悪魔が現われ、ターンが総麻へと移る。

「オレのターン、ドロー！ オレはアンキラーザウルスを攻撃表示で召喚！」

アンキラーザウルス

☆4

属性：炎

攻撃力1500／守備力1200

恐竜族

効果

自分フィールド上に炎属性のドラゴン族が存在する時攻撃力は300ポイントアップする。

「そして、バトル！」

総麻のフィールドに尻尾がドリル状になった赤いアンキロサウルスが現われると、尻尾のドリルを回転させながらデーモンソルジャーへと向かう。

「手札から速攻魔法『突進』を発動！ これで攻撃力は700ポイントアップ」

アンキラーザウルス 攻撃力1500↓2200

突進するアンキラーザウルスのスピードが増して尻尾のドリルでデーモンソルジャーを粉碎する。

ダーク・クリムゾン LP4000↓3700

「カードを一枚場に伏せ、ターンエンドだ！」

総麻のフィールドに伏せカードが現われ、ターンがダーク・クリムゾンへと移る。

「ふっ。挨拶代わりだったけど、そろそろ遊ばせてもらおうとしよう。我は『骸騎士（がいきし）ヴェリアム』を攻撃表示で召喚し、カードを伏せてターンエンドだ」

ダーク・クリムゾンのフィールドに召喚される新たなモンスター…骸骨の様な騎士の

姿のモンスターが現われる。

「っ!?」（予想通り、バトスピのカードを）

骸騎士ヴェリアム

☆4

属性：闇

攻撃力1600／守備力1200

悪魔族

効果

自分フィールド上の闇属性モンスターが破壊された時カードを一枚ドロウする。

「オレのターン！ ドロウ。」

伏せられたカードも気になる所だが…。手札には…。

（行くぜ、ジークヴルム！）「オレはアンキラーザウルスを生贄に…雷よ、天を裂け！

雷皇龍ジークヴルム…攻撃表示で召喚!!」

アンキラーザウルスが消えて現われたルビーを砕きながら、ジークヴルムが召喚される。

「その瞬間、罨カード発動！ 隠れ兵！ 手札の『冥闘士バラム』を特殊召喚！」

冥闘士バラム

☆4

属性：闇

攻撃力1600 / 守備力1200

悪魔族

効果

このモンスターを戦闘で破壊したモンスターはバトル終了時、破壊される。

「バラム…だって!?!」

ダーク・クリムゾンのフィールドに召喚された新たなモンスターに思わず顔を歪めてしまう。そのモンスターの効果は総麻もよく知っている。

「その通りだ。貴様も使っている紫の…いや、此方では闇属性モンスターだったな…」
「だけど、ヴェリアムは無防備だ！ ジークヴルム、ヴェリアムを攻撃しろ！」

総麻の指示に従い、ジークヴルムは天井擦れ擦れに飛び上がり、雷光を纏ってヴェリアムへと突進する。

ジークヴルムでバラムを破壊するのは効果を考えると完全に自殺行為だ。だが、ヴェリアムの方は倒しやすいモンスターでしかない。

「ぐ…。」

ダーク・クリムゾン LP 3700 ↓ 3200

「更にジークヴルムの効果ダメージを受けろ！」

総麻の指示に従うジークヴルムの突進は、前回のフェイトとのデュエル以上にスピードを増している。ダーク・クリムゾンへのジークヴルムの精霊の怒りからなのだろう。

「ぬう!!! 忠告しておこう…怒りは身を滅ぼすぞ。ジークヴルムのバーン効果発動に対して手札のモンスター効果を発動する」

ダーク・クリムゾン LP 3200 ↓ 1600

「ちっ、ダメージに反応す…ガハア!!!」

総麻 LP 4000 ↓ 2000

何かが総麻の体を切り裂く。そのダメージはソリットビジョンの物じゃない。切り裂かれた所からは鮮血が舞い、慌てて手札とデュエルディスクを避けた事でカードに血がかかる事は避けたが…。

「ええ!? ど、どうして、ソリッドビジョンで怪我を!? それに、何で行き成りライフが半分に…」

「はあ…はあ…。ダメージがあつたのは、そいつのモンスター効果か?」

「その通りだ。我は手札の『魔界七将ベルドゴール』のモンスター効果を発動させた」

魔界七将ベルドゴール 攻撃力2000

ダーク・クリムゾンのフィールドに現われたのは一体のモンスター。総麻の体を切り裂いたナイフから滴る鮮血を舐める頭巾を被った悪魔の姿をした暗殺者と言うべき、魔界七将の一角にして、紫のXレア…。

「魔界七将ベルドゴールはダメージを受けた時に手札から特殊召喚できる効果を持つ。さらに効果ダメージで特殊召喚された時に、我が受けたダメージに400ポイントプラスして相手に効果ダメージを与える。そして、もう一枚…」

更にダーク・クリムゾンのフィールドに紫の体と鎌を持った禍々しい悪魔が召喚される。その姿には総麻には見覚えがあった。

「今度はパンデミウムか……？」

「その通り……我は『魔界七将パンデミウム』を特殊召喚。このカードは同一ターンの間に互いのライフが半分以上減った時は手札から特殊召喚できる」

魔界七将パンデミウム 攻撃力2200

「ぐ……」

タイタンのフィールドに現われた新たな魔界七将の威圧に彼のターンだと言うのに……いや、彼のターンだからこそなのか、膝を折りそうになる。

「魔界七将を二体も……オレのターンに召喚するだ……」

「ふふふ……。ゲームは此処からだぞ、アマナギソウマ。この程度の絶望は乗り越えてもらわなければ、お前はあの御方に相応しくない……」

魔界七将2体を率いながらダーク・クリムゾンのターンエンドの宣言が響く。

TURN—07『天を切り裂け炎の流星、龍星皇VS魔龍帝』

(思ったよりも傷は深いし、血を流しすぎたか?)

今だ血を流している軽くベルドゴールの効果ダメージで受けた傷口に手を触れ、

『癒しの光』

今まで使う事も無かった癒しの力で傷口を癒す。

熟練度が原因なのか、最も初歩的な簡単な力しか使えないが、それでも出血も止まり意識もはつきりしてくる。だが…それが逆に絶望的な状況を理解させてしまう。

(…状況は最悪…)

自称闇のデュエリスト、タイタンの肉体を操っているダーク・クリムゾンのフィールドには上級モンスターである魔界七将が二体と破壊された時に相手のモンスターを破壊する効果を持った冥闘士バラムの三体。それに対して総麻のフィールドには彼のフェイバリットカードとは言い雷皇龍ジークヴルムが一体のみ。

一気に相手から流れを奪い取る為に召喚したジークヴルムの効果が逆に利用されてしまい、結果的にデュエルの流れを相手に渡してしまう結果となってしまった。

ジークヴルムの攻撃力は相手のフィールドに存在している三体のモンスターの内の二体を上回っている物の、既に攻撃は終了してしまっている為にその二体のどちらかの戦闘破壊も不可能、しかも、その一体は破壊する事自体が自殺行為。

(…どうする…?)

このままでは確実に次の相手のターンでジークヴルムを破壊され、残る二体のダイレクトアタックで敗北する。可能性としてはバラムの自爆特攻とパンデニウムでの戦闘破壊と二パターン存在している。……………悪い事に……………。

残りの手札を確認して次の相手のターンを凌ぐ為に一手を思考し、カードを伏せる。「カードを二枚伏せてターンエンドだ」

このターン、傷は《力》で癒したものの血は流し過ぎてしまった上にライフも削られてしまった。

総麻 LP2000

フィールド

雷皇龍ジークヴルム 攻撃力2100

伏せカード×3

手札×1

ダーク・クリムゾン LP1600

フィールド

冥闘士バラム 攻撃力1600

魔界七将ベルドゴール 攻撃力2000

魔界七将パンデミウム 攻撃力2200

手札×1

圧倒的不利な状況でターンの主導権は総麻からダーク・クリムゾンへと移ってしま
う。

「私のターン、ドロウ。どうやら、私の切り札を出すまでも無かったようだな。やれ、パ
ンデミウムで攻撃、大罪の大鎌！」

ダーク・クリムゾンの号令に従ってパンデミウムがジークヴルムへとその大鎌を振り
下ろそうとする。ジークヴルムは翼を広げてパンデミウムの鎌を回避するが、パンデミ
ウムは上空に逃げたジークヴルムへと肉薄する。

(…伏せカード三枚…攻撃力の高いパンデミウムと破壊効果を持っているバラムの攻撃
を防がなきゃ負ける。なら!) 「伏せカード・オープン! 速攻魔法『禁じられた聖杯』

!」

雷皇龍ジークヴルム 攻撃力2100↓2500

パンデミウムの鎌が振り下ろされそうになった時、総麻の発動させた魔法の効果を受けて効果は失った物の攻撃力を上昇させ、雷光を纏ったジークヴルムの突進が鎌を砕き、パンデミウムを撃ち抜き爆散させ勝利の咆哮をあげる。

ダーク・クリムゾン LP1600↓1300

「パンデミウムの効果発動。戦闘で破壊された時、互いのプレイヤーは手札を全て捨てる。」

魔界七将。パンデミウム

☆7

属性：闇

攻撃力2200 / 守備力1500

悪魔族

効果

このカードは同一ターンの間に互いのライフが半分以上減った時に手札から特殊召喚できる。このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時デッキからカードを一枚ドロウ出来る。このカードが戦闘で破壊された時、互いのプレイヤーは手札を全て墓地

に送る。

ダーク・クリムゾンの指示に従い総麻とダーク・クリムゾンは残っていた手札を捨てた。

（捨てたカードはフタバニア：良いカードだ）

（くつ、手札のカードは三枚目の魔界七将と、サイクロンか）

互いの捨てたカードを見て二人は正反対の表情を浮かべる。墓地で効果を発動するカードを捨てた総麻と切り札を捨てたダーク・クリムゾン。

「だが、私の攻撃はまだ残っている。やれ、バラムよ！」

棍棒の様な武器を振りかざして襲い掛かるバラムをジークヴルムの突進が容易く粉碎する。

ダーク・クリムゾン LP1300↓400

「バラムの効果発動！ この時、相手のモンスターを破壊する。その怨念と共に【呪撃】せよ、冥闘士バラム!!!」

総麻のフィールドに戻ろうとしたジークヴルムの背後に透明な体のバラムが現れ、己を破壊したジークヴルムへの憎悪を浮かべながら拘束する。ジークヴルムはそのままバラムの亡霊と共に闇の中に消えていく。

「これで天風さんのフィールドからモンスターは居なくなつて…。」

「私のフィールドにはまだ最後の魔界七将ベリドゴールが残っている。そして、攻撃力は丁度お前の残りのライフと同じだ。トドメだ、殺（や）れ、ベリドゴールよ！」

最後の攻撃を宣言するダーク・クリムゾンに対して総麻は笑みを浮かべる。

「最後の魔界七将…お前の攻撃を阻むのは…これだ！ 罨カード発動、『リビングデッドの呼び声』！ 蘇れ、ジークヴルム！」

咆哮を挙げて総麻の墓地からジークヴルムが再び飛翔し、ベリドゴールの攻撃を阻む様に立ち塞がる。フィールドに新たにモンスターが召喚された事でバトルが一度停止する。

「これならー！」

「これでこのターンは凌ぎ切った！ ライフは完全に逆転した！ 次のターンで…オレの勝ちだ！」

最後のベリドゴールの攻撃をジークヴルムが防いだ事で一気に勝敗は総麻の方に傾いたかに見えた。いや、完全に総麻の勝利に近づいているのだろう。フレイムウイングマンと同じ効果を持ったジークヴルムの攻撃がベリドゴールに決まれば勝利できる。だが、

「ふっ、バトルフェイズを終了し、ベリドゴールの効果を発動する」

ベリドゴールの効果を発動させた瞬間、ベリドゴールの姿が掻き消えジークヴルムの首が地に落ちる。首を失ったジークヴルムの体が地面に倒れると、そこには血に塗れたナイフを舐めながら総麻を見下ろすベリドゴールの姿があった。

「なっ!？」

「ベリドゴールのモンスター効果。次の私のターンまで攻撃力をゼロにする事で相手フィールド上のカードを一枚破壊する。」

突然ジークヴルムが破壊された事に対して総麻とギンガの二人が驚愕の声をあげることが、ダーク・クリムゾンは淡々とベリドゴールの効果を説明する。

魔界七将ベリドゴール

☆6

属性：闇

攻撃力2000 / 守備力1500

悪魔族

効果

相手の効果ダメージを受けた時、このカードを特殊召喚し自分が受けた効果ダメージの値+400のダメージを相手に与える。攻撃表示のこのカードの元々の攻撃力を次

のコントローラーのターンまでゼロにする事で相手フィールド上のカードを一枚破壊して墓地に送る。このカードの効果で攻撃力がゼロになっている時、このカードとの戦闘ではコントローラーへのダメージは発生しない。このカードが相手のターンで破壊された時、墓地に闇属性の☆5以上のカードが存在する場合、墓地から特殊召喚できる。

魔界七将ベリドゴール 攻撃力2000↓0

攻撃力は失った物の総麻へと向けられるベリドゴールの目には『早く自分を破壊しろ』と言う意思が宿っている。

「ふふふ…残念ながらこの効果を発動したベリドゴールは元々の攻撃力をゼロとして扱いは、コントローラーへのダメージは発生しない」

「破壊しか出来ない…って訳か？」

「いや、破壊された瞬間ベリドゴールは墓地から特殊召喚される。戦闘力と引き換えに【不死】の力を得たベリドゴールを破壊する事は不可能だ。我はこれでターンエンド。さあ、お前のターンだ」

総麻 LP2000

フィールド

伏せカード×1

手札×0

ダーク・クリムゾン LP400

フィールド

魔界七将ベルドゴール 攻撃力2000↓0

手札×0

手札もフィールドもゼロ。そして、相手のフィールドには次のターンには攻撃力が0となつているとは言え攻撃した所でダメージを発生させられないモンスターが一体だけ。

「オレのターン、ドロロー。地龍 サーベカウラスを守備表示で召喚」

地龍 サーベカウラス 守備力1200

攻撃した所で無意味なら次のターンに備えて守備を整える為にサーベカウラスは守備表示で召喚する。

「折角あと僅かな所まで追い詰めたと言うのに守勢とはな。私のターン。ドロロー。魔法カード強欲な壺を発動。二枚ドロロー」

魔界七将ベルドゴール 攻撃力0↓2000

相手のフィールドのベルドゴールの攻撃力が元に戻る。そして、ダーク・クリムゾンの手札は二枚に増強された。

「更に手札の魔法カード『カオスドロロー』を発動する。墓地に存在する戦闘で破壊された閻属性モンスター一枚に付き一枚ドロロー出来る」

「ッ!？」

「このデュエルで戦闘で破壊されたモンスターは…」

「デーモンソルジャー、骸騎士ヴェリアム、冥闘士バラム、魔界七将パンデミウムの四枚。よって更に四枚ドロロー」

結果ダーク・クリムゾンの手札はゼロから一気に五枚まで増強されてしまった。

「…十代並みの引きだな」

「いや、安心しろ。五枚も引いたのは良いが残念ながら手札はモンスターだけだ。だが最後のドロローで決着を着けるに相応しいカードがやっと手札に来た」

ダーク・クリムゾンの言葉と共に相手のフィールドのベルドゴールが闇の中に消えていく。

「我はベリドゴールを生贄に捧げ…。我が僕（しもべ）を引き連れ、闇より現れよ、邪悪なるドラゴンの主よ！ 我は我が分身：『魔龍帝騎ダーク・クリムゾン』を召喚する!!!」

その言葉と共に闇の中より浮かび上がる闇色のルビーの宝玉。そして、ルビーの宝玉

が砕け散り、その中から二本の槍を持った闇蒼のドラゴンが現れ、咆哮をあげる。

カオスドロロー

通常魔法

効果

自分の墓地に存在する戦闘で破壊された闇属性モンスター一体に付きデッキからカードを一枚ドロローする。

魔龍帝騎ダーク・クリムゾン

☆6

属性：炎

攻撃力2300／守備力1500

ドラゴン族

効果

このカードの召喚に成功した時、自分のデッキを上から十枚引きその中に『龍帝』と名の付く儀式モンスターが存在する場合、あらゆる召喚条件を無視して特殊召喚し、それ以外のカードは全て墓地に送る。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、ダメージ計算を行わずにそのモンスターを破壊する。

二本の槍を大地に突き刺し、ダーク・クリムゾン（分身）は腕に巻きついている鎖を引き上げる。それに合わせてダーク・クリムゾンのデッキがオープンされ、そのカードが露になる。

「我が分身（ダーク・クリムゾン）の効果発動!!! デッキの上から十枚のカードをオープン！ その中に存在する《龍帝》と名の付くカードを召喚条件を全て無視して特殊召喚する!!! 十枚のカードの中に存在する『龍帝』は一枚！ よって、『魔龍帝ジークフリード』を召喚条件を無視して特殊召喚！」

その首に鎖を巻きつけられて闇の中から龍皇ジークフリードに似た黒いドラゴン、魔龍帝ジークフリードが出現すると、自分を拘束する鎖を引き千切り狂気に染まったはずの視線をはつきりとした憎悪に染めて総麻へと向かって咆哮をあげる。

間違いない、あの魔龍帝は…。

「オレの魔龍帝…」

総麻の呟きを肯定する様に魔龍帝は咆哮をあげる。

「どうやら、もう一枚の魔龍帝にお前を始末する役目は譲れん様だな。お膳立てはさせてもらおうか。我が分身でサーベカウラスに攻撃」

二本の槍を投げつけられ、守備力が下回っているだけでなく効果破壊の効果も持って

いるダーク・クリムゾン（分身）の攻撃は総麻の壁となっていたサーベカウラスを容易く粉砕する。

「今まで封印されていた憎しみ…存分に晴らすが良い。魔龍帝ジークフリードでダイレクトアタック!!!」

魔龍帝ジークフリード ☆10

属性：炎

攻撃力3500／守備力2500

ドラゴン族

効果・儀式

このモンスターを召喚する時の生贄には必ず『龍皇ジークフリード』と名の付くカードが含まなければ、このモンスターは召喚できない。

このカードが攻撃する時、デッキの上からカードを五枚墓地に送らなければならない。

このカードが攻撃する時、相手フィールド上のモンスターを二体まで破壊できる。

狂気と憎悪に染まった瞳で咆哮をあげながら魔龍帝の噴出した炎が総麻へと襲い掛

かる。

「魔龍帝の効果でデッキから五枚を墓地に送り…闇の中へと消えろ!!! アマナギソウマ

!!!」

「悪いけど…もう一度縛られてもらう。永続罨『闇の呪縛』!!!」

魔龍帝ジークフリード 攻撃力3500↓2800

総麻の罨の発動と同時に闇から現れた鎖が魔龍帝ジークフリードを縛り上げる。

「バトルフェイズを終了し、手札の『首なし騎士デュラハン』の効果が発動。相手フィールド上の永続罨を一枚破壊し、このカードをゲームから除外する」

魔龍帝を縛る闇の鎖を首の無い騎士が切り裂き、闇の中へと消えていく。それによって魔龍帝の拘束は解除され、攻撃力も元に戻る。

魔龍帝ジークフリード 攻撃力2800↓3500

「我はこれでターンエンドだ。」

「オレのターン、ドロロー！ 強欲な壺を発動して二枚ドロロー。よし、魔法カード『光の御封剣』を発動」

「よし、これで相手が魔法・罨カードを破壊するカードが無きや、三ターンだけど持ちこたえられる」

「オレはカードを一枚伏せてターンエンドだ」

そして、ターンはダーク・クリムゾンへと移る。

「私のターン、ドロロー。何もせずターンエンドだ」

光の御封剣（一ターン経過）

一ターンが経過した事で僅かに光の剣が消え、拘束の緩んだ魔龍帝が今にも総麻へと襲い掛からんばかりの勢いで光の御封剣を揺らす。

「オレのターン。ドロロー。二枚目のアンキラーザウルスを召喚。守備表示だ。ターンエンド」

「私のターン。何もせずターンエンドだ。手札が六枚を超えたので一枚捨てる」

そう言ってダーク・クリムゾンが捨てたのは『大嵐』のカード。

「な、何で使わなかったの？」

「ッ!? お前、このターン…」

「それでは魔龍帝がつまらないと言っているのな…。残されたターン、己の無力さを悔やませたいのだろう」

そう言ってダーク・クリムゾンはターンエンドを宣言する。余裕なのか、それとも総麻を憎む魔龍帝の意思を尊重したのか、両方なのかは定かではないが、このターン、トドメを刺せる状況に有りながら態と総麻を生かした。

光の御封剣（二ターン経過）

「オレのターン、ドロー」

そう言つてカードをドローする。既に魔龍帝ジークフリードを戦闘で倒す手段は総麻には存在していない。総麻のデッキの最高の攻撃力を誇る龍皇ジークフリードを強化（狂化）したカード。効果を使えば話は別だが今の状況で堕ちた龍皇を倒す手段は無い。

ドローしたカードに視線を向けると、それはモンスターカードではなく今の状況では役に立たないカード。表情に出す事無くそのカードを伏せる。

（…龍皇ジークフリードが来てくれれば勝てた…。けど）

龍皇ジークフリードが存在すれば確かに攻撃力の低いダーク・クリムゾンの分身を倒す事でこのデュエルには勝利できるだろう。だが、

（…オレは…魔龍帝から逃げて良いのか？）

危険だからと言う理由で使う事を拒否しただけでなく、封印を重ねて闇の中に仕舞いこんだ。魔龍帝の精霊にとつてそれはどれだけ苦痛だったのか…それは想像も出来ない。それは総麻自身の罪だ。

「我のターン、ドロー。何もせずにターンエンドだ。そして、余剰の手札を一枚捨てる」
 そう言つてダーク・クリムゾンが捨てたのは魔法カード『ハリケーン』。

「更にエンドフェイズに手札の『呪王ドラゴナーガ』のモンスター効果を発動。エンド

フェイズに手札から捨てる事によって、自分フィールド上のドラゴン族一枚に付き80ポイントのダメージを相手に与える」

「っ!? うわああああああああ!!!」

ダーク・クリムゾンが手札のカードを墓地に送った瞬間、紫の炎が総麻の全身を包む。全身を焼かれる感覚、呼吸する事で肺さえも焼かれそうな痛み、全身を焼く紫の炎の苦痛に膝を着くが辛うじて倒れるのだけは免れる。

「はあ…はあ…」

総麻 LP2000↓400

紫の炎が消えて呼吸を整える。苦痛と痛みはあつても肉体のダメージはベリドゴールの効果の時の様に存在しては居ない。そして、このターンで最後の三ターン目が経過し、光の護封剣の効果が完全に消える。

ダーク・クリムゾンのモンスター効果のダメージが終わると、魔龍帝ジークフリードは自身の動きを縛っていた光の剣が消えるよりも先にそれを砕く。

己の憎しみをぶつけるべき相手に対して何も出来なかつた事へと苛立ちと、復讐を果たせると言う歓喜の表情を浮かべ、魔龍帝は咆哮する。

「さあ、お前のラストターンだ。このターンで勝利できるカードをドロー出来なければ…我のターンでお前の負けだ」

ダーク・クリムゾンの言うとおりで。もう一体モンスターを召喚：墓地のフタバニアを効果で召喚して壁を揃えた所で、守勢に廻っても魔龍帝の効果でフィールドを一掃され、ダーク・クリムゾンでトドメを刺されるだけ。このターンで魔龍帝を破壊できなければ：確実に総麻の負けだ。

（オレのデッキでこの状況でアイツのライフを削りきれるカードが有るとすれば：二枚の最上級モンスターだけ：）

ジークフリードでダーク・クリムゾンの分身を倒せばそれでデュエルは終わりだ。効果破壊した上で効果ダメージを与えればそれでもデュエルは終わる。どちらにしても総麻の勝利で。

だが：それで本当に魔龍帝に向き合った事になるのだろうか：？ そんな疑問を思わずには居られない。

そんな逃げている考えでは次のドロークカードは総麻に勝利を与えてはくれないだろう：。仲間を助ける為、それを言い訳にして：総麻は目の前に居る自身の罪から逃げています。

自身を睨みつけてくる魔龍帝の視線を正面から見返す。

「…悪かった：：魔龍帝ジークフリード」

危険な力を宿していると言うだけで精霊が宿っていると知っていたカードを今まで

闇の中に幽閉してしまっていた。…もう一枚のカード『幻羅星龍ガイ・アスラ』にも言える事だが…。

「オレを憎んでいるならその憎悪は…オレは受ける責任がある。けどな…今は…十代達の命が懸かってる！ お前の憎悪…正面から打ち砕かせて貰う!!! オレの…ターン！」

そんな決意と共にデッキのカードをドローした瞬間、本来の力を取り戻すようにドローしたカードのステータスが書き換わる。

龍星皇メテオヴルム

☆8

属性：炎

攻撃力2500 / 守備力2100

ドラゴン族

効果

炎属性のドラゴン族を生贄にして召喚する時、このカードは生贄一体だけで召喚する事が出来る。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、攻撃力が守備力を上回っていれば、

相手プレイヤーにその数値分のダメージを与える。

このカードが相手モンスターを破壊した時、その攻撃力または守備力を選択し、その数値分のダメージを与える。

それがドロウした瞬間のステータスだが、それは本来の力を総麻へと貸すと決めた瞬間、オレンジの体色のドラゴンの精霊が総麻の後ろに現れ、そのカードのステータスは書き換わる。

龍星皇メテオヴルム

☆8

属性：炎

攻撃力2800 / 守備力2400

ドラゴン族

効果

ドラゴン族を生贄にして召喚する時、このカードは生贄一体だけで召喚する事が出来る。

このカードは炎属性のドラゴン族を生贄にして召喚した時、召喚したターンの間だけ

攻撃力を1000ポイントアップする。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、攻撃力が守備力を上回っていれば、相手プレイヤーにその数値分のダメージを与える。

このカードが相手モンスターを破壊した時、その攻撃力または守備力を選択し、その数値分のダメージを与える。

「墓地の機龍フタバニアの効果を発動！ 機龍フタバニアを墓地から特殊召喚！」

総麻の墓地から特殊召喚されるフタバニア。そして、総麻は先ほどドロウしたカードを

「機龍フタバニアを生贄に……。今、天を切り裂け流星の皇！ 『龍星皇メテオヴルム』を召喚!!！」

召喚する。

フタバニアがルビーの結晶に変わり砕け散ると、天井から出現した無数の隕石が総麻とダーク・クリムゾンの間に無数に降り注ぐ。

そして大型の隕石が総麻のフィールドに落下した瞬間、隕石の落下によって巻き起こった土煙を切り裂き、オレンジの体色を持った新たなドラゴン、新たな切り札、『龍星皇メテオヴルム』が咆哮をあげる。

「龍星皇メテオヴルムのモンスター効果、炎属性ドラゴン族を生贄にして召喚した時、召喚したターンの間だけ攻撃力を1000ポイントアップする!」

龍星皇メテオヴルム 攻撃力2800↓3800

「ほう」

メテオヴルムの召喚によって敗北が決定したと言うのに当のダーク・クリムゾンは余裕その物と言った表情を浮かべている。

(…リバースカードは無い。手札にダメージを無効にするカードでも有るのか? けど…このターン、魔龍帝だけでも破壊させてもらう!) 「行け、メテオヴルム!」

総麻の声に従う様にメテオヴルムは天井スレスレまで飛翔し、全身を炎に包まれ全身が突進に特化した形に変わる。その姿はメテオの名に恥じない正に流星と言った姿。

「打ち抜け、メテオヴルム…魔龍帝ジークフリードに、【激突】だ!!!」

咆哮をあげて魔龍帝へと向かっていくメテオヴルム、メテオヴルムを迎え撃たんと炎を吹き出す魔龍帝だが、メテオヴルムは炎を切り裂き、その一撃は魔龍帝ジークフリードを捉え、

(…貴様の力は見せて貰った。やはり、我が主が望むだけの決闘者(デュエリスト)だ。

「良いだろう、今日の所は貴様に勝ちを譲ってやろう」

そう心の中で呟き、メテオヴルムの体当たりを正面から受け止めている魔龍帝を一瞥する。一瞬の拮抗だったが、やはり自身の効果で魔龍帝の攻撃力を上回っているメテオヴルムの力は受け止めきれず、力尽きた魔龍帝はそのまま憎悪の籠った叫び声を上げ打ち抜かれる。

ダーク・クリムゾン LP400→100

「更にモンスター効果発動！ 破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える」

魔龍帝ジークフリードが爆散する爆煙の中からゆっくりとダーク・クリムゾンへと近づくメテオヴルム。そして、メテオヴルムはダーク・クリムゾンへと炎を打ち出す。

「ぐ…グオオオオオオオ!!」

咆哮をあげてダーク・クリムゾンがメテオヴルムの炎に包まれるとそのまま操られていたタイトンの体は地面に倒れる。

ダーク・クリムゾン LP100→3400

「や、やった…」

「見事だ、アマナギソウマ」

勝利したと思っていた総麻は突然響いてきた声に驚いて其方へと視線を向けると、

デュエルが終了したと言うのに未だに存在しているダーク・クリムゾンの分身がそう言葉をかけてきた。

「ッ!? まさか…」

「その通り…あの男の体を捨ててこうして分身の肉体に宿らせて貫つたのだ」

「どう言う事なんですか…?」

「さあな（流石はXレアって言った所かよ…）」

何でもない様に言い切るダーク・クリムゾンに対して思わずそんな感想を持つてしまふ総麻達。

「約束だ。望み通り貴様の仲間を返してやろう。む?」

闇のデュエルの敗者を闇の生贄にしようとしているのか、ダブルコストンのような黒い物体がタイタンとダーク・クリムゾンへと纏わりついてくる。

「ええい、鬱陶しい!!!」

そう叫び咆哮をあげるとダーク・クリムゾンに纏わり着いていた黒い物体達はそのまま吹き飛ばされる。

ダーク・クリムゾンは無理だと理解したのか、黒い物体達はタイタンを包み込み、そのまま闇の中へと消えていった。そして、タイタンと入れ替わる様に気を失った十代達が見れる。

「では、さらばだ。我と再び戦う時は我が僕（しもべ）の復讐が果たされる時だと言う事を…忘れるな」

ダーク・クリムゾンが手をかざすとタイタンの飲み込まれた闇の中からデツキを構成していたカードが飛び出し、その中の一枚から魔龍帝ジークフリードが姿を現す。

デツキから姿を現した憎悪を込めて魔龍帝ジークフリードは総麻を睨みつける。そして、そのまま二体のドラゴン達は飛び去っていく。

「悪い…アカデミア側に連絡して、迎えを…。」

今までは気力で立っていたのだが、それも限界になった総麻はそのまま意識を手放して倒れる。

「あ、あの…」

だが、総麻は知らない…闇の中で手にした一枚のカードは、彼にとっての一つの大きな運命を運んでくるカードだと言う事を…。

閑話01 『精霊界への導き、光導の神』

「くっ…。オレは…って、何処だよ、ここは？」

意識を取り戻した総麻の視界の中に飛び込んできたのは緑色の草原と森に青い空…明らかにデュエルアカデミアがある島ではない風景。

「…確か、オレは…ダーク・クリムゾンの精霊に操られたタイタンに勝って…それから…」

闇のデュエルのダメージ主にモンスター効果のダメージで切り裂かれたり、全身を焼かれたり―が原因で気を失った後の記憶が無い為になんとも言えないが、一種のリアルな夢と判断してしまうには、これはあまりにもリアル過ぎる。

「デュエルディスクが…無い」

ふと妙に腕が軽い事に気付くと腕に着けていた筈のデュエルディスクが無かった。

次にデッキを確認してみると、こっちはちゃんと六つ揃っている。何時の間にデュエルディスクを外したのかと疑問に思うが、今はそれを気にしている時ではない。

「取り合えず歩いてみるか」

軽く屈伸して何処へとも無く足を進める。此処が何処かは分からないが、一箇所

じつとしてゐるよりも誰か人を探した方が現状を理解するには最適だろうと判断する。僅かに歩を進めて改めて周囲を確認すると、他に誰も居ない事を確信する。

(良し)

自分以外に誰も居ない為、遠慮する事無く《力》を使い、気で脚力を強化して走り出す。デュエルアカデミアでは殆ど役に立たない力だが、こう言う時は何よりも役に立つ。

それから総麻が道なりに走り続けていても誰も人を発見する事は無く、ただ景色だけが変わっていくのが見えるだけだ。

数分、数時間、どれだけの時間は知り続けているのか分からなくなる。それほど走っていると言うのに太陽は一向に傾く事無く、それが総麻の時間に対する感覚を麻痺させてしまう。

「分かれ道か…」

暫く歩いていると言葉通り分かれ道に差し掛かる。無言のままポケットの中を漁ると、デュエル中のコイントス用のメダルが出てきた。

デュエルディスクではコイントスを必要とするカード効果が発動した時には、ソリットビジョンでコインも出てくるが、一応イカサマ防止の為にこうして持っている。

「表は右で、裏は左に…」賭ける」

そう言つてコインを投げて出た結果に従つて分かれ道を進み始める。その後も分かれ道に遭遇する度に同じ事を繰り返していた。一見してみると乱暴な方法かもしれないが、総麻は最も安全で確実な方法としてこの手段をとっているのだ。

世紀末の魔人達の一人である《賭博の王》の《力》は、唯一遊戯王の世界では絶対的な力になる《力》と言えるだろう。

それは、上手く扱えば時に十代の引きを上回る《強運》を与えてくれる《力》。分かり易く例えるならば、追い詰められた十代が逆転の切り札を引き当てられなかったり、相手のターンならばデュエルディスクの故障でデュエルが中止になるほど絶大な、運命を変えるほどの力だ。だが、この力はデュエル中には色々と制限がある。

その制限の一つとして《賭博》。それが一種の賭け事として成立する事が最低限の条件になる。

何気にギャンブルカードだとかかなり都合の良い事になりそうな気がするが、デュエル中のカード効果にはこの《力》は影響してくれないので助かっている。(流石に絶対に負けないギャンブルカードと言うのは反則過ぎると思つているので)

：付け加えると、外野(ギャラリー)の立場としてデュエルの勝敗を賭けの対称にすれば、幾らで影響を与える事はできたりする。

現在はデュエル中でない為に必要な制限無しで《賭博の王》の力を使い、別れ道で常

に正解の道を選び続けていると言う事になる。

『
ん?』

何度目かの時に何かの声の様な物が聞こえた。

丁度コイントスの結果も声の聞こえて来た方向を指している。それを疑問に思いながらも自分の運が導き出した結果を信じて別れ道を進む。

その後も総麻の進む道筋の先から声の様な物が聞こえてくる。特に別れ道に差し掛かると聞こえてくる率が上がってくる。

コインの示す道を、時に声の聞こえた先、時に声とは反対の方向へと進んでいくと、
「…神殿…?」

何年、何十年、いや、下手をしたら何百年と建ち続けたのか分からないほどボロボロになった神殿が視界の中に飛び込んできた。

(…なんで此処に…?)

絶対的な幸運を持った《賭博の王》の力を使って進んだのだから、その神殿に何一つ危険はなく、寧ろ自分がそこに必然的に導かれた。そう考えるべき場所だろうと判断する。

そう思いながら総麻は神殿の中に入っていくと、入って直ぐに足元に妙な壁画を見つ

ける。太陽と月が描かれた床板：ゆっくりと天井へと視線を向けると、外の光を取り入れている天井に開いた穴から零れる光に照らされて見える見覚えの有る何かのマーク。

「…蠍座？」

丁度零れる光の点を線で繋ぎ蠍の絵の上に重なっている天井の壁画を眺め、そんな疑問の声を零しながら前へと視線を向けてゆっくりとモンスターの石像の様な物が祭られた祭壇の様な物に触れる。

「ッ!? 畏か!？」

総麻が何気なくその石像に触れた瞬間石像が砕け散り、それをトリガーとして神殿が揺れて崩れ始めていく。

慌てて神殿から外へと飛び出すと、崩れ落ちた神殿の跡から一つの巨大な影が飛び出してくる。

「なっ!？」

神殿の残骸を踏みしめながら現れる巨大な影：蠍を思わせる下半身と巨大な針、両腕にも巨大な針を持った青い巨体を持ったモンスター：それは。

「『天蠍神騎スコル・スピア』？」

総麻の記憶の中にある、黄道十二星座の一つ『蠍座』を司る神の力を秘めた青き異形のスピリット：『天蠍神騎スコル・スピア』。そんなスコル・スピアに対してデュエル

ディスクを構えようとするが、

「チッ！（…まさか、オレを此処に呼んだのはこいつ？ それに、スコル・スピアが実体化しているって事は…此処は、《精霊界》か!?）」

何故か自分を此処へと導いたのが他でもない、目の前に存在する天蠍神騎スコル・スピアだと理解しながら、腕にデュエルディスクが無い自体に思わず舌打ちしてしまう。

相手が何時攻撃を仕掛けてきても良いように全身を気で強化しながら構えを取り総麻はスコル・スピアと対峙する。

だが、当のスコル・スピアはそんな総麻の心情を知ってか知らずか、総麻に対して攻撃してくる様子も無く、その巨体は光に包まれて一枚の『白いカード』へと変わり、総麻の元へと舞い降りる。

「白いカードって事は…シンクロモンスターか？ …まさか、お前自身のカードをオレに渡したくて此処に呼んだのか…?」

自分の下へ来たカードを受け止めながら思わずそう呟いてしまう。だが、カードとなったスコル・スピアからは何も返事は返ってこない。

「…『天蠍神騎スコル・スピア』…シンクロモンスターだから、チューナーが無いから使えないよな…属性は…っ!？」

絵柄も無く効果も召喚条件も読めないそのカードを手にしながら、辛うじて読める部

分を読み上げていく上で、そのカードの特異性を知る事になる。

『神』属性：☆10：あの三幻神と同格かよ…。」

それでも、ある意味では三幻神…とまでは行かないとしても、少なくともこれから先に出現する事になる三幻魔には匹敵する力を持つであろう12宮Xレアの持つ力を考えれば当然と言える事だろう。

…失礼ながら、三幻神と比べたら数的には個々の力は、大体四分の一位とは推測しているが。流石に個々の力が三幻神一体と同等の力を持つていとすれば、数の上では四倍も存在していると言うのは洒落にならないだろう。

第一、黄道12星座は太陽の通り道に存在する。星座を司る神と、太陽を司る神であるラーの翼神竜と同等とは考え辛い。

どっちにしても、ただでさえこの時代ではイレギュラーな代物であるシンクロモンスター。その上、神属性と言うどう考えてもイレギュラー過ぎる代物をそうポンポンと使える訳も無く、チューナーが無い為に召喚条件も満たせない代物だ。チューナーを単独で使った方がまだ安全と言える。

それに、下手にシンクロ召喚を多用して、5D、sで語られたシンクロモンスターが原因の滅びの未来を迂闊に使って早めたくは無い。

GXと5D、sの年代を推測すると最低でもアカデミア卒業後十年以内に少なくとも

もゼロリバースが起こる可能性が高いのだし。

「まさか、こいつが全シンクロモンスターの元になった…って言う事は無いよな…?」

そんな疑問も浮かぶが、真実だったらそれはそれで怖すぎるし、スコル・スピア自体がイレギュラーな代物である為に、それは有り得ないと強く言い切れる。

「まあ、人目のある時に使わなきゃ良いだけの事だろう。当の本人(?)も使う時じゃ無いつて言ってる様子だしな…」

召喚条件を含むテキストが何も書かれていないスコル・スピアのカードを眺めながらそんな事を考えて、手に入れたスコル・スピアのカードをデッキケースの中の一つに仕舞いこむ。

天蠟神騎スコル・スピアは力こそ強大だろうが封印してしまった二枚ほど邪悪な意思は無い。手元に有った方が安全だろうと判断した結果だ。

(…デッキに入れてた所で使えなきゃ意味ないしな)

融合モンスターを使わず、チューナーモンスターを持つていない総麻にとっては融合デッキに入れていたとしても、それは単なる自分の目の届く保管場所以外の価値は無い。だからこそ、そこは一番安心できる場所だ。

そんな事を考えながら、今は役目を終えて崩れ去ったスコル・スピアが眠っていた神殿に対して、一度黙祷を捧げた後背中を向けて歩き始めた。

く。丁度その時だった。総麻の視界に霧が掛かった様になり、同時に意識が遠くなっている。

TURN—08 『恐怖と導き』

意識を取り戻した総麻の視界の中に飛び込んで来たのは清潔な天井。どうやらベッドに寝かされているらしい。

ベッドの傍らに他のデッキと一緒に置かれているデュエルディスクにはデッキがセツトされている。間違いなくそれはそのデッキはダーク・クリムゾンと戦った時に使った赤のデッキだろう。

「っ!？」

体を起こそうとした時、手の中に何かの感触が有るのを感じ取る。ゆっくりとそれを視線の高さまで持つてくると、それが視界の中に映る。

「…夢じゃないってのは分かっていたけどな…」

名前とレベル、属性だけが書かれたバトスピのカードではなくデュエルモンスターズのカードとなった12宮Xレアの一枚、蠍座の『天蠍神騎スコル・スピア』のカードともう一枚…。

「…何時の間に…。…いや、そんな事より…なんでこんな物が『今』存在しているんだよ…?」

もう一枚のカードへと視線を向けながら総麻はそのカードの名を呟く。

「…『ダークチューナー』…『蝕星龍 ジークヴルム・ヴェガ』…」

そう、それはこの時代には間違いなく存在していないはずのカード…。…地縛神によつて操られたダークシグナー達の使つていた闇のチューナーモンスター、『ダークチューナー』のカード。

攻撃力は0でダークシンクロを使った時に発動する能力はどれも強力な物が多いのが特長だが、このカードの攻撃力は高く単独での効果も強力で召喚もし易い、バトスピのカードの中にも存在していたジークヴルムのバリエーションの一つ。

ダークシンクロとは関係なく総麻のデッキに単独で投入したとしても、無理なく動いてくれるカードだろう。だが、

「…なんて言うか…危険な予感のするカードだ…」

入手経路の不明なカードと言うだけでなく、『ダークチューナー』等と言う曰く付きの不吉なカードをそうそう多用する気にはならない。しかも、そのダークチューナーが総麻の愛用するジークヴルムの名を持つモンスターと言うのは…。

「まるで、誰かに『使え』って言われている気がするな…」

ダーク・クリムゾンに奪われた自分を憎む精霊『魔龍帝ジークフリード』の事も有るから下手に封印する事は出来ず、今の心境ではなるべくならそんな事はしたく無い。間

違ってもデツキに紛れ込まない様に、デツキのカードとは別に手元に置いておいた方が
良いだろう。

そう思いながら総麻はジークヴルム・ヴェガのカードをスコル・スピアのカードと一
緒にメインデツキとは別にデツキケースに仕舞うと、ダーク・クリムゾンとの闇のデュ
エルでダメージを負った場所に触れる。触れた瞬間痛みが走り、服を捲ると巻かれた包
帯に血が滲んでいた。

元々癒しの《力》はこれまで使う必要が無かった為に熟練度が低く、闇のデュエルの
実体化した2000ポイント分のダメージを完全に回復させる事は出来ず、応急処置程
度にしかならなかった。

もう一度、『癒しの光』を使つて回復を促進させようかとも思ったが、それはやめてお
こうと考える。流石に怪我が跡形も無く直ぐに治ったらそれはそれで不自然だろうか
ら。

痛みが引いていくと眠気が襲ってきてそれに逆らう事無くベッドに横になると再び
意識を手放す。

闇のデュエルのダメージは思った以上に総麻の体にダメージを与えていた。お見舞
いに来たなのは達が入ってくるまで眠り続けていた。

「退学？　十代達が？」

お見舞いに来た彼女達が教えてくれた事だが、十代と翔が廃寮に入った事が原因で退学を賭けたデュエルをする事になったそうだ。

本来ならば一緒に入ったはずの隼人は留年を繰り返している為に退学も大した罰にならないだろうと、よく言えば見逃され、悪く言えばアカデミア側に匙を投げられた。

逆に成績優秀な明日香やなのは達の場合は、退学こそ受けなかったものの、嚴重注意と罰則としてレポートが言い渡された。

続いて総麻と一緒に後から廃寮に入る事になったギンガは、自分の意思ではなく学園に入り込んだ不審者（当然タイタンの事）に廃寮に連れ込まれたと言う事で、罰は与えられずにいた。付け加えるなら、彼女の証言と大怪我を負った事で総麻も罰は受けないらしいのだが…。

「…で、オレは退学こそ見逃されたものの、十代達の事の報告を怠った事のペナルティとして、レポート十枚を賭けた制裁デュエルを十代達と同じ日にタッグデュエルじゃなくてシングルデュエルで受ける事になったと…」

「うん」

同じ制裁デュエルでも、総麻の場合は命に関わる大怪我を負った上に不審者に連れ込まれたと言う、言ってみれば論理委員会の不手際に関わる問題だった為に退学は無し、と言う事らしい。

クロノス先生辺りは『総麻も十代達と一緒に退学だ』と言っていたが、逆に総麻の方は論理委員会が率先して反対してくれた。

総麻が大怪我をしてまで女子生徒を護った事と、無理矢理連れ込まれた被害者で有る事が理由らしいが、穿った見方をすれば向こうにとつては下手に退学にして総麻の口から、アカデミアの敷地に入り込んだ不審者を何日も放置したと言う自分達の大き過ぎるミスが明らかになるのは拙いという事なのだろう。デュエルアカデミアの信用問題にも関わるだろうし。

ただし、十代達が廃寮に行くと言っていた事を知っていて黙っていた事に関しては問題だった為に、ペナルティとして制裁デュエルが課される事となった。

総麻の場合は退学ではなくレポートを賭けてだが。要するに負けても単にレポートに苦勞する程度だ。

「まあ、強い相手と楽しくデュエルできるなら、歓迎だけだな」

命も将来も関係ない気楽なデュエルになるなら、それは歓迎できる物だ。掛かってい

る物が単なるレポートならば、純粋にデュエル（ゲーム）を楽しむまでだ。

本来なら勝つはずのタイタンを相手に、ダーク・クリムゾンと言うイレギュラーの存在が有ったとは言え負けたと言う事で確実とは言えないが、十代達は先ず負ける事は無いだろうと考えているので十代達には自分達で頑張つて貰おうと思つている。

厳しい言い方だが、校則を破つて危険な場所に勝手に立ち入つた以上、今後真似をする生徒が出ない為にも厳しい裁きを与えられるのは、ある意味においては当然の事だ。寧ろ、十代の実力を考えれば制裁デュエルと言うのはかなりの温情だろう。

「十代君達の事は心配やないんか？」

「……いや、不審者の事を抜きにしても……不法侵入は犯罪だろ？ 寧ろ、問答無用に退学にならなかつただけでもアカデミア側の温情だ」

明らかに友達である十代達の退学に対して心配して無い冷たい言い方の総麻に対してはやてが不満そうな声を上げるが、十代達は自分達の意思で率先して廃寮の中に肝試しとして入つて行つた”。どう考えても、タイタンの事が無かつたとしても十代達はこの事がばれたら罰せられただろう。

「友達だからこそ、悪い事をしたら反省させなきゃならない。……流石に退学は遣り過ぎだとは思ふから、勝つ事は祈っているけど、少しは苦戦して反省した方が良い……」

心配して勝利は祈っているが、直接的な手助けはしないと云うのが総麻から十代達へ

の対処だと言う事だ。ただ甘やかすだけが友情や愛情ではない。まあ、怪我で動けそうも無いが。原作知識（未来予知）で一応タイタンが（多分）クロノス先生の差し金だとは思うが、勝手に廃寮の中に入り込んだのは十代達の方が悪い。

「えっと、それじゃあ退学とかじゃなかったら…」

「負ける事は期待しないけど、自業自得として切り捨てる」

厳しすぎる総麻の一言に思わず黙り込んでしまう彼女達…。其処まで話した後、ふと聞き忘れていた事を問いかける。

「ところで、オレと十代達の制裁デュエルって何時なんだ？ …それ以前にオレってどれくらい寝てた？」

「明日だよ」

「へ？」

「もう一週間近くも眠り続けてて、全然目を覚まさなかったから、みんな心配してたんだよー！」

（…:どんだけ深手負ったんだよ、オレ？）

思わず頭を抱えてしまう。恐らく…:総麻が並みの人間だったら、間違はなく死んでいたのではないかとも思ってしまう。実際、忘れがち…:と言うよりも大して利用価値も無いのだが、総麻は何気に《黄龍の器》の力を基礎的な能力として持っている。

並の人間に比べれば遥かに致命傷を負っても生き延びる可能性が高い。現に総麻の力の《黄龍の器》の力を持った剣風帳の主人公は、胸を日本刀で串刺しにされても、生き延びたのだし。多少の危険なダメージでも生き延びられる程の天運に恵まれてるのではないだろうか。

(…どつちにしても、制裁デュエル用に六つとも調整しておくかな…。それにしても)

総麻の気に掛かるのはタイタンを操っていた『魔龍帝騎ダーク・クリムゾン』の精霊の存在だ。元バトスピのカードにも精霊が宿るのは、自分も知っている。だから、精霊が宿っているのは良い。だが、タイタンは何処でどうやってダーク・クリムゾンのカードを入手したのか、それが気になっていた。

その日の夜、総麻はこつそりと保健室を抜け出す。レッド寮の部屋に戻っても良いのだが、何日も意識を失っていた事で保険教諭の鮎川先生に止められた。少なくともあと一日は保健室で休んでいる様に言われたのだが。

総麻は周囲を警戒しながら移動して火山の前に着くと、デッキケースの中からスコル・スピアのカードを取り出す。

(…此処に行け、そう言う事か?)

心の中で問いかけてもスコル・スピアのカードからは何も返事は返ってこない。

(…思えば、オレが一緒に行っていれば…十代は負けなかったのかもしれない…。いや、ダーク・クリムゾンや魔龍帝の狙いがオレだったら…最初からオレが戦っていれば、それで済んだかもしれない)

お見舞いに来たなのは達には見せないようにしていたが、《自分が逃げたから危険に晒した》、そんな考えが浮かんでくる。

…あの場で闇のデュエルが起こる事を知っていたからこそ、自分の安全を考えて逃げた事で、自分が知っている筈の未来とは別の方向に進んでしまった。

結果的に自分をおびき寄せるためにダーク・クリムゾンに人質にされたからこそ十代達は助かったが、ダーク・クリムゾンが助けていなかったら…闇の罰ゲームを受けていたのは…。

「オレのせいなのか…?」

誰にとっても無く問いかける。だが、そんな事は分かりきっている。自分が逃げ出したから、自分が居るから…。

「クソ！」

思わず拳を地面に叩きつける。全ては総麻自身の弱さが招いた結果だ。総麻の中にある恐怖心は未だに巣くっている。

(…この先、どんなイレギュラーが起こるか分からないって言うのに…)

少なくともこれから先、直接的に生命の危機に陥る戦いも多いだろう。だが、今回の事を考えると…また逃げ出そうものなら、今度はどんな取り返しが付かない事態に陥るか分かったものではない。心から恐れている死を回避する為にはその恐怖心に立ち向かわなければならぬのなら…。

「どうしろってんだよ」

そんな事を考えていると、総麻を照らしていた月の光が何かによって掻き消える。

「っ!?!」

全身を奔った危険信号に従うように大きく前へと跳ぶと先ほどまで総麻の立っていた場所を五つの首を持った巨大な何かが砕く。

「なっ!?! 『F (ファイブ)・G (ゴッド)・D (ドラゴン)』だっ!?!」

それは現実へと実体化しているデュエルモンスター史上最大の攻撃力を誇るモンスター、F (ファイブ)・G (ゴッド)・D (ドラゴン)の威容。それが総麻を見下ろす様に存在していた。

「くっ!? 実態化した、モンスターだと?」

慌てて其処から逃げ出そうとするが、赤と白の光の壁の様な物に阻まれる。

「これって…まさか、闇のデュエルか!」

すると、F（ファイブ）・G（ゴッド）・D（ドラゴン）の巨体が消え、白い光と炎が混ざり合いながら人型と化した様な何かが現れる。

「…デュエル…」

「っ!」

人型の声が響くと同時に総麻の腕に装着されていたデュエルディスクが総麻の意思とは関係なく勝手に起動して、LPが表示される。

総麻 LP4000

人型 LP4000

「チッ! 問答無用か…。良いぜ…相手になってやる」

総麻がカードを五枚抜き放つと、人型の前に五枚の石版が出現する。それが人型の手札なのだろう。

総麻は相手を見据えながら睨みつけているが、無意識の内に手が震えている。ダー

ク・クリムゾンとの闇のデュエルの時に感じた死の恐怖が心の中に再び湧き上がって来たのが原因だろう。

「…『仮面竜』を守備表時で召喚、カードを一枚伏せて、ターンエンド」

仮面竜／守備力1100

人型の前に存在している石版の一枚が表になり其処から仮面をつけた赤いドラゴンが出現し、防御体制をとる。仮面竜、優秀な効果を持ったドラゴン族のリクルーターだ。(…仮面竜やF(ファイブ)・G(ゴッド)・D(ドラゴン)と言う事は…ドラゴン族デッキか)

相手の先ほどの戦術でデッキの傾向を推測すると自分の手札へと視線を落とす。

(…ダーク・クリムゾンと戦った時のままの赤デッキか…。最悪だ、このデッキだとF(ファイブ)・G(ゴッド)・D(ドラゴン)は戦闘(バトル)じゃ破壊できない)

そう、赤デッキは炎属性と僅かな風属性が主力のデッキ。その中にはF(ファイブ)・G(ゴッド)・D(ドラゴン)を倒せる《光》属性のカードなど一枚も入っていない。

一ターンの間だけF(ファイブ)・G(ゴッド)・D(ドラゴン)の攻撃力5000を突破する事は可能でも、炎属性しか居ないデッキではF(ファイブ)・G(ゴッド)・D

(ドラゴン)を戦闘で破壊する事はできない。攻撃力の元に戻った後にF(ファイブ)・G(ゴッド)・D(ドラゴン)に破壊されるのがオチだろう。

(だったら、出される前に…決着をつける)「オレは地龍サーベカウラスを攻撃表示で召喚!」

地龍 サーベカウラス／攻撃力1400

総麻のフィールドに出現するのは緑の体色に体に刃が映えたモンスター。

「サーベカウラスで仮面竜を攻撃、サーベカウラスは攻撃する時、攻撃力が400ポイントアップする」

すれ違い様にサーベカウラスが仮面竜を切り裂くと表になっていた石版が砕け、新たな石版が地面の中から出現する。そして、それと同時に新たなドラゴンがその姿を現す。

「仮面竜の効果で『アームド・ドラゴンLv(レベル)3』を召喚。更に罠カード『リビングデッドの呼び声』を発動、仮面竜を蘇生」

「っ!」(二体の…しかもアームド・ドラゴンは次のターンには次のレベルに…。くっ、これじゃ攻撃しない方が良かった)

人型のフィールドに再び現れた仮面竜と新たに現れたアームド・ドラゴンの姿に思わず舌打ちしてしまう。相手のフィールドを削るところか、先ほどの攻撃は完全に裏目に出してしまった。

「オレはカードを伏せて…：ターンエンドだ」

次のターンに出現するであろう大型モンスター存在を警戒しながら、総麻は二枚のカードを伏せてターンエンドを宣言する。だが、事態は更に厄介な方向に進む。

「ドロー。アームド・ドラゴンの効果でLv5にレベルアップ。更に仮面竜を生贄に捧げ、『ホルスの黒炎竜Lv6』を攻撃表示で召喚」

「はっ？ 嘘だろ…？ レベルモンスター…しかも、一体はホルスかよ!？」

心の其処から『最悪だ』と言う叫び声を上げてしまう。

総麻を見下ろすように佇むのは第二の進化を遂げた二体のドラゴンのレベルモンスター達、それに対して総麻のフィールドに有るのは伏せカード一枚と攻撃表示で出ている攻撃力1400のモンスター・サーベカウラスが一体だけ。

(くっ、伏せカードで何とかなるか?)

伏せたカードに視線を向けてそう考える。例えば効果を発動させたとしても、二枚の伏せカードの効果なら、このターンは持ちこたえられるが…其処までだ。それは逆転の一手等にはならない。

(…どうする…?)

まるでダーク・クリムゾンの時を思い起こさせる様な状況の中、総麻は相手を見据えながら手札へと視線を向ける。

TURN—09 『恐怖を打ちぬけ、龍星皇メテオヴルム』

(…レベルモンスターのドラゴン二体が一気に…)

自分を見下ろす様に存在する二体のドラゴン、アームドドラゴンLv5とホルスの黒炎竜Lv6の二体…状況的に最悪としか言えないだろう。

(…しかも、手札にはジークフリードやジークヴルム所か上級モンスターが一枚も無い) そう、現在の総麻の手札のモンスターは全て☆4以下のモンスターのみ。場を保つ事は可能だが、少なくともどれもこの状況下で決定打となるカードなどではない。

(…単体ではダメ…フィールドの伏せカードと手札のカードの組み合わせは…：…ダメだ、精々次のターンを凌ぐだけ、逆転に繋ぐ事はできない。次のドロウに賭けるとして…このターンの優先事項はモンスターを戦闘で破壊させない事での進化の阻止。特にホルスだけは進化させる訳には行かない)

アームドドラゴンの破壊効果も厄介だが少なくとも、アームドドラゴンはLv10以下ならば、上手くジークフリードやメテオヴルムを召喚できれば効果を使わずに戦闘破壊できる。

総麻のデッキの効果を考慮に入れない攻撃力の最高値はジークフリードの3000、攻撃力3000以下のモンスターならモンスター効果無しで戦闘破壊できる。

アームドドラゴンの効果はコントローラーのターンのみで総麻のターンには使用できない為に脅威は薄い。逆に魔法を封じる効果を持ったホルスの方がLv8時の攻撃力と合わせて総麻には脅威だ。

そう考えた結果、総麻はホルスの攻撃を最大限に対処する事を決める。幸いにも自分のフィールドの状況と相手のフィールドを考えれば…。

(アームドドラゴンの効果を考えると…このターンで決めに来るはず)

「手札のモンスターカード『レアメタルドラゴン』を墓地に送り、その攻撃力以下のモンスターを破壊…」

人影が手札のモンスターを墓地に送るとそれをトリガーに発動したアームドドラゴンLv5の打ち出した丸鋸の様な弾丸によって総麻のフィールドのサーベカウラスが破壊される。これで、総麻のフィールドから壁モンスターは消えた。

「アームドドラゴンLv5でダイレクトアタック、アームドパニッシャー!」

(どつちにしても、ライフは削られる…。相手はある意味、最高のパターンで行動してくれた…)「罨カード発動、『ガードブロック』!」

総麻へと向かうアームドドラゴンの拳をカードに似た壁が防ぐ。それと同時にカー

ドの効果で一枚ドロウする。

(…このカードは違う。でも、あとはホルスの攻撃をライフで受ければ、十分…)

このターン、ライフを犠牲にしても二体のレベルアップの条件を満たさせない事、このターンでのライフが0になるのを避ける事。優先するべきはこの二つだ。

「ホルスの黒炎竜、ダイレクトアタック」

ホルスの打ち出す漆黒の炎が総麻へと襲い掛かる。例え、ライフが100000だろうが1だろうが最終的に勝利条件さえ満たせば、自分の勝ちに変わりはない。ならば、ライフも効果的に利用すべき。そう判断しているのだが、

「っ!？」

無意識の内にもう一枚の伏せカードを発動させようとした腕を慌てて遠ざける。

確かに伏せカードを発動させればダメージは軽減できるが、ホルスを態々進化させてしまう事になる。僅かなライフよりもホルスの進化阻止を優先していた筈なのに…。

(…ダメージを恐れてるのか…オレは)

思い浮かべるのは先日タイタン(ダーク・クリムゾン)戦で受けた傷の痛み。自分の中の恐れを振り払う様に総麻は自身へと迫る漆黒の炎へと手を翳す。

《魔人》の《力》による防御用の術の一つ《力天使の緑》を使って闇のデュエルでのダメージを軽減しようとするが、何故か《力》が使えない。そう思っていると、総麻の体をホ

ルスの黒炎竜の放った漆黒の炎が包み込む。

「ぐ……ぐあああああああ!!」

全身を炎に焼かれる痛みは感じるが火傷は無い。だが、ソリットビジョンではない痛みだけは確かに感じていた。

総麻 LP4000↓1700

半分以上のライフを奪われるが、これでアームドラゴンもホルスの黒炎竜も進化条件を満たせていない。それだけでも十分に自分のライフを犠牲にしただけの価値はある。

(……これで……)

「カードを一枚伏せてターンエンド」

「オレのターン、ドロー」

相手のエンド宣言を聞き総麻はデッキからカードをドローし、手札に加えると手札のカードを一瞥する。

「(来た!) 罨カード発動、リビンググデッドの呼び声、蘇れサーベカウラス!」

再び総麻のフィールドにカメレオンの様な姿のドラゴンが召喚される。

「サーベカウラスを生贄に…雷よ、天を裂け！ 雷皇龍ジークヴルム、攻撃表示で召喚！」

サーベカウラスと入れ替わる様にルビーが現れ、ルビーが砕けると同時に天空から降り注ぐ雷と共に真紅の体を持った流線型のドラゴン『雷皇龍ジークヴルム』が総麻のフィールドに咆哮と共に降り立つ。

雷皇龍ジークヴルム 攻撃力2100

攻撃力ではアームドドラゴン、ホルスの黒炎竜には僅かに及ばず、現在フィールドに存在しているドラゴンの中では、総麻のフィールドに佇むジークヴルムが攻撃力の面では最も弱いだろう。

(…ホルスとアームドドラゴン…。二体とも確かに強力なモンスターだけどな…)「オレの相棒(ジーク・ヴルム)の力を、見せてやる」

少なくともこのターンの間で二体のドラゴンを葬る事は不可能。この状況で優先的に倒すべきなのは、

(ジークヴルムを召喚できた以上、先ずはアームドドラゴンを。ホルスも厄介だけど、効果で破壊される危険だけは避けたい)「雷皇龍ジークヴルムでアームドドラゴンLv5

を攻撃、「激突」しろ、ジークヴルム！ ライトニングクラッシュユー！」

咆哮を上げたジークヴルムが総麻の指示に従い空高く舞い上がり、雷を纏って一直線にアームドドラゴンへと突進する。アームドドラゴンは自身へと迫るジークヴルムを迎え撃とうと腕を振り上げてジークヴルムの突進に対してカウンターの形でパンチを放つ。突進とパンチがぶつかった瞬間、二体のドラゴンは一旦距離を取る。

「速攻魔法、突進！ これでジークヴルムの攻撃力は700ポイント上昇する！」

雷皇龍ジークヴルム 攻撃力2100↓2800

アームドドラゴンLv5 攻撃力2400

再び雷光を纏ったジークヴルムは先ほど以上のスピードでアームドドラゴンへと向かって飛翔する。再び迎え撃とうとするアームドドラゴンだが、攻撃力の増したジークヴルムの一撃によって容易く粉碎される。

人影 LP4000↓3600

だが、ジークヴルムの攻撃はそれに留まらない。

「更にジークヴルムのモンスター効果、戦闘で破壊したモンスターの攻撃力分、相手にダメージを与える！」

人影の前に立ったジークヴルムの吐く炎が、そのまま人影へと向かい相手のライフを大きく削り取る。

人影 LP3600↓1200

(これでライフは並んだ)「カードを伏せてターンエンドだ」

ジークヴルムを従えながらターンエンドを宣言すると、人影はカードをドロウとなるであろう石版を増やし総麻へと視線?を向ける。残念ながら辛うじて人の形をしている赤と白の人影には目となる部分はないが。

「…その程度か…」

「っ!?!」

「…心に刻まれた恐怖を乗り越える勇氣も覚悟も無い…」

「…くっ…」

人影が告げる言葉は間違いなく凶星だ。その言葉に齒噛みしながら総麻は人影を睨みつけることで答える。

「…私は…」

石版の一枚が消え、それは通常のカードへと変わる。

「『星竜 レイニードル』を召喚」

「なっ!？」

人影が通常のカードへと変わったそれを投げると人影のフィールドに一体のドラゴンが召喚される。

人影のフィールドに召喚された蒼い細長い体を持ったドラゴンの存在に驚愕する。それは…本来デュエルモンスターのカードではなく、バトルスピリッツのカード。しかも、レイニードルのカードは。

「レベル6『ホルスの黒炎竜Lv6』に、レベル2『星竜 レイニードル』をチューニング」

レイニードルの体が二つの輪に変わり、その中をホルスの黒炎竜Lv6が潜り抜け居ていく。

そう、レイニードルのカードはこの時代には存在しないはずの『チューナー』だった。「星竜よ、その魂を糧に新たな竜を導け、シンクロ召喚」

(…レベル8のシンクロ…? しかも、あの口ぶりだとドラゴン…。何が来る?)

考えられる可能性を上げていくが、ふと一つ…いや、正しくは二体のドラゴン族の存

「やれ、アブソリユート・パワーフォース」

炎を纏った拳を振るうレッドデーモンズドラゴンが一直線にジークヴルムへと向かっていく。レッドデーモンズドラゴンを迎え撃たんとジークヴルムは雷光を纏って一直線にレッドデーモンズドラゴンへと向かう。

「手札のモンスターカード『雷鳴龍リンド・グローム』の効果発動！ 手札のこのカードをゲームから除外する事で、フィールドに存在する『炎属性』、ドラゴン族のモンスターの攻撃力を1000ポイントアップさせる！」

僅か1000だがこれでレッドデーモンズドラゴンの攻撃力を上回る。後はジークヴルム自身の効果で勝利できる。

雷光の龍がジークヴルムと重なりレッドデーモンズドラゴンへと突進するジークヴルムを雷光がより巨大な姿へと変える。

だが、雷光を纏ったジークヴルムの一撃がレッドデーモンズドラゴンを撃ち抜くかと思った瞬間、

「なに!？」

レッドデーモンズドラゴンは両腕でジークヴルムを受け止め…否、攻撃力で上回るはずのジークヴルムを逆に押し返し始めていた。

「…速攻魔法、突進…」

伏せカードが表になりそのカードの効果がレッドデーモンズドラゴンに力を与える。それによって力負けしたジークヴルムはそのまま地面へと叩きつけられる。

雷皇龍ジークヴルム 攻撃力2100↓3100

レッドデーモンズドラゴン 攻撃力3000↓3700

「っ!?! (拙い、手札にも伏せカードにも攻撃力を上げるカードは無い!?)」

地面にジークヴルムを叩きつけるとレッドデーモンズドラゴンは再び空高く飛翔し、必殺技のアブソリユート・パワーフォースの体制に入る。

慌てて次のカードの効果を発動させようとした時、ジークヴルムが咆哮を上げてレッドデーモンズドラゴンへと向かっていく。レッドデーモンズドラゴンのアブソリユート・パワーフォースに撃ち込まれながら、ジークヴルムは総麻へと向かう筈の超過ダメージの炎を全身で受け止めていく。

「ジーク…ヴルム?」

デュエルディスクに表示されているライフポイントを確認すると、確かに減少していき、

総麻 LP1700↓1100

だが、総麻には何の痛みも発生していない。これが闇のデュエルの様に実際にダメージが発生する事はホルスのダイレクトアタックで確認している。

では、何故？ その理由は簡単だ、超過ダメージとして受けるはずのダメージを総麻に変わってジークヴルムが己の身を盾にして一身に受けてくれている。

そして、レッドデーモンズドラゴンの炎が消えると同時にジークヴルムもまた力尽きた様に崩れ落ち、そのまま粒子になって消えていく。

「…すまない、相棒（ジーク・ヴルム）」

俯く総麻に向かってジークヴルムは最後に咆哮を上げて消えて行った。ジークヴルム自身の意思が何かは分からない。伏せカードは確かにダメージを回避出来るカードだった。ただ、あのタイミングで発動させたとしても意味は薄かっただろう。

発動させようとした理由はジークヴルムを護る為でもなければ、負けない為でもない、現実の物となつて発生するダメージに怯え、ダメージから逃れる為にカードを発動させようとした。そのカードを温存させる為にジークヴルムは自らを盾にして総麻を護った。

「…無様だな…」

レッドデーモンズドラゴンを従えた人影の心が深く突き刺さる。

「逃げる事は否定しない」「蛮勇と勇氣は別物だ」「覚悟が無いわけではない。だが、恐怖心が覚悟を上回っていると言う事か」

人影から聞こえる声音が変わっていく。まるで別人のように。

(…今の声。そうか、赤と白…完全に混ざり合っていないのは、別の意思が二つ揃って動かしているからか)

「安易に与えられた《力》に頼って、逃れようとするのは弱さだ」「…その程度の覚悟では、お前はこれから先の戦いに臨む者に相応しくない」「恐怖を乗り越える勇氣を持って越えて見せろ」「ターンエンド」

人影がターンの終わりを宣言した事でターンは総麻に移る。

「オレのターン、ドロ」(ダメだ…このカードじゃ、レッドデーモンズドラゴンには勝てない)

ドロしたカードを一瞥すると、

「アンキラーザウルスを守備表示で。ターンエンド」

尻尾がドリルになった赤い恐竜が守備体制をとる。

アンキラーザウルス 守備力1200

「ドロロー。レッドデーモンズドラゴンで攻撃」

レッドデーモンズドラゴンの噴出す炎に焼かれ、成す術も無く破壊されるアンキラーザウルス。

「この程度のデュエルしか出来ないほど闘志も消えたか、アマナギソウマ?!? ターンエンドだ」

「ドロロー。くつ、二枚目のアンキラーザウルスを守備表示で…。ターンエンド」

ドロローしたカードもレッドデーモンズドラゴンを倒せるカードではない。仕方なく手札の二枚目のアンキラーザウルスを守備表示で召喚し、エンド宣言する。

「ドロロー。手札から魔法カード《サジツタ・フレイム》を発動、相手フィールド上のカード全て破壊する!。そして、コストとして手札を一枚捨てる。そして、次のターン、ドロロー出来ない」

天空から降り注ぐ無数の炎の矢が守備体制を取っていたアンキラーザウルスへと降り注ぐ。それによつて消えていくアンキラーザウルスの声が耳に残る。

「う…ああ…」

「更にデブリドラゴンを攻撃表示で召喚。効果は使わずにデブリドラゴンで攻撃」

「何故雷皇龍がお前を護った!?! お前は恐怖を乗り越えるだけの『勇氣』は有る筈だ。本

当に臆病ならば、あの時も見捨てて逃げていたはずだ」「雷皇龍の意思に答えられるだけの覚悟が有るのなら」「誰かの為に戦えるだけの勇気があるなら」「恐怖を乗り越えてこの試練に打ち勝って見せろ」

「っ!？」

総麻は無言のまま自身へと迫るデブリドラゴンを見据える。そして、片腕を翳してデブリドラゴンの突進を受け止めた。

「…そうだな…。少なくとも、オレを信じてくれた相棒に位は…答えないとな」

総麻 LP1100↓100

「ぐっ」

デブリドラゴンの攻撃によって総麻の腕に激痛が走る。そして、ライフもまた残り100まで減少する。

「レッドデーモンズドラゴンでダイレクトアタック!」

「罠カード、ガードブロック! 二枚目だ!」

再び現れたカードの壁が総麻をレッドデーモンズドラゴンの攻撃から護る。そして、その効果で一枚ドロウする。

(…このカードじゃない)

相手のターンエンドの宣言を聞きながらガードブロックの効果でドローしたカードを一瞥する。効果的なカードは有るが残念ながら逆転の一手にはなり得ない。

(…このドローで逆転のカードを引けなきゃ、あとはジリジリと追い詰められるだけだな)

少なくとも、現在の手札なら相手のフィールドに伏せカードも無い状況ならば、あのカードをドロー出来れば間違いなく勝てる。だが、そのカードをドロー出来なければ、精々がこのターンを乗り切れる程度だろう。

(…タイタンの時に初めて力を貸してもらったばかりだけど…。もう一度、オレに力を貸してくれ、メテオヴルム)「オレのターン、ドロー!」

勢い良くカードを引き抜くと総麻はそのカードを一瞥する。

「相手フィールド上にモンスターが存在する事で、エリマキリザードを特殊召喚!」

総麻のフィールドに現れたルビーから出現する刃状になった襟巻きをつけたエリマキリカゲ、そして、総麻は先ほどドローしたカードを手取る。

「エリマキリザードを生贄に、天より降臨せよ、流星の皇! 龍星皇メテオヴルム、攻撃表示で召喚!」

天から降り注ぐ無数の隕石が総麻のフィールドに落下した瞬間、隕石の落下によつて

巻き起こった土煙を切り裂き、その中から現れるオレンジの体色を持ったドラゴン、龍星皇メテオヴルムが咆哮をあげる。

「龍星皇メテオヴルムのモンスタ―効果、炎属性ドラゴン族を生贄にして召喚した時、召喚したターンの間だけ攻撃力を1000ポイントアップする効果が有るけど、残念ながらエリマキリザードはドラゴン族じゃない」

龍星皇メテオヴルム 攻撃力2800

「手札から魔法カード『死者転生』発動、手札のカードを墓地に送り、墓地の『雷鳴龍リンド・グローム』を手札に戻し…バトル！」

総麻の宣言と共にメテオヴルムは天へと舞い上がる。その姿はその名の如く『隕石(メテオ)』の様に炎を纏って一直線にレッドデーモンズドラゴンへと向かっていく。

「手札の『雷鳴龍リンド・グローム』を墓地に送り、再び効果発動！ 行け、メテオヴルム！ 【激突】しろ！」

龍星の如く天から一直線に向かってくるメテオヴルムに対して拳を振り上げて向かえ撃たんとするレッドデーモンズドラゴンだが、上空から降り注ぐ雷を纏った雷炎の流星となったメテオヴルムのパワーに次第に押され始めていく。

「行け、メテオヴルム！」

龍星皇メテオヴルム 攻撃力2800↓3800

レッドデーモンズドラゴン 攻撃力3000

拮抗が崩れた瞬間、レッドデーモンズドラゴンの拳が弾かれ、メテオヴルムが無防備な瞬間を逃さず打ち抜く。そして、断末魔の咆哮を上げたレッドデーモンズドラゴンが爆散するのを尻目に炎と雷が消えたメテオヴルムが相手の正面に降り立つ。

「メテオヴルムのモンスター効果、破壊したモンスターの攻撃力：3000の効果ダメージだ！」

人影 LP1200↓2600

メテオヴルムの撃ち出す炎に焼かれて人影は完全に消滅する。

「…勝った…のか…?」

メテオヴルムの姿が消えて行くのに合わせて消えていく周囲を囲っていた白と赤の光の壁、そして総麻の手の中に三枚のカードが現れる。

「っ? レイニードルのカードに、あとは…白紙?」

何も書かれていない真っ白なカードが二枚。そして、先ほどのデュエルで相手の使っ

たチューナーモンスター『星竜 レイニードル』のカードが今は総麻の手の中に有る。

―残念ながら、今のお前には合格点はやれんな―

―だから、オレ達の力を持つべきかはそのカードが決めるだろう―

そんな声が総麻の耳に届く。聞こえなくなった声にも何も答えず、総麻は其処から立ち去っていく。

???

二体のドラゴンの影が赤い光の龍に一枚のカードを差し出すと、そのカードは自然に赤い龍の下に行き、赤い龍は何処かへと飛び去っていく。

た。感謝を込めてそれを見送ると、ゆっくりと二体のドラゴンは光となって消えて行った。

TURN—10 『森林の覇者』

総麻SIDE

さて、先日チューナーモンスターと白紙のシンクロモンスターを手に入れてから、遂に制裁デュエルの時が来た。まあ、当日まで丸一日保健室のベッドの上に拘束されてたりするのだが…。

その間には翔が脱走未遂を起して十代が翔の兄のデュエルアカデミアのカイザー『丸藤 亮』と戦ったり、隼人が父親と退学を賭けたデュエルをしたり、と言うイベントがあつたが、その間総麻は保健室で眠り続けていたりする。

まあ、ダーク・クリムゾンとの闇のデュエルでの傷とその後のレッドデーモンズドラゴンを初めとする高攻撃力のドラゴンデッキを相手にしたデュエルでのダメージ。その二つのデュエルでのダメージの結果、再度倒れてしまったので当然と言えば当然だろう。まあ、治療術のお蔭でこの程度で済んでいるのだが。

(鮎川先生には怒られて、フェイトさん達には泣かれた上に怒られたりと…動ける訳無いよな)

そんな訳で制裁デュエルまで大人しく保健室のベッドの上で、部屋から持って来ても

らったカードで制裁デュエルへ向けてのデッキ調整をしていた。

少なくともどんな相手にも対応出来る様に六つのデッキの調整は出来ている。…確実に勝ちたければ、《力》を使って封印してある“狂った精霊”の宿った《幻羅星龍ガイ・アスラ》のカードを使えば、それだけで十分に勝てる。

だが、それを使わないのは総麻自身が定めている最後の一線と言った所だろう。

(…少なくとも、ガイ・アスラは魔龍帝とは事情が違うしな…)

以前にも語ったがガイ・アスラは元の持ち主であった男の人類への憎しみを長過ぎる期間受け続けた結果、“狂った”のだ。他者の影響で狂った精霊を正常に戻す方法が分からない以上、ガイ・アスラの暴走を防ぐ為には封印するしかない。

「つと、そろそろ時間か」

軽く調子を確かめる様にその場でジャンプすると総麻は確認しながらデッキを一つずつケースに移すと上着を着てデュエル場へと向かっていく。

S I D E O U T

『それでーハ、制裁タッグデュエルを始めるノーネー!』

総麻は観客席から一人で十代達のデュエルを眺めていた。ダーク・クリムゾンの様なイレギュラーでも起こらない限りは先ず十代達が負ける事は無いだろうが、逆を言えばそんなイレギュラーが有ればダーク・クリムゾンの時の様に、十代達が負ける危険性も有り得るのだ。

(…:迷宮兄弟が使いそうなカードで考えられるのは、『マンモール』か『キャツスルゴレム』か? まあ、どっちも精霊が宿っていたとしても、それほど危険なカードじゃ無さそうだけど…)

前例が有る以上は、また別のバトスピのカードの精霊が敵に廻る可能性も有り得ると警戒はしておくべきだろう。

その結果は結論から言おう、

「やったぜ!」

「勝ったッス!」

十代達の対戦相手である『迷宮兄弟』に、見事二人のカードの融合モンスター『ユー

フオロイド・ファイター』によつて迷宮兄弟の切札『ダーク・ガーディアン』に貫通ダメージを与える事で勝利した。

(…イレギュラーは無しか)

そんな勝利の瞬間を眺めながら総麻は心の中で安堵する。タイタン戦とは違い、特にイレギュラーは起きず十代と翔は無事迷宮兄弟に勝利する事ができた。

「次は天風総麻！ 入ってくるノーネ！」

十代達が勝つた事で悔しそうにしていたクロノス教諭が総麻の名を呼ぶと、総麻は観客席の柵の部分に足をかけて大きくジャンプしてデュエル上に音も無く降り立つ。

派手な登場に観客席に居る生徒達は啞然としているが。

「さあ、オレの相手は誰ですか？」

「そ、その前に君は持つてるデツキを全部出すーノ」

「？」

「ユーが複数のデツキを持つているのは知ってるノーネ。だから、対戦相手によつて決めない様に、公平に私（わたくし）ーがデツキを選ぶノーネ」

「そうですか、そう言う事なら」

六色のデツキを取り出すと、

（又フッフ、彼が強敵と戦う時は何時もドラゴン族のデツキを使う事は知ってるノーネ、

だったら、ここでそれ以外のデッキを選ばないノーネ)

そんな事を思いながら六つのデッキを選んでいるクロノスに対して笑みを浮かべながら、

「あつ、クロノス先生。ただ、そのデッキって全部39枚しか入ってないんですよ」

「なんでスート!?」それでーは「これが四十枚目です。クロノス先生が選んだデッキを確認した後でこのカードを入れれば」分かったのーネ、それでーは」

そう言つて総麻はクロノスにジークフリードのカードを見せる。そして、クロノスは六つのデッキの中から一つ…緑色のケースのデッキを手にとってそのデッキに目を通す。

(これーは、ヌフフ、試験の時ーに使つたデッキなノーネ)「確認したノーネ、それでは最後のカードを入れるノーネ」

「はい」

そう言つて渡されたデッキに四十枚目のカードを入れてシャッフルするとデッキをデュエルディスクにセットする。

「それで、オレの相手は?」

「ヌフフ、こちらもかなりの実力者を呼びましたノーネ!」

クロノスがそう言うと言選入手入場口から誰かが歩いてくる。間違いなく、それが対戦相

手だろう。

「お前がワイの対戦相手やな？　ワイと勝負する事になるなんて、お前もついてへんな？」

「…クロノス先生」

「なんなノーネ？」

「何か、迷宮兄弟に比べて随分レベルが落ちましたね」

正直な意見だった。まあ、ニツト帽を被ってベストを着た十代後半の男…恐竜族デッキの使い手の『ダイナソー竜崎』。

はつきり言って、遊戯王DMの中で一二を争うほど勝率の低いデュエリストだろう。インセクター羽賀に負けて、アンティデュエルで城之内に負けて真紅眼の黒竜を取られて、エスパール紹場に負けて、付け加えると遊戯（アテム）とは一度も戦っていない。更に付け加えるとアニメオリジナルエピソードでは更に惨めだったりする。どう考えても迷宮兄弟に比べてランクの下がるイメージがある。

…実力者なのは間違いないだろうが…。

「なんやとー!!!」

「仕方ないノーネ。迷宮兄弟へのギャラでかなり掛かったノーネ。だから、ランクは落ちて、それなりーの実力者として」（小声）

「決闘王である遊戯さんと戦ってないけど、その親友の城之内さんと戦ったデュエリストにランクダウンと……」（小声）

「ちよつと待てー！ お前等、しつかり聞こえてるで！！」

「おっほん」

一度咳払いするとそれぞれ何事も無かった様にデュエルの準備を始める。

「お前等なあ……ワイを誰やと思つとるんや！」

「ダイナソー竜崎さん、ですよね」

「態とらしい敬語は止めてサツサと始めるで！」

ダイナソー竜崎の言葉に笑みを浮かべて総麻はデュエルディスクを向ける。

「それじゃあ。始めるとするか」

「おう！」

「デュエル！」

観客席…

「行つけー、総麻くん！ 私とキャラが被りそうなのに負けたら許さへんで！」

「あはは、はやてちゃん。そんな事言っちゃダメだよ」

「総麻は負けても退学じゃ無いけど、そんな事言っちゃダメだよ」

なのはとフェイトの二人に窘められるはやて。

「でも、十代君達と違って総麻君の場合は気軽に応援できるから、安心やな」
「そうだね」

デュエル場

総麻 LP 4000

ダイナソー竜崎 LP 4000

「オレの先行。ドロロー」

ドロローしたカードを一瞥し、総麻は素早く戦術を組み立てる。

「アంతも實際運が悪いな」

「なんやと!?!」

「オレのデッキが… 〃こいつ〃なんてな。オレは『ビートビートル』を攻撃表示で召喚
!」

総麻のフィールドに現れたエメラルドが砕け散り、その中から現れる一匹のカブトムシ。

ビートビートル

☆3

属性：風

昆虫族

攻撃力1000 / 守備力1000

効果

一ターンに一度だけ攻撃表示で存在するこのカードへの攻撃を向こうにできる。

「さらにフィールドに昆虫族の風属性モンスターが存在する時、手札のこのカードを準備表示で特殊召喚、来い『フライングミラージュ』！」

フライングミラージュ

☆3

属性：風

昆虫族

攻撃力1500／守備力1000

効果

自分フィールド上に風属性の昆虫族モンスター存在する時、このカードは手札から特殊召喚できる。

「昆虫って、運が悪いつてそう言う事か!？」

「残念ながら、主の命を吸って咲き誇る大樹は手札に無いが、オレはカードを一枚伏せてターンエンド。さあ、本当の意味での…緑のデッキの初陣だ。全力で戦ってくれよ、ダイナソー竜崎さん」

フィールドに召喚されたビートビートルとフライングミラージュの姿に顔をしかめ

るダイナソー竜崎。羽音立てて羽ばたく二匹の昆虫を従えながら、総麻は余裕と言った表情を浮かべている。

観客席

「くうー、総麻の奴あんなデツキも持ってたのかー！ オレもデュエルしてみてえー！」
「なるほど、昆虫族デツキか。クロノス先生が選んだとは言え、面白いデュエルになりそうだな」

「どう言う事スつか？」

総麻の召喚したモンスターを見て興奮気味の十代とその姿を見て納得と言った顔の三沢。

「ダイナソー竜崎は全国大会で昆虫デツキのインセクター羽賀に負けて、日本二位に留まっちゃってしまっているんだ」

「つまり、いい意味か悪い意味かは別にして、心理的に影響のあるデツキと言う事ね」

「ああ。一度、それも大舞台で負けた相手のデッキと同じ昆虫族、心理的に影響はあるはずだ。だが」

「どうしたんだよ、三沢？」

「いや、あのモンスターも見たことが無いな、と思ってな。いや、総麻の使うモンスターはどれも見たこと無いカードだ。一体、彼はあんなカードを何処で手に入れたんだ？」

TURN—11 『並び立つ赤と緑』

総麻のフィールドに羽音を立てて飛ぶ二匹の昆虫族モンスター『フライングミラー
ジュ』と『ビートビートル』。

定期試験の実技の時は一部しか能力を發揮できなかった緑のデッキにとってこれが
事実上の初陣となる訳だ。

総麻 LP4000

手札：3

フィールド

『フライングミラージュ』

『ビートビートル』

伏せカード一枚

「ワイのターン、ドロー！」

偶然にも六つのデッキの中から昆虫族の含まれる『緑』のデッキが選ばれたのを利用

して行った軽い挑発が功を奏したのかは疑問だが、ダイナソー竜崎からは微かに焦りの感情が見える様にも見える。

(…油断は禁物だな…。過去の大舞台で負けた相手のデッキと同じ種族を利用したのは…ある意味じゃ逆効果つて事もあるしな)

ゆつくりと自分の手札に視線を落とすが、残念ながら手札に上級モンスターは居ない。自分のフィールドに要るのは二体の攻撃力の低い昆虫族モンスターと伏せカードのみ。それを考えると…。

(一ターン目の布陣としてはそれなりに。…相手の動き次第だけだな)

「ワイは『俊足のギラザウルス』を特殊召喚！」

(やっぱり)

一ターン目の手としては最善のカード。少なくとも初期の手札に存在していれば間違ひなく特殊召喚すべきカードだろう。もちろんデメリットも有るが、そのデメリットも少なくとも一ターン目ならその欠点も…

「オレの墓地のモンスターカードは無い。俊足のギラザウルスのデメリットの効果も意味は無いか」

「そう言う事や！　ワイは俊足のギラザウルスを生贄に、『暗黒(ダーク)ドリケラトプス』を召喚！」

暗黒（ダーク）ドリケラトプス 攻撃力2400

俊足のギラザウルスと入れ替えに現れるカラフルな体色なトリケラトプス。貫通ダメージを持つてはいるが、少なくとも総麻のフィールドのモンスターは悪い事に一体が守備表示で存在している上に守備力の方が高い。

「行け、暗黒（ダーク）ドリケラトプス！ フライイングミラージュを攻撃やー！」

突進してくる暗黒（ダーク）ドリケラトプスから慌てて逃げようとするフライイングミラージュだが、簡単に踏み潰されて粉碎されてしまう。

総麻 LP4000↓2600

「くっ」

その一撃で総麻のライフは大きく削られてしまう。攻撃を無効にするビートビートルと違い攻撃を無効にする効果のないフライイングミラージュを念の為に守備表示にしていたのが返って仇となった。

「これでターンエンドやー！」

エンド宣言と共にターンは総麻に移る。

総麻 LP2600

手札：3

フィールド

ビートビートル

伏せカード一枚

ダイナソー竜崎 LP4000

手札：4

フィールド

暗黒（ダーク）ドリケラトプス 攻撃力2400

（…攻撃力2400…下手に護りに入れないか。高攻撃力の貫通効果持ちつつてのは厄介だな。出来れば上級モンスターを引きたい所だけど…）「オレのターン、ドロロー！」
 デツキから引いたカードに視線を向ける。総麻のドロローしたカードは待っていた上級モンスター。しかも、

「オレはフィールドのビートビートルを生贄に、このカードを特殊召喚！」

総麻のフィールドからビートルビートルと入れ替わりにエメラルドが現れる。

「戦場（いくさば）を駆ける、甲虫の騎士！ 出る、『キングタウロス大公（たいこう）』」
!!!

エメラルドの宝石が砕け其処から出現するのは二本の槍を構えた人型の昆虫。

『キングタウロス大公（たいこう）』 ☆ 8

属性：風

攻撃力2600 / 守備力1500

昆虫族

効果

このカードは自分フィールド上の昆虫族モンスター一体を生贄に捧げる事で特殊召喚できる。

このカードが戦闘で相手モンスターのみを破壊した場合、相手のライフに800ポイントのダメージを与える。

「そして、キングタウロス大公で暗黒（ダーク）ドリケラトプスを攻撃！ 貫け、『獣槍ゲイボルグ』！」

総麻の宣言に従いキンググタウロス大公は槍を構えて暗黒（ダーク）ドリケラトプスへと突進する。暗黒（ダーク）ドリケラトプスもそれを迎え撃たんと突進するがキンググタウロス大公は素早くその突進を避け、真横から手に持つ槍『獣槍ゲイボルグ』を突き刺すと走りながら暗黒（ダーク）ドリケラトプスは大地に横たわり消え去っていく。

ダイナソー竜崎 LP4000↓3800

「更にキンググタウロス大公のモンスター効果、戦闘で相手モンスターのみを破壊した時、相手のライフに800ポイントのダメージを与える！」

キンググタウロス大公が暗黒（ダーク）ドリケラトプスを刺し貫いた槍を引き抜き、残す槍をダイナソー竜崎に投げつけるとそのままライフを800削り取る。

ダイナソー竜崎 LP3800↓3000

「くっ、破壊する度にダメージ、厄介な効果やな！」

「その通り。オレはこれでターンエンドだ」

総麻 LP2600

手札：3

フィールド

キングタウロス大公 攻撃力2400

伏せカード一枚

ダイナソー竜崎 LP3000

手札：4

フィールド

無し

キングタウロス大公の存在でデュエルの流れは総麻に傾きつつある。

(…あと四回キングタウロス大公でモンスターを破壊できれば、このデュエルはオレの勝ちになるだろうけど…)

もちろん、そんな単純に勝てる訳では無いだろうが、少なくとも相手の心理に『キングタウロス大公を早く何とかしなければ』と言う考えを与える事ができる。

(…バウンス、手札やデッキに戻すって言う選択肢も有る。比較的『破壊』と言う対応策を使う傾向が高いけど、油断は禁物だな)

攻撃力を上回るモンスターへの攻撃での破壊、魔法・罠・モンスター効果での効果破壊。何れかの手段で来るとしても、

(だけど、キングタウロス大公の攻撃力を上回る手段は恐竜族には多いから、確率的には戦闘破壊が高いか)

そう考えを廻らせる。

「ワイのターン！ なかなかやるやないか！ ワイはモンスターをセット、カードを一枚伏せてターンエンドや！」

ダイナソー竜崎はモンスターをセットしただけでターンエンドの宣言をする。

「オレのターン、ドロー！」

先ほどドローしたカードに視線を向けながらダイナソー竜崎がセットしたカードへと注意を向ける。

(…可能性として高いのは『ハイパーハンマーヘッド』か…)

総麻のフィールドのキングタウロス大公には昆虫族を生贄にする事で『特殊召喚』出来る効果を持っている。キングタウロス大公が手札に戻された所でそれほど被害は大きくない。大きくは無いが、

(…可能性は潰させて貰うか…) オレは『ブラックモノケイロス』を攻撃表示で召喚！

総麻のフィールドに召喚されるのは黒い人型のクワガタの様な昆虫。通常の『月甲モ

『ノケイロス』と言うモンスターも存在してデッキに投入しているが、今回は手札に来たブラックの方を召喚する。

『ブラックモノケイロス』☆4

属性：闇

攻撃力1800／守備力1000

昆虫族

効果

このカードは風属性としても扱う。

このカードがフィールド上に存在する時、自分フィールド上の昆虫族全ての攻撃力は400ポイントアップする。

「ブラックモノケイロス、お前の力をキングタウロス大公へ！」

キングタウロス大公 攻撃力2600↓3000

ブラックモノケイロス 攻撃力1800↓2200

「な!? こ、攻撃力3000と2200やて!？」

「引いたら負け…ってな、ブラックモノケイロス、伏せモンスターを攻撃!」

総麻の指示に従ってブラックモノケイロスが伏せモンスターへと殴りかかる。

(…少なくとも、☆4以下の守備力で2200を越えるモンスターはそうは居ない。あとは…)

ブラックモノケイロスが叩き付けた腕を伏せカードの裏から飛び出した頭がハンマーの様になった恐竜が交わす。伏せカードはブラックモノケイロスによって粉砕されるが、『ハイパーハンマーヘッド』はブラックモノケイロスの腕を交わしてハンマーの様な頭を叩きつける。

それによって吹き飛ばされるが、ブラックモノケイロスは体勢を崩しながらもハイパーハンマーヘッドに腕を叩きつける。

「ハイパーハンマーヘッドは戦闘で相手モンスターを破壊できへんかった時、相手モンスターを手札に戻す事が出来るんや!」

「だけど…これで、オレの計算通りだ!」

キングタウロス大公 攻撃力3000↓2600

総麻の宣言を聞いて彼の前に立って攻撃力は低下するも、双槍を構える緑の甲虫・キングタウロス大公。

「ちっ！ ホントはハイパーハンマーヘッドの効果でそいつを手札に戻したかったんやけどな」

「追撃だ、キングタウロス大公！ ダイレクトアタック！」

キングタウロス大公の振るう槍がダイナソー竜崎に突き刺さろうとした瞬間、

「そうはさせませんで！ 罨カード発動！ 『炸裂装甲（リアクティブアーマー）』！ これで、キングタウロス大公を破壊させてもらおうで！」

ダイナソー竜崎を護るように展開された光の壁にキングタウロス大公の槍は阻まれると同時に光の壁が爆発、その爆発に巻き込まれキングタウロス大公も粉碎されてしまった。

「くっ、キングタウロス大公……。オレはカードを伏せてターンエンド」

総麻 LP2600

手札：3

フィールド

無し

伏せカード二枚

ダイナソー竜崎 LP3000

手札：3

フィールド

無し

「ワイのターン、ドロロー！　ワイは手札から魔法カード『天使の施し』を発動、三枚ドロローして二枚捨てる」

（天使の施し…嫌なカードを。あの切り札を出される前に決めたかったけどな…）

「更に手札から『俊足のギラザウルス』を特殊召喚」

「オレも効果で墓地からビートルビートルを攻撃表示で召喚」

互いのフィールドに特殊召喚される俊足のギラザウルスとビートルビートル。ビートルビートルは一度だけ攻撃を無効に出来る効果を持った優秀なモンスターだが…。

（…オレの墓地にモンスターが居る状況でギラザウルスを召喚するって事は…“最悪”の展開を覚悟しないとイケないかもな…）

「手札から『大進化薬』を発動！　このカードの効果は自分フィールド上の恐竜族を一体

生贄にして発動！ 発動してから3ターンの間、ワイは☆（レベル）5以上の恐竜族を生贄無しで特殊召喚ができるんや！ 更にワイは『究極恐獣（アルティメットティラノ）』を召喚！」

フィールドを砕くように地面から出現する究極恐獣（アルティメットティラノ）。だが、ダイナソー竜崎は更なるカードを発動させる。

「更に手札から魔法カード『死者蘇生』を発動！ 墓地から『暗黒（ダーク）ティラノ』を特殊召喚や！」

ダイナソー竜崎のフィールドに死者蘇生の魔法カードから召喚されるスタンダードな姿の黒いティラノサウルス。

究極恐獣（アルティメットティラノ） 攻撃力3000

暗黒（ダーク）ティラノ 攻撃力2600

「う…わぁ…。それほど強くないビートビートル一体のオレに此処までする？」

「へっ、伏せカード二枚もセットしといて何言つとるんや。それにそのモンスターも何か効果をもつとるんやろ？」

「…さあな…」

「暗黒（ダーク）ティラノでビートビートルに攻撃！」

「ビートビートルの効果発動！」

総麻のフィールドのビートビートルへと襲い掛かる暗黒（ダーク）ティラノだが、ビートビートルは素早い動きで周囲を飛び回りながら暗黒（ダーク）ティラノを翻弄し、暗黒（ダーク）ティラノでは届かない上空へと逃げ出した。そして、攻撃を諦めた暗黒（ダーク）ティラノはダイナソー竜崎のフィールドに戻っていく。

「攻撃表示の時、一度だけ攻撃を無効に出来る」

ビートビートル ☆3

属性：風

昆虫族

攻撃力1000 / 守備力1000

効果

一ターンに一度だけ攻撃表示で存在するこのカードへの攻撃を無効にできる。

「へっ、だけど、この攻撃には耐えられへんやろ！ 究極恐獣（アルティメットティラノ）で攻撃や！」

「っ?!」

暗黒(ダーク)テイラノの攻撃をかわして油断していたビートビートルが容易く究極恐獣(アルティメットテイラノ)に粉碎される。

総麻 LP2600↓600

「これでターン!この瞬間、罨カード発動、『リビングデッドの呼び声』!蘇れ、キングタウロス大公!」っ?!カードを一枚伏せてターンエンドや!」

総麻のフィールドに召喚されるキングタウロス大公を見て思わず表情を歪めるダイナソー竜崎。

「オレのターン、ドロー!」

事実上の最後のターン。少なくとも相手フィールドに切り札となりえるモンスターが二体も並んでいては不利は覆せない上にライフは僅か600しかない。大進化薬の効果の影響かで相手はまだモンスターを自由に召喚出来る。

新たにドローしたカードは良いカードでは有るが、それでもデュエルを終わらせる力を持つたない。

「罨カード発動、『針虫の巣窟』!デッキの上からカードを五枚墓地に送る!」

総麻は自身のデツキのカードを五枚墓地へと送り、手札のカードに手をかけるが、

「おい、ちよつと待て」

「…? どうかしたのか?」

「それだけか?」

「何が?」

「今の罠の効果や!?!」

「あー…最初のターンに伏せたけど、元々ブラフだったし。ギラザウルスに合わせて発動させても良かったけど、手札に上級モンスターが無かったしな」

「アホかあ! 自分のデツキを破壊するなんて、そないなカードに何の意味があるんや!?!」

ダイナソー竜崎の言葉に周囲も同じ意見なのだろう全員が頷いている。ブルーを初めとする一部の生徒達は分かり易く笑っている。

「意味なら有るさ。手札から魔法カード『死者蘇生』発動お! 墓地から舞い戻れ、古の赤き龍!!!」

炎の渦の中から現れる真紅のドラゴン…

「な、なんやてえ!?!」

「龍皇…ジークフリードオ!!!」

総麻のフィールドに雄雄しく降り立つジークフリード。キングタウロス大公と龍皇ジークフリード。

龍殺しの英雄の名を持つドラゴンの皇帝と獣槍を構えた甲虫の大公、バトルスピリッツの初期に誕生した二体のXレアがデュエルモンスターズのカードへと姿を変えてフィールドに並び立つ。

龍皇ジークフリード 攻撃力3000

「更にブラックモノケイロスを召喚！」

ブラックモノケイロス 攻撃力1800↓2200

キングタウロス大公 攻撃力2600↓3000

（へっ、攻撃力3000のモンスターを二体も召喚したのは流石に驚かされたけどな、ワいの伏せカードは『リビングデッドの呼び声』。究極恐獣（アルティメットティラノ）を復活させれば、相打ちにさせられてもこのターンで負ける事は無いで）

「バトル！ キングタウロス大公、暗黒ティラノを攻撃！ 獣槍、ゲイボルグ！」

「くつ、だけど…お前のフィールドのモンスターにワイの究極恐獣（アルティメットティラノ）を上回る攻撃力のモンスターはおらんで！ 相打ち「龍皇ジークフリードの効果発動!!」なんやと!」

ダイナソー竜崎 LP3000↓2600↓1800

「ブラックモノケイロスを生贄に捧げて…さあ、ジークフリード!」
【覚醒】せよ!!!

龍皇ジークフリード 攻撃力3000↓4800

「っ!? こ、攻撃力4800!? くつ、それで先に暗黒ティラノを…」

「それだけじゃないぜ。相手の切り札を倒した上で勝利する…それが完全勝利って奴だろ?」

「確かにその通りやな」

「龍皇ジークフリード、トドメだ。ドラゴンズラッシュユ!」

消えたブラックモノケイロスから出現した結晶を吸収した始まりの龍皇は、総麻の宣言と共に咆哮を上げて究極恐獣（アルティメットティラノ）へと向かっていく。回し蹴りの様に振るわれた究極恐獣（アルティメットティラノ）の尾を上空に飛ぶ事で避け、そのまま炎を浴びせる。究極恐獣（アルティメットティラノ）がそれを振り払うと自らの

打ち出した炎の中から飛び出したジークフリードの爪が究極恐獣（アルティメットティラノ）を粉碎する。

ダイナソー竜崎 LP1800↓0

ダイナソー竜崎のライフが完全に0になった瞬間、ソリッドビジョンが消える。
（…緑のデツキ…結構悪くない出来だな）

観戦していた生徒達が啞然としている中、デュエルディスクにセットしたジークフリードのカードを赤デツキの中へと納めなおす。

獄龍編

閑話02 『獄龍』

総麻SIDE

さて、早速だがリスペクトデュエルと言う訳の分からないモノがデュエルアカデミアには存在している。しかも、授業のカリキュラムの一つとして、だ。ある種の洗脳に近いと思うのは気のせいだろうか？

(……相手を尊重するのは良いが、寧ろそれを人に押し付けている時点でどうかと思うよな……)

悪い言い方をすればバーンや手札^{ハンデス}破壊、デッキ破壊、パーミッションと言った戦術を「卑怯だ、リスペクトに反する」と批判する思想になっている節がある。

何時からそうなったかは知らないが。主にプロデュエリストにも……特にアカデミアの卒業生に多く浸透してしまっている考え方で有るが、実はもう一つ性質の悪いモノが存在していたりする。

それは、「^{アンチ}反リスペクト」を掲げる『^{アンチ}反サイバー流』だ。

リスペクトデュエルを謡っているサイバー流に対するリスペクトに反すると言う理由で失格にされたデュエリスト達が結託して纏まった者達。

最初はインターネットサイトを利用した一種のコミュとして、リスペクトデュエルを謡うサイバー流に反対する者達の集まりだった。最初は行き過ぎたりスペクトデュエルに対する愚痴を言い合う程度だったが、何時からかアンチサイバー流デツキを互いに考える様になっていった。

反サイバー流はそれを切欠に妙な方向に進み始めていったのだ。俗に言う『サイバー狩り』だ。最初はサイバー流の門下生やアカデミアの卒業生のプロデュエリストに対して反サイバー流の関係者が互いに協力し合って倒す為、プロやアマチュアの垣根を越えて大戦相手のデツキを完璧に分析する事でアンチデツキ・対策デツキを完成させると言うモノを発端にして始まった事件だ。

最も危険なその流れはサイバーエンドドラゴンを持ったデュエリストを相手に反サイバー流の人間がアンチデュエルでサイバーエンドドラゴンを奪った事が危険な流れが強くなった原因とされているが、非公式なのでそれは分からない。

そう言われているのは、真つ二つに破られたサイバーエンドドラゴンが反サイバー流のHPに公開され、新たな集団が生まれた事が原因だ。

真つ二つに破られたサイバーエンドドラゴンを旗印に集まったサイバー流に対する

無理矢理なアンティデュエルを挑む集団。通称『獄龍隊』。

うん、それを知った時には驚きの余り錯乱したのはいい思い出だ。いや、獄将とか名乗っている人が大将じゃなくて良かったけど。……同じ名前なのは単なる偶然のようだ。

過去に存在したクールズ並に性質の悪いサイバーと名の付くカードを持ったデュエリストから無理矢理アンティを挑みデッキごと奪い取る一時期デュエリストの間での恐怖の代名詞となった。

だが、問題は『サイバー』と名の付くカードはサイバ一流関係もそれ以外も一般的に市販化されて持っている者もいると言うのが問題だ。

サイバーと名の付くカードを持つているだけで無理矢理アンティを挑まれるだけでなく、悪い時には暴力でカードを奪い取られる最悪な意味でのサイバー狩り。

サイバーと名の付くカードを無理矢理奪い破り捨て、燃やすと言うリスペクトデュエル、サイバ一流への憎しみが関係のないデュエリストにも飛び火した事件だ。

実際、それは反サイバー流のコミュでも賞賛される声は大きい^{アンチ}が、少なからず反サイバー流の中にも『流石に遣り過ぎだ』と言う意見が存在していた。

最も危険な時期は反サイバ一流のプロデュエリストに負け続きのアカデミア卒業生がプロ引退後に開いたカードショップへの嫌がらせや営業妨害から始まり、放火にまで

エスカレーターしていった。付け加えるなら、サイバー流デュエリストへの暴力事件等ほぼ日常的に起こっていた。

そして、その結果……獄龍隊の襲撃を恐れ、サイバーと名の付くカードを捨て、サイバー流道場の門下生達が一人また一人と去って行ってサイバー流と言う流派は名を残すのみとなって行ったそうだ。

後に獄龍隊が共同して作り上げ、多くのサイバー流の門下生達を葬ってきたアンチリスペクトデッキの基礎部分は、獄龍デッキとして今も持ち主達の暴挙と共に恐れられ続けている。

それがこの世界に於けるサイバー流の終焉である。

サイバー流が衰退した今はサイバー流の元師範が校長を勤めているデュエルアカデミアの卒業生のプロデュエリストに対してアンチアカデミアと言う思想に傾いているが、実はそれは余り強くない。アカデミアにも反サイバー流の考え方の人間は少なからず居る為だ。

獄龍隊もそれを切欠としたのかは不明だが何時しか自然解散された。だが、獄龍隊の旗印だった破られたサイバーエンドは今も反リススペクトの象徴である。

初めはオレには他人事だったが、デッキ破壊の青デッキを持っている以上無関係で居られないと思うべきだったと今では後悔している。

まあ、どうでも良い事だが、パーミツションについてはカウンタ^{トラップ}罠が卑怯なカードだと言っている連中に言いたい。ほぼどんなデュエリストも採用している『攻撃の無力化』も立派なカウンタ^{トラップ}罠だ、と。お前等も使ってるだろ……。

この流れに巻き込まれる事となった時、こう叫びたくなつた……『あのハゲ爺覚えてろ』と。……この恨みは何時か晴らず、校長。

取り合えず、今回の一件ではレッド寮のレッドは後が無いと言うだけでは無かつたと言うのが良く分かつた。

オシリスレッドのレッドが『危険信号』^{レッドシグナル}と言う意味のレッドでもあつたと知つたのは、三年生用のもう一つのレッド寮[〃]の存在を知つた時だつた。

……特に危険なアンチリスベクト思想の生徒を隔離する様に集められた寮、誰かが呼び始めたのか、かつて多くのデュエリストを恐怖させた集団の名を取つて呼ばれるようになった、その名を『獄龍寮』と言う其処を。

……いや、オレが獄龍寮に関わる羽目になつたのは制裁デュエルから数日の後……仲の良い女子生徒であるフェイト達と話している時、彼女達のファンと言う生徒達に絡まれたのが始まりだつた。

つてな訳で、決闘符録。次回からオリジナルシリーズ、獄龍編のスタートだ。

S I D E O U T

TURN—12

「天風総麻、今日は良いデュエルをしよう」

「いや、いいデュエルも何も……こうしてアンタと対峙してる時点で、オレは『最低最悪』の気分なんだけどな」

「……すまない……」

やたらと総麻へのブーイングが多い中、デュエルリングの中央でカイザーと呼ばれているデュエルアカデミアの最強のデュエリスト『丸藤 亮』と対峙する総麻は、自分の挑発と正直な気持ちも兼ねた嫌味に対してこうして素直に謝られると逆に対応に困ってしまう。

「さっ、『サイバー教』の皇帝さん、さっさと終わらせようか……。こんな茶番」

「『サイバー流』だ。ああ、始めよう。デュエツ……」

改めて挑発をしつつデュエル開始を宣言する前に即座にデッキに手を置いてサレンドー。当然静まり返る周囲。それを一切気にせずに、

「はいはい、オレの負け、オレの負け。お疲れ様ー」

「ま、待て!!!」

「なんだよ、皇帝さん。そっちの勝ちなんだから良いだろ、この茶番」

心底面倒そうに手を振りながら立ち去ろうとする総麻を呼び止める亮。思わず頭を抱えなくなる。

(全く……どうしてこうなった?)

何故彼がカイザーと戦ってるかと言うと、事は数日前まで遡る。

数日前……

その日の放課後、一度赤のデッキと紫のデッキを崩して『対ダーククリムゾン』の研究用のデッキを作って対策中であつた為に、いつもは六つのデッキを持っているはずがその日だけは合計で五つのデッキしか持って居なかつた。しかも、研究用のデッキはカードが不足しているために実戦用はその中の白、緑、青、黄の四つだけだ。

魔寮では何とか新たに加わった龍星皇メテオヴルムで勝てたものの、あの時のダーククリムゾンの口振りからすれば、絶対にまた総麻の前に現れるだろう。

新たに入手したチューナーモンスターであるレイニードルはシンクロモンスターこそ持っていないが効果も扱い易いので戦力として数えられるが、シンクロモンスターであるスコル・スピアについては未だにカードテキストが白紙の為に今の所戦力として数える事はできない。なので、手持ちのカードの中で対策を練るしかない。練るしかないのだが……

《力》を用いて封印した上に機の奥に仕舞いこんだカードを使え、と言う誘惑にも駆られるが……かつての持ち主の憎悪によつて狂った精霊の宿ったあのカードを使うのは流石に危険過ぎる。

実際、狂気の根底こそ違おうが同じく狂った精霊の宿った魔龍帝ジークフリードは己が原因とは言え、十二分に危険だと理解した。

なお、メインで扱っている赤デッキは調整中の為に使えなかったが、授業の実技では先日の制裁デュエルのダイナソー竜崎戦で本当の意味で初のお披露目となった緑のデッキによる速攻で決着を着けた為に大した問題ではなかった。

授業が終わった後は寮に帰って対ダーククリムゾン用の新しい赤デッキの構築と、紫デッキの再構築、他のデッキの改良でもしようと思っていた時に

「あつ、総麻」

「フェイト？」

偶然校門の前でフェイトに出会った。そこで暫くフェイトと話していると何処からか殺気を感じる。目の前のフェイトは気付いている様子も無いことから、器用にも総麻にだけ殺気をぶつけているのだろう。

（ダーククリムゾンの関係か!? 他のデッキで戦えるか!?)

赤のデッキが調整中と言う拙い時に来られたと警戒しつつ、青のデッキの納められたデッキフォルダに触れる。

デッキから召喚条件を無視して強力な魔龍帝ジークフリードを特殊召喚する効果を持ったダーククリムゾンの相手には、白よりも青の方が有効かと考えた結果の判断だが、

「おい、そのオシリスレッド！」

何故か出てきたのは、妙に殺気立った十人程のオベリスクブルーの生徒達だったと言
う訳だ。

「なんでお前みたいな落ち零れがテストタロツサさんと仲良く話してるんだよ!」

「何でって聞かれても……なあ？」

「友達だから、だよな？」

それ以外に何の理由が有るのだろうかと疑問に思う。

「お前……落ち零れのオシリスレッドの分際でテスタロツサさんと友達だ?!」

「そりゃ、高等部からの編入組みは女子以外は嫌でもオシリスレッドかラーイエローだろう?」

思いつきり鼻で笑い飛ばしながら、

「それにしても、このランク分けも妙に的を射てるよな」

「どう言うこと?」

総麻の言葉に聞き返すフェイト。

「ああ、元々アカデミアのランクのネーミングの元になったであろう三幻神の中で、オベリスクだけが効果発動しない限り攻撃力が4000と一定してるんだ」

「そう言えば」

「逆にラーは生贄の攻撃力の合計、オシリスは手札×1000と、数値は安定しない。オシリスは効果は強力だけどその分手札を使えない、数値の変動が激しく手札破壊で0にして戦闘破壊もできる」

「そう言われればそうだよな」

「そう、オシリスの効果を考えると最低限攻撃力2100以上必要だけだな。そして、三幻神の中でラーが最上級の能力と位に位置している」

ゆつくりと自分達を睨んでいるオベリスクブルーの生徒達へと視線を向けて、

「ラーイエローも外部からの成績上位者が居る為に、下手なブルーよりも実力者がぞろぞろと居る訳だ」

そう言った後、相手を挑発するような笑みを浮かべつつ、

「お前……オレ達が弱いつて言いたいのか？」

「さあな、条件次第でオシリスもオベリスクより強くなるってのは事実だ。十代が良い例だ」

「そこまで言うなら、オレ達エリートの実力を見せてやる！」

「いやいや、二度くらい勝ってるし」

そう言った後心の中で『万丈目の取り巻き相手だけど』と付け加えておく。

「さてと、それで誰が相手をしてくれるんだ？ ああ、全員相手なら纏めて頼むぜ、こっちも暇じゃないんでな」

「舐めやがって……だったら、望み通り全員で相手をしてやろう！」

「……そこで、『ふざけるな、オレが相手だ』と言う台詞が無い時点で、落ち零れ扱いられている相手に『私達は一人じゃ勝てません』と言ってる様なものなの、解ってるか？」

「うるせえ！　なんでお前ばっかり！」

「テストアロツサさんだけじゃなくて、高町さんや八神さんとも仲良いんだよ!」

「……なんでも良いから早く始めてくれ……」

ようするにこいつ等は彼女達と仲が良い自分に嫉妬しているだけだと。十代もそれなりに親しいが、どちらかと言えば総麻の方が仲は良いだろう。

付け加えると、月一テストではブルーの一年の中でトップクラスの實力の万丈目に公衆の面前で勝った十代よりもブルーに勝ったとは言え、相手が万丈目の取り巻きの一人だけで有る為に、まだ勝てる可能性があると思わせているのもあるのだろう。

少なくとも、挑発に乗って十人で戦うのは十人で戦えば何処かでミスが出るといふ思惑も有ったのだろう。

「そう言うわけで、少し下がってくれ」

「う、うん。でも、一人で十人も一度に相手にするなんて無茶だよ」

「いや、大丈夫。それでどうするんだ？」

「オベリスクブルーを舐めた事、後悔させてやる！ デュエル！」

『デュエル!!』

「……結局十人で、か」

互いのデュエルディスクが起動し、同時に各々のデュエリストのライフが表示される。

「行くぞ、オレのターン！ 『ゴブリンエリート部隊』を攻撃表示で召喚して、カードを

一枚伏せてターンエンドだ！」

「行くぞ、オレのターン……」

どうも完全にプライド捨てているのか、それとも挑発が効いたのか、格下と見下しているオシリスレッドの総麻相手に十人と言う大人数での変則デュエル。

最初のターンは互いに攻撃できないものの、相手のターンが終わって総麻にターンが廻ってくるまで矢張り結構な時間が掛かる。

そして、最後の一人のフィールドにモンスターが召喚されカードがセットされるとやっとな総麻のターンとなる。

「ドロー」

ドローしたカードに視線を向ける。良いカードは引けたが手札のカード一枚で大半の相手は片付く上に生き残ったとしても致命傷に出来る。相手へと与えるのは、ある意味では屈辱的な敗北。その為に今回は態々引き続き「青」のデッキを選んだのだから。

「オレはカードを三枚伏せて、『ハンマーゴレム』を召喚！」

総麻のフィールドに召喚されるのは一本足の簡易型の機械人形（ゴレーム）。

ハンマーゴレム ☆4 攻撃力1200/800

レベル4のモンスターとしてはかなり低い攻撃力。破壊耐性も無く、三枚の伏せカードが有るとは言え攻撃表示で曝すのは大人数相手にして攻撃を防ぐ為には、絶対的にステータスが足りていない。相手からは嘲笑う声が聞こえてくるが、総麻はそれを無視してデュエルを進める。

「ハンマーゴレムの効果発動！ このカードが召喚された時、フィールド上に存在するこのカード以外のカード一枚につき相手のデッキのカードを二枚墓地に送る！ オレのカードは三枚……」

「チツ！ デッキ破壊か、リスペクトに反するカードを使いやがって。でも、この人数だ、デッキ破壊されるよりも、お前のライフがゼロになる方が先だ！」

「少なくとも、一人相手に大勢でデュエル挑んでる時点で言う資格無いと思うぞ、その台詞。……お前達『全員』のフィールドのカードは合計して20枚以上」

『なっ!?!』

思わず相手達から声上がる。10人も的人数で同時に戦ったのに、それを逆に利用された形となった。

「墓地に送るカードの枚数は……合計46枚！ 47枚以上デッキに投入している奴以外は此処でゲームオーバーだ！ 行け、ハンマーゴレム！」

総麻の指示でハンマーゴレムが空高くジャンプし、約23体分裂して相手のデッキに

突撃していく。

『う、うわああああああ!!』

落下してくるハンマーゴレムに対する相手の絶叫と共に、デュエルディスクにセットされたデツキのカードが次々と飛び散って墓地へと消えていく。

そして、最後のハンマーゴレムが彼のフィールドに戻った瞬間、相手への最後の言葉を告げる。

「さあ、ターン……エンドだ」

総麻の宣言と共にソリットビジョンが一斉に消えていく。全員デツキに投入してあるカードの枚数は46枚以下だったのだろう。

デツキは最低40枚以上だが、その最低枚数でデツキを作るデュエリストが多い。故にこの結果は必然とも言えるが……

ある者は唾然と、ある者は腰が抜けているのか地面に尻餅を付いている中、ある意味恐れのかつた目で総麻を見ている。

「えつと……ちよつと、やり過ぎじゃないかな、総麻」

「……やつといてなんだけど、少し反省してる……」

全員の心境は恐らくフェイトのその言葉で説明できるだろう。流石に相手の人数を逆に利用したデツキ破壊によるワンターンキルは流石に遣り過ぎだろう……。

まあ、この人数を相手に一人一人を正攻法で戦うのは流石に面倒なので、纏めてデツキ破壊で片付けたくなるのも仕方ないと言えば仕方ないが。どうもデツキ破壊やロツクに耐性の無いデュエリストが多い気がするのは、間違いなく気のせいでは無いだろう。

「ち、ちくしょー!!!」

総麻とフェイトが会話していると、デツキ破壊で敗北して唾然としていたブルー生徒達が我に返ると、先程の負けの事を思い出したのか泣きながら叫んで逃げ出していく。

「今度は一人で挑んで来いよー」

「あ、あははは……」

トドメを刺す様にそう言つて手を振つて逃げ出していくブルー生徒達を見送る総麻にフェイトは苦笑を浮かべている。

その後はフェイトを女子寮まで送つた後、総麻もレッド寮に帰り……食堂で以前のダーククリムゾンに敗北したのが原因なのかデツキを見直している十代にアドバイスしつつ、その日は過ぎて行つた……。

その後、何度か……主になのは達三人と話している時にブルーの生徒に絡まれてはデツキ破壊で片付けると言う作業を繰り返していったのだが……。

「やれ、『英雄巨人タイタス』！」

「碎け、『機動要塞キャッスルゴレム』！」

相手の制服の色に合わせて青デツキによるデツキ破壊で嫉妬で挑んでくる連中を片付けるのが二日ほど続いた後、何日かは何も無かったのだが。

—オシリスレッドの天風総麻くん、直ぐに校長室まで来てください。繰り返します

……—

「呼び出し？」

「なんだろう？」

「さあ。廃寮の一件はもう済んだはずだろうし」

なのは達と話していると突然校長室に呼び出された。特に心当たりが無く頭を捻り

ながらも校長室に入ると。

「理解しましたか？」

「いや、全ツ然」

長々とリスペクトがどうか言う話を聞かされたが、興味ないので殆ど聞き流してたりする。

「ですから、君の使っているあのデッキはリスペクトに反しています。直ぐにそのデッキを捨ててくださいい！」

「いや、校長……だから何でだよ？」

「だから、それはリスペクトに反しているからです」

心底答えになって居ないと思う。要するに、デッキ破壊はリスペクトに反するかららしいが……

「あのさ、そう言う事は生徒にじゃなくてペガサス会長にでも言ってくれ」

「ペガサス会長は関係ないでしょう！」

「いや、関係有るだろう。あんたが言っているのはルールの根底に関係する話なんだから」
そもそもルールの上で使用を認められているカードを使って何が悪いのだ、と言う所だ。強力な効果を持ったカードは同時に莫大なコストも必要とする。リスクをメリックトに返られるかは使い方次第だが、少なくとも禁止・制限・準制限となるのはリスクに

対してメリットが大き過ぎる故だろう。

特に禁止などはノーリスクのメリットだけと言えるカードも多い。良い例は遊戯王（デュエルモンスターズ）史上最狂最悪の除去カード『サンダーボルト』だ。

だが、デッキ破壊が一つの戦術として認められている以上、使ったところで一切の問題は無いはずだ。

「何を言うのですか、デュエリスト一人一人の心がけが……」

「デッキ破壊やロック一つ対応できないで、何が未来のデュエルキングだか」

ぶっっちゃけ、未来の時間軸に入る運命に選ばれしデュエリスト・『不動 遊星』はロックもデッキ破壊もかなり酷い状況に追い込まれても勝っている。

「少なくとも……本当に実力が有るならロックだろうが、デッキ破壊だろうが、どんな相手にも対応できるだろう？」

これ以上は付き合いきれない、とばかりにそう言つて無理矢理に会話を切り捨てる。根本的にデッキ破壊にもロックにも弱点は存在している。そう言つて総麻は手を振りながら校長室を後にする。

（……リスペクトデュエルね……。聞こえは良いが、どう考えても大事な所を間違えてるだろ）

少なくとも、総麻の考えの中では禁止・制限のルールを守っている以上は鮫島校長の

言う所のリスペクトに反しているとは言えないと思っっている。そして、何より向こうの言葉はこう言う事に他ならない。

(……勝ち負けがどうでも良い、ね。確か、無印の頃はダイナソー竜崎はこう言っていたよな『勝つための努力は幾らでもしている』って。この言葉の後に聞くと、あいつ等のリスペクトは勝つ努力を放棄した言い訳にしか聞こえないだろ)

改めて思う。ダーククリムゾンと戦った時の闇のデュエルだけではなく、何かを賭けた『負けられないデュエル』も存在している。リスペクト等と言っている連中は、負けられないデュエルに直面した時、向こうの言う所の『リスペクトに反するカード』を使われて負けたら何とと言うのだろうか、と。

(……まあ、オレには関係ないか……)

この時の総麻はそう思っていた。だが、その日にちよつと気になったので『サイバー流』について調べていると、何故かサイバー流のPR用のHPに明日の日程でデュエルのネット中継を行うと言う旨が有った。しかも、

「対戦相手が……オレ？」

異名として『叛逆者』等と付けられた総麻の名前が有った。対戦相手は『皇帝』らしいが……。

「……上等だ……」

机に突つ伏すと直ぐに研究用のデツキを一度崩す。そして、青と白のデツキから数枚のカードを抜き取る。

勝手に妙な渾名を付けられた事も頭にきているが、了承も無しに妙な事に巻き込んでくれた事にも心底頭にきている。

「……精々楽しい動画にしてやろうじゃないか……」

黒い笑みを浮かべつつ、『テーマは三壞』と書いた紙を壁に貼り付けて明日の為のデツキを作り始めるのだった。

現在……

即座のサレンダーでこのデュエルを終らせようとしたが、無理だった様だ。互いのPが表示される。

「先行は君に譲ろう」

「いえいえ、一応は先輩なんだから、後輩として先手は譲らせていただきます。其方からどうぞ……皇帝さん」

「……………」

サイバー・ドラゴンの効果はよく分かっているので後攻の方が有利だろう。だからこそ、適当な理由で先行を譲ろうとしたのだが……。

つてか、このデュエルをともに始めてやる気も無い総麻だったが、これにはそう揉める事も無くコイントスで先行は総麻と決まった。

総麻 LP4000

亮 LP4000

「オレのターン、ドロー！」

ドローしたカードを一瞥、そして、手札から今回のデッキの一手目となるカードを使う。

「手札から『デモポーン』を召喚。ターンエンドだ」

総麻のフィールドに召喚されたのは紫の鎧を着た剣と盾を持ったデイフォルメされたガイコツの兵士。不気味さは無く召喚された際の仕草も、尻餅について外れたかけた

頭を慌てて拾ったりと何処か愛嬌がある。

デモポーン ☆2

攻撃力500 / 守備力400

『なんだよ、それー!』『真面目にやれー!』『ふぎけるなー!!!』

周囲から湧き上がるブーイング。当の総麻は気にした様子も無く、目の前に居る亮を一瞥している。

「オレのターン、ドロー」

亮は目の前にいる総麻を一瞥し、

「君がこのデュエルを快く思わない事は知っていた」

「?」

「だが、始まったデュエルで此処まで手を抜かれるとは思わなかった」

静かだが怒気を含んだ声でそう言われて改めてフィールドを見る。総麻のフィールドに居るのはデモポーン一体だけ。ステータスもレベルも低く、攻撃表示として出すのはミスとしか思えない数値だ。

「ああ、確かにデモポーンは弱いな」

「望みどおりこのデュエル、直ぐに終らせよう。俺は魔法カード『パワー・ボンド』を發動！ 手札のサイバー・ドラゴン三体を融合！ 現れる、『サイバー・エンド・ドラゴン』！」

亮のフィールドに現れた白銀の機械竜『サイバー・ドラゴン』三体が混ざり合い三ツ首の機械竜『サイバー・エンド・ドラゴン』が現れる。

周りからは『終った』や『ざまあみろ』や『当然だ』と言ったような声が聞こえるが……

（こいつ等……。つてか、皇帝さん……。ディスクの機能くらい使えよ）

サイバー・エンド・ドラゴン ☆10

攻撃力4000↓8000 / 守備力4000

「サイバー・エンド・ドラゴンでデモポーンを攻撃、エターナル・エヴォリユーション・バーストオ!!!」

（二応、相手のカードのデータの確認くらい出来るはずだろ？）

三つの首から放たれる光の奔流がデモポーンを飲み込み、巻き起こった爆煙が総麻の

「デモポーンの効果は破壊された時に発動する。デモポーンは主人思いで寂しがり屋なんだ」

総麻は笑みを浮かべながらそう告げる。

「攻撃表示のデモポーンとの戦闘ではプレイヤーはダメージを受けない。更に破壊された時、デッキから同名のカードを特殊召喚できる」

そして現れる新たなデモポーン。だから攻撃表示で出したのかと納得して次の行動に移ろうとする亮だが、

「デモポーンは寂しいってさ……一人で墓地に行くのは。だから、一緒に来て欲しいっていつてるぜ……皇帝さん、アンタの大事な切り札にな」

「何?」

「デモポーンが墓地に送られたターンのバトルフェイズ終了時……」

止む事の無い不気味な笑い声と共に紫の魂魄を引き連れた半透明のデモポーンが現れ、サイバー・エンド・ドラゴンに取り付く。

「破壊したモンスターを破壊する! さあ、【呪撃】せよ、デモポーン!」

デモポーンの笑い声が最大限に大きくなるとサイバー・エンド・ドラゴンは爆散する。

「サイバー・エンド・ドラゴン、撃破! 更にこの効果で破壊されたモンスターがエクス

トラデツキから召喚された場合、三度目のオレのターンの終了時まで同名のカードは特殊召喚できない」

次なるデモポーンを引き連れながら総麻は亮を一瞥し、

「楽しんでけよ、皇帝さん。アンタの為に用意した、三つの破壊をな」

TURN—13

「ううっ……やっぱり、総麻くんのカードの効果は何時見ても不気味なの」

「そうだね、私もちよつと苦手かな」

先程の不気味なデモポーンの笑い声に若干涙目になつてゐるのはさんと、そんなのはに苦笑しながら同意しているフェイトちゃんだった。

「せやなく、あれが無ければ可愛いんやけど」

「「え？」」

はやての発言に驚いたように視線を向けるのはとフェイト。確かにデイフォルメされたガイコツの姿には不気味さは無くて仕草に愛嬌が有るが、可愛いかと聞かれたら返答に困つてしまう姿をしているのがデモポーンだ。

「どうしたんや、なのはちゃん、フェイトちゃん？ デモポーンちゃんつて可愛いやん」
「「そ、それはちよつと……」」

「おいおい、今のは流石に油断しすぎじゃないのか、皇帝さん?」

そんな観客席の会話も露知らず自分のフィールドに存在するケタケタと笑っているデモポーンと一緒にサイバー・エンド・ドラゴンを失った亮へとそう言葉を告げる。

「今までの態度はブラフだったのか?」

「いや、本気だった。始まった以上は全力で戦うのがオレの主義なんでね。それに、ディスクには公開情報を確認する機能は付いてるぜ。結構便利なのに、何で使わない奴が多いんだか」

「っ!」

実際、デュエルディスクには互いの公開情報を確認する機能が付いている（漫画版G X参照、SUNの能力を確認する為に十代が使っていた）。

一応授業の内容にすら存在しない説明書に書いてあるデュエルディスクの基本的な機能なのだが、意外とその機能は使われていない。

「それに、どうもアカデミアの生徒ってステータスで油断する奴が多いから、上手く行くとは思っていたけどな」

「どう言う「強いカードの基準」攻撃力って言うDM最初期の悪癖が未だに残っている。そう言い返れば良いか？」なん、だど？」

亮の言葉を遮って総麻の言葉が響く。

「実際、デモポーンを前に自滅しなかったのは、フェイトなのは、はやての三人に十代と三沢だけだったな……」

ふと、このデュエルが始まる数日前に紫デッキのテストに付き合っただけの事を思い出す。しっかりと効果を確認して効果破壊で突破したり、連続攻撃可能なモンスターを仕方なく犠牲にして突破されたりしたのは記憶にある。

十代にしてみれば嫌な予感がしたらしい相棒（ハネクリボー）のお蔭で被害を軽減できている様子だが。

三沢は未知のカードに興味を持った事で一々総麻の召喚するモンスターのデータを表示しては暗記していた。興味があるのなら見せても良いのだが、本人曰く『答え（デッキ）を見せて貰う訳にはいかない』そうだ。

なのは達三人は元々攻撃力が低いエレキモンスターを使うフェイトの例も有り、攻撃力が低くても警戒は怠らなかつた。

「サイバー・エンドは失ったが、まだこのデュエルに負けたわけじゃない。オレは魔法カード『強欲な壺』を発動。ッ!？」

新たに二枚のカードをドローした時亮の表情が変わる。

「……『アーマード・サイバーン』とか『融合』とかでも引いたのか？」

「そんな事を答えるとも思ったのか？」

「いや。だけどな……仮にサイバーンなら、それを召喚されてたらオレは負けてたな。序でに融合だったとしたら、サイバー・ツインとサイバー・ドラゴンの単体召喚かキメラテック・オーバーならそれだけで最小限の犠牲でデモポーン達を一掃出来ていた」

「オレはモンスターをセット。カードを一枚伏せて、ターンエンドだ」

「オレのターン、ドロー！」

亮は総麻の指摘に反応を見せずにカードを伏せてターン終了を宣言する。そして、ターンは総麻へと移る。

「オレはハンマーゴレムを召喚！ 互いのハンマーゴレム以外のカード一枚につき、二枚相手のデツキから破棄。合計二枚で……四枚、破棄だ！ 第二の破壊、デツキ破壊を堪能あれ！」

何故か総麻が四枚の壁を正拳で砕く姿が幻視されると、ハンマーゴレムが上空へと飛び上がり亮のデツキへと突撃する。

「くっ！」

亮のデツキから『プロト・サイバードラゴン』を含んだ四枚のカードが墓地に落ちる。

「手札から魔法カード『二重召喚（デュアル・サモン）』発動。そして、永続魔法『悪夢の拷問部屋』を発動して……。デモポーンとハンマーゴレムを生贄に……」

アメジストと変わったデモポーンと、サファイヤへと変わったハンマーゴレムが一つに重なり合いダイヤモンドの宝石が表れる。

「白亜の輝きを宿し出撃せよ、『鎧神機ヴァルハランス』、スタンバイ！」

砕けたダイヤモンドの痕から出現するのは人型のロボット、白き機神『鎧神機ヴァルハランス』。

鎧神機ヴァルハランス ☆8

属性：光

機械族

攻撃力2700 / 守備力2300

効果

相手が魔法・罨・モンスター効果を発動させた時、フィールド上に表側表示で存在する魔法・罨カードを一枚セットしなおす事でその効果を無効にして破壊する。

バトルフェイズ中、自分フィールド上に攻撃表示で存在するバトルを行っていない『神機』と名の付くカードを墓地に送る事でその攻撃力の半分の数値だけアップする。

「なっ!? そのモンスターは!?!」

デモポーンと同じく今まで見た事の無いモンスターの登場に微かに表情を歪める亮。そんな亮の姿に、

「本邦初公開、オレの六つのデッキの切り札の一枚、鎧神機ヴァアルハランスだ! 行け、ヴァアルハランス! 伏せモンスターを攻撃!」

総麻の号令に従いマントに隠されたブースターを全開にし、加速をつけて拳を振り上げて亮のフィールドの伏せカードへと向かう。

「くっ!」

ヴァアルハランスの拳が叩き付けられ黄色いボディの機械族モンスター『アーマード・サイバーン』の姿が露になる。

アーマード・サイバーン ☆4

攻撃力0 / 守備力2000

アーマード・サイバーンの2000の守備力では☆4の中では高いとは言え、ヴァアルハランスの2700の攻撃力に抗える筈も無く一撃の元に粉碎される。

「さて、カードを一枚伏せて……ターンエンドだ」

総麻

LP4000

手札1枚

鎧神機ヴァルハランス 攻撃力2700

伏せカード一枚

『悪夢の拷問部屋』（永続魔法）

ヴァルハランスが総麻のフィールドに戻ると同時にターンは亮へと移る。

教師・生徒問わず観客全員が言葉を失っている。ライフこそ互いに1ポイントも減っていないが、帝王（カイザー）と呼ばれたデュエルアカデミア最強のデュエリストが目の前では切り札を失い確実に追い込まれていたのだから。

「オレのターン、ドロロー。……お前の言う通りのようだ。此処からはオレはもう油断はしない。全力で君を倒す」

「その一手目の油断（ミス）は結構痛いと思うけどな。忠告しとくぜ皇帝さん、ヴァルハランスの無限の【装甲】は簡単には突破できない」

「(装甲?) ああ、その忠告はありがたく受け取っておこう。だが、手札から魔法カード『天よりの宝札』を発動。互いのプレイヤーは手札が六枚になる様にドロウ」

「(出たな、原作効果だと即禁止カードだった、最強の手札増強カード) それはどうも」
互い手札が六枚となる。まだ四ターン目では有るが最初のミスはほぼ取り戻せたと
言った所だろう。

(さて、どう動く? サイバー・エンドと一緒にデッキのサイバー・ドラゴンは全部墓地だ。ハンマーゴレムの効果で一枚プロトも墓地に行っている。デッキの残りのプロト・サイバーを引いたとしたら二枚)

それでも、プロト・サイバーの効果を考えれば正規の融合なら直ぐには出て来れない。それに万が一の為の融合対策のヴァルハランスだ。流石に二度も効果の確認を怠る程愚かでは無いだろう。忠告しなかったとしても大して結果に変わりはない筈だ。

「更に手札から『貪欲な壺』を発動。墓地の三枚のサイバー・ドラゴンとサイバー・エンド・ドラゴン、プロト・サイバー・ドラゴンをデッキに戻して二枚ドロウ」

銀色の不細工な壺が墓地の五枚のカードを飲み込み砕けると、二枚のカードをドロウする。これで相手の手札は七枚、サイバー・ドラゴンも全てデッキに戻った。

(来るか?)